
スマイル大日本帝国（トータル版）

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマイル大日本帝国（トータル版）

【Nコード】

N1226Y

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

「スマイル大日本帝国」のトータル版。改稿はまだ。

ぐらぐらぐらぐら。

「うわっ地震だ」

「ママあっ」

「怖いいい」

午後10時。スーパー銭湯の休憩所でのこと。

テレビ画面から小さいニュースキャスターが地震にあわてて飛び出し、落下。床に激突。「いててててて」

小さいニュースキャスターを、ソファに座ってた、（キャスターから見て）巨大な赤ちゃんが人形と思ったのか、つかんで遊ぶ。

「ばぶばぶ。あー。あー」

「あっこら。いかん。やめて」

揺れは収まったが、小さいニュースキャスターはずっと赤ちゃんにおもちやにされてる。腕をつかまれて振り回されたり、頭かまれたり散々だ。

「助けてえ！」

（キャスターから見て）巨大なお母さんが自販機から帰ってきた。

「これこれよしおちゃん」「ばぶー。マンマー」

小さいニュースキャスターは助かったと思い、お母さんに飛びついた。

お母さんの胸を両手でぐわしとつかんでしまった。

「いやーん。エッチー」

お母さんが、小さいニュースキャスターを思い切り、ジュースの缶で殴った。

「うわああああああああ」

ニュースキャスターは床と平行にものすごいスピードで飛んでいく。

小さいニュースキャスターは、ゴミ箱の中にホールインワン！

「いてててて」

清掃のおばさんが、小さいニュースキャスターをつかんで、ゴミ袋に入れようとする。

「うわっやめろう。オレはゴミじゃねえ！」

小さいニュースキャスターはおばさんを蹴飛ばした。「痛っ！」
床に着地し、走り出す。早くテレビ画面に戻らないと殺される。巨大なやつらばかりだ。

しかし、休憩所のテレビは高い位置にある。あそこにどうやって戻ればいいんだ。

小さいニュースキャスターは、近くにいたちびっこにオレをテレビ画面に向かって投げてくれと頼んだ。

「いいよ。オレ野球やってるもん」

「すまぬ」

ちびっこは小さいニュースキャスターをつかんで構えた。

「じゃあ、おじさん。行くよ」

「う、うん」

ちびっこは、小さいニュースキャスターをつかんで投げた。

「わああああ。剛球うううう」

上手いこと、テレビ画面の中に放り込まれた。

やれやれ。ひと安心。

と思って、ニュースキャスターが周りを見渡すと、すでにニュース番組は終わっていて、動物番組に切り替わってる。

サバンナのだ真ん中。

目の前に、エサに飢えたライオン。

「うわあああ。怖いいいい」

「がるるるるる」

ニュースキャスターは、ライオンに追いかけられた。休憩所のみんなが大笑いして観てる。

ガッデム！！

朝目覚めて、まずは、テレビをつけ地震情報を見る。東日本大震災があつてから日課になつてゐる。ごつつい神経質になつてゐる。

テレビ画面では、ニュースキャスターがまじめな顔をして、淡々と情報を伝える。

オレは冷蔵庫からボルビックを取り出し飲む。災害用を買つたやつではあるが、そうそう地震になるわけではなく、だから飲んでしまふ。

「休みだつうのに、地震が心配で何か冴えない気分だな」

華子どうしてるかなと思う。華子は東京だ。東京は、福島原発がやられてから電力不足だという。

新聞を眺めてもやはり地震のことばかりだ。ほかにニュースないのかよ。こういうときほど、もっと明るい話題を書かんかい。

コーヒーを飲み、トーストをかじる。実に普通の朝。今頃、被災地ではてんやわんやなんだろな。

「小説でも書くか」

休日とはいえ、オレは非正規労働者である。休んでばかりもおれない。新人賞のメ切が近いので、その原稿を仕上げないといけない。ひたすら地道にキーボードを叩く。

書いてる途中で、どうも展開に無理があるなと感じる。

「なんかこれはいかんなあ。これはいかんぞ」

オレは、ひとまず、あまりに上手く書けないのでイライラしてきて、竹刀を持って駐車場に出た。

ひとまず、素振りをする。

「正社員死ね！ 正社員死ね！ 正社員死ね！」

別に正社員が悪いわけではないが、非正規労働者はいくら働いても低賃金のため、多額の報酬を得ている正社員に怒りが向く。

まあ竹刀で素振りしてるだけでした。本当に叩くわけじゃないから。

疲れてきたので、スポドリを飲む。

竹刀をアスファルトに置いたのが失敗だった。

野良犬が竹刀を拾って持った。

「あ。こら。お前。返しなさい」

野良犬は竹刀をぶんぶん振る。

「危ないから。ほら。返したまえ」

野良犬がにやにや笑っている。

「わんわん」

野良犬がいきなり竹刀でオレの頭を叩いた。

「痛いいいいいい」

オレは頭を両手で押さえる。

「こら返せ」

野良犬は竹刀を持って走り出した。

「待てこら。いかん」

野良犬が通行人を竹刀で叩いていく。

「わんわん」

「うわあ。何や、このドッグ」

「やめろおお」

貧乏神、というと、貧相でボロい服を着て陰鬱な顔をしたじいさん、というイメージがある。しかし、実際は逆である。リッチな服を着てメタボリックで、がははははと笑ってる。

オレの家に住んでる貧乏神は実に飯をよく食う。朝からどんぶり三杯食い、ステーキ肉まで食いやがる。そして、拔群の勘でオレのへそくりを探し出しては、競馬やパチンコに行き大金をせしめ、車買ったりブランドの服を買ったりしてる。そんなわけで、オレは、月収が40万あるに関わらず、家賃二万円の、トイレ共同のボロアパートの四畳半に、嫁さんもらえず、ふくよかな貧乏神と二人暮らし。

まったくなぜこんな悲しい生活を送っているんだ。

実はワンクリック詐欺に引っかかってしまったのだ。

ケータイのエロサイトを開き、うっかりボタンを押したら、三日

以内に99800円支払えと言う。払わないとどうなっても知らないぞと書かれてあった。

オレは焦りに焦り、がたがた震えたが、友人に相談すると、それは架空請求詐欺だから無視しときゃいいと言われ、安心した。

安心したのが大きな間違いだった。三日後に貧乏神が派遣された。「あんたの詐欺会社、あんたをオレんところに送って何の利益があるんだよ。確かにオレはマンションを追い出され貧困に陥ったが、単にあんたがうははな生活できるだけで、会社に利益はなかうに」

「オレも詳しくは知らないが、お前、生活が苦しくて負のエネルギーがバンバンに出てるだろ。そのエネルギーを電力に変えて電力会社に売ってるっていう話を聞いたことあるぜ。まあオレはただ仕事をするだけで知ったこっちゃないがね」

「何だそりゃ。仕事って飯食ってパチンコ行っただけやないか」

「そりゃそうだ。うははははは」

「ったく」

まあただいやなことばかりでもない。貧乏神の妹がこれまた美人なんだな。ロリ系でボインなわけよ。ツインテールがよく似合う。

貧乏神が来てしばらくしてから、またしても新たに派遣された。

なぜか、貧乏神の妹は、オレのことが好きらしい。もちろん、オレも大好きだ。

だから、貧乏神に内緒でデートしたりする。もちろん、ホテルでむっふふふふてなこともな。

なぜかよくわからないが、貧乏神の妹なのに貧乏神に全然似てない。高い服なんか着ない。いたってカジュアル。食事だって牛丼屋に連れてっても文句言わないし、カネ無さ過ぎて、デートが散歩というだけでも、オレと一緒にいられるのが嬉しいと喜んでくれる。料理も上手い。少ない金額で最高の料理を作ってくれる。

無論、そういう楽しいことの裏には、貧乏神の浪費があるゆえに、四畳半貧乏三人暮らしは変わらぬのであるが。今日など朝から松阪牛のサーロインをばくばく食ってやがる。オレと貧子ちゃん（

貧乏神の妹）は、漬物とごはんだけ。

うはははははと、つば飛ばしながら、うんこの話をして大笑いして肉をばくばく食ってる貧乏神を見てると、詐欺会社め、アジト見つけたら皆殺しにしてやると思いつつ、傍らの貧子ちゃんがオレの口についた米粒をとってくれるのが、最高に幸せ。おまけにその米粒を貧子ちゃんがおいしいと食べちゃうのだ。ああ。幸せ。

ひょっとして詐欺ではないのかなあと思う。貧子ちゃんといられると幸せなもの。ひょっとして、これがあのエロサイトの真のサービスなのだろうか。

しかし、貧乏神が、へそくりを盗んで競馬や競輪に夢中になってすっからかんになって帰ってきやがると、いややはり詐欺なのかなあ、とわけがわからなくなるのだ。

だいたい、オレが幸せなオーラを出せば、電力にならんから、詐欺会社にとって損なのでは？

てなことを貧乏神に話すと、

「あの会社、相当、あくどいで。幸せなオーラさえ電力にし売っちゃうらしいぜ」

何だそりゃ、と思いつつ、まあ別にオレは損してないからいいかな、とも思う。台所で包丁をとんとんしてる貧子ちゃんがこっち見て微笑んでる。「うへへへ。貧子ちゃん。エプロン姿、カワユスなあ」オレも自然笑みがもれる。まあこんな生活もいいかな？　うひ。

数日後、貧乏神が、無保険でフェラーリを乗り回していたら、事故を起こし、何千万という賠償金をオレが払うことになった。

ガッデム！！！！

震災で多くの支援がある。だから日本は素晴らしい。そんな奇麗事を偉そうにぬかすやつら、全員くそだ。

非正規労働者にまったく支援しないじゃないか。こんなにも生活

が苦しいのに無視だ。こんなに貧困に苦しんでるのに何の援助もしやがらん。

震災と非正規じゃレベルが違う。被災者は生きるか死ぬかだけど、非正規はそうでもない。ふん。だから非正規が結婚も子作りもできないでいいという話じゃないだろう。

だいたい、オレはレベルの話をしてんじゃない。

日本は全然素晴らしくない。それが言いたいだけだ。

うそをこくなど言ってるだけだ。くそであることを認めろってんだ。弱い者いじめを平気でする、うんこ国家である現実を直視しろって言ってるんだ。うそこいて素晴らしいなんてぬかすなっつてんだ。

「でもあなた低賃金でしっかり働いてるじゃないの」

ふん。それがいかんちゅうんだ。なんで低賃金で働かないといかんのだ。意味がわからん。がんばってがんばってスズメのポシェットに入るくらいの金額しかもらえない。意味がわからん。さっぱりわからん。理由がわからん。意味不明。

「みんなが助かってるよ」

ふん。なんでみんなの犠牲にならんといかんのだ。非正規に過大な負担をかけさす、この国はくそだ。うんこだ。早く死んでほしいよ。イライラするぜ。

「でも、あなたは立派だよ。立派な日本人だよ。まさしく国を守るために散っていった、特攻隊の子孫だ」

.....

「あなたがいるおかげで、日本が何とかギリギリで持ってる。ありがとう」

.....

「あなたがいなくなれば、日本は本当にくそになってしまうかもしれないね。あなたがいなくなれば、本当に日本はどうしようもない国になってしまうかもしれないね」

雪だるまが新聞を拾って広げて眺めている。

「まったく読めん。オレ、生まれたばかりだから字が読めないのな」
雪だるまはやくそに熱燗を飲みたい気分になったが、そんなことすりゃ溶けちまう。

雪だるまは、一人じゃやだなと思い、彼女を探しに歩き始めた。

「うわぁ雪だるまが歩いてる」

「これっよしおちゃん指さしちゃいけません！」

二丁目あたりに来たところで、一体の雪だるまを発見。

「すんげーかわいい！ 彼女にしたい！」

雪だるまは、しかしドキドキして熱くなってくる。ボディが溶け始める。こいつはまずい。

仕方ないので、思い切って告白してみた。

「つき合ってください！」

「なんだてめえ。ホモかよ」

何と男???

「えっそのあとう」

「オレにそんな趣味はねえ」

雪だるまは雪だるまに言われ焦る。これじゃまるで自分が変態みたいじゃないか。

「し、失礼します」

雪だるまが去ろうとすると、雪だるまが声をかけた。

「ちょっと待ちな」

「えっ何ですか」

雪だるまが振り返ると、雪だるまがホットコーヒーを投げた。

「飲みな。おごりだよ」

「ええええええええ」

飲んだら溶けてしまう。

「なんだよ。飲めねえってのかよ」

「いえっその」

雪だるまは焦る。汗がだらだら出てそれで少し溶けてる。雪だる

まはその様子を見てにたにたしてる。何だ。いやがらせなのか。

「いじめはやめなさい！」

別の雪だるまがやって来た。

「か、かわいい……」

雪だるまはまた恋をしてしまった。

「あんた。人を困らせて楽しいの」

「人じゃねえ。雪だるまだろ」

「屁理屈を言うな！」

今度の雪だるまは完全女だった。強気なところがまたぐつとくるなあ。

「助けてくれてありがとう」

「いいのよ。同じ雪だるま仲間だもん」

雪だるまと雪だるまはいい雰囲気になってきた。

ついにキスをしてしまった。

すると、何てこった。雪だるまの口と雪だるまの口がくつついて離れなくなった。

「んんんん」

「んーんーん」

もう一体の雪だるまが離れさせようと体当たりした。

すると、衝撃で、雪だるまの頭が吹っ飛んだ。

坂道を転がっていく。あわてて胴体が追いかける。丸いので坂道をころころ転がっていく。

この坂道がごつつ長かった。雪がくつついていき、転がるごとにだんだんだん大きくなる。

突き当たりの壁にぶつかり、やっと止まった。

なんと身体が二倍になってしまった。

女の雪だるまが巨大になった雪だるまを見て「あたし、メタボリック嫌いな」

「そんなあ」

ひとまず、顔をつけてもらう。

「そんなにでぶじゃねえ。やだなあ」

「そんなあ。そんなあ」

雪だるまはわんわん泣く。涙で少し溶ける。

「でも、やせればいいのよ」

「ひつくひつく。どうやって？」

「溶かせばいいのよ」

女の雪だるまが熱湯風呂を持ってくる。

「さあ入るのよ。たけし」

何か勝手に名前つけられてる。

「全部溶けちゃうよう。死んじやうよう」

「早く飛び込め。でぶ！」

女の雪だるまは目が血走っている。とんだドS女だ。

雪だるまは、このままでは殺されると思い、走り出した。

「あつ待て」

あわて過ぎたのか雪だるまは車道に飛び出し、車にはねられた。

宙を舞う雪だるま。

「あれー」

トラックの荷台に着地。「あらららら」

何とそのトラックは鹿児島行きのトラックだった。

ガッデム！！

あまりに低賃金で重労働過ぎる。

負村勝彦は、本屋で平積みの本の上にレモンを置いてしまった。

意味はない。ストレスからだ。

決して著作権侵害ではありませぬ！

勝彦はイライラするので、自販機で水を買った。飲むためではない。

頭から被った。

「気持ちいい！ 最高。イエイ！」

周りの人が白い目でじろじろ見る。

「動物園のパンダじゃねえぞコラ！ コアラだぞ！」

言葉のチョイスも微妙におかしい。完全にストレスが原因だ。

勝彦は、さすがに精神科の門を叩いた。

「先生。わたしはおかしいですか」

「顔はおかしいですね。でも精神は正常です。不景気だからみんなテンパってるだけです」

やぶだな、こいつ。普通、初対面の人の悪口言う？

ただ美人でボインの医者だったので、そんなに腹は立たない。

「先生。ぼくと結婚を前提に付き合ってください」

「あたしは正社員としか結婚しないわよ」

勝彦はムカついたので、女医をレイプしてやろうかと思った。しかし、勝彦にも常識はある。そんな犯罪なことはしない。

病院の壁に立ち小便した（軽犯罪！）

車椅子を引いた医者に見えられたので、小便を医者と車椅子の患者にかけ散らして逃げた。「うわっ汚い」「かけ山さん！」

もうだめだ。街で、かわいらしい女子小学生を見ただけでレイプしたくなってくる。まともな状態じゃない。女が欲しい。むちゃほしい。我慢できない。頭がはじけそう。破裂しそう。でも、低所得非正規労働者など誰が相手にするだろう。不況に生きる女どもは経済的に力のある正社員か公務員かやぐざか東野圭吾しか相手にしない。

勝彦は、郵便ポストを見て、むらむらしてきた。赤いしかない。美人だ。セクシーだ。

勝彦がすでに末期状態であることは、賢明な読者諸氏におかれては自明の理でありましょう。

ここから先は、ちょいエロになるので、小学生低学年以下の子供は、保護者同伴でお読みください。なぜ子供に敬語使ってるの。

勝彦はたまらなくなってきた、郵便ポストをやらしい手つきで触り始める。

「ああ。かわいい。たまらん。かわいいねえ。ふがふが」

郵便ポストが黙ってるのをいいことに、勝彦の行動はエスカレーターする。

ズボンとパンツを脱ぎ、ジャンプして、郵便ポストに飛びつき、自分のちんちんを、郵便ポストの投函口に突っ込んだ。

「あ。気持ちいい」

腰を動かそうとしたが、投函口が狭いため、挟まってしまい動かせない。

「これはいかん。痛い。もう抜こう」

しかし、抜けない。

「あれ。えい。やあ。おかしいな。抜けない。抜けないよう」

そりゃ、ちんこがギンギンにでかくなってるから抜けないのである。方法はただひとつ。エロくないことを考えることだ。

しかし、勝彦は、頭がエロでいっぱいである。郵便ポストにあんなことしてこんなこととしてという妄想でいっぱいである。ちんこがふくらんだまま、なかなか小さくならない。

見回り中の警官がやってきた。

「あっ」

警官は、見て見ないふりをして、そのまま去った。

理由は簡単である。

ほかっておいた方が小説的に面白いからである（リアルでは、怖い）

「うーん。抜けない。痛い。ちんこ痛い。血が出てきた。痛いいいいいいいいいい」

ガッデム！

国会は至急、非正規対策法案を可決しろ！！

オレの好きな女が二人とも今、ある種のピンチ。

一人は、今、お母さんが入院してる。手術などをしてる。ちなみに、お父さんはすでに他界してる。

一人は、お母さんが三月に他界した。ちなみに、お父さんはその少し前に他界してる。

こんなとき、支えになってやりたいオレではあるが、非正規労働者ゆえ、金銭的な支援がまるでできない。

小説を書くしかない。小説で稼いでお金をあげるとかそういうことではなく、一本でも面白い小説を書き、二人を喜ばしたい。

二人の笑顔が見たい。
なぜか。

二人とも仕事を懸命にがんばってるからだ。オレはがんばってる女が好きだ。

ちなみに、かわいい女も好きなのだが（矛盾はしてないよね？ 両方好きってことだから）

「あたしがかわいくないってこと！」（ライス、ジャニファールとキヤサリンに回し蹴りされる）

ちなみに二人と言ったが実はもう一人いる。ただ、まだ彼女は中学一年生だ。犯罪的なことはいけない。娘がいたら娘ほどの年齢ゆえに、子供をかわいがるような気持ちになろう。

彼女もまじめゆえかたまにブルーになる。

彼女が笑顔になる小説も書こう。ジュディ。毎日泣いたり笑ったりして少しずつ成長してね。

ますます悪化する非正規雇用問題。イライライライラする。公園でおいじさんたちがのんきにゲートボールしてるのを見かけると、こいつらを皆殺しにすれば、負担が減り、多少ラクになるぞと悪魔がささやく。

また、公園で、ちびっこたちが遊んでるのを見かけると、こいつらを皆殺しにすれば負担が減り、多少ラクになるぞと悪魔がささやく。天使があわてて止める。未来あるちびっこを、今までがんばってきたおいじさんたちを殺すんじゃない。

しかし、この怒りをどこにぶつけなければいいんだ。朝から晩まで働き結婚すらできない。会社や世間に訴えても自己責任で片づけられる。また今日も踏切の前に立つ。

生きにくいことこの上ない。息が詰まりそう。うわあああと叫びたい。

まあオレが未熟なのもあるけどね、それがすべてじゃない。世の中、複雑過ぎる。

まあ簡単なのがいいってわけでもないけど、複雑なのがいいってわけでもない。

「うわあああああ」

オレがロックスターなら皆がきゃーきゃー言ってくれるだろう。

あいにく、オレはしががない作家志望の三十路非正規労働者。

街の中で急に叫んだので、みんながびっくりしてる。

やはり、ポリスマンが来た。

「きみ。きみ。街の真ん中で大声で叫んじゃダメでしょう」

「す、すみません。何しろ低賃金重労働でイライラしちゃって」

「よろしい。ならいいところを紹介してあげよう。ついてきなさい」

「は、はあ」

おまわりさんのあとについていくと、とある建物にたどり着いた。看板には「通り魔センター」と書かれてある。

「??????」

中に入り、受付で支払いをすませると、奥の部屋に入る。けっこう広い。

奥のドアから人が出てくる。よく見ると、それは、今、活躍してる政治家たちだ。

「??????」

本物なのか。似てるけど、ちょっと違うな。動きがぎこちない。表情も虚ろだ。

「さあ包丁を持ちなさい」

「え」

「包丁で、あいつらを斬りつけていくんだ。何。あれらは政治家に似せた、柔らかい材質で作られたロボットだからかまわん」

オレは変な汗が出る。このセンターを作ってから、世間の犯罪が減ったそうだ。

オレは躊躇していたが仕方ない。

まずは、最初に歩いてきた、内閣総理大臣にそっくりなロボットの胸を刺した。

「うぎゃああああああ」

血しぶきをあげた。声もリアルだ。

「気にするな。本物の血じゃないよ。どんどん斬り倒せ」

次に野党の総裁、次に与党の誰か、と、オレは迫りくる敵ロボットを、包丁でどんどん斬り倒して行った。

「うぎゃああああああ」

「むぎゃああああああ」

ざああああああああ。

てるてる坊主が悲しげな顔をしている。

よっくんは、つまらなそうに、部屋でゲームをしている。本来なら今日、家族でデイズニールランドに行ってる。

よっくんは、ゲームもつまらなくなってきた、畳の上に仰向けになる。

ざああああああああ。

いつの間にか寝てしまい、お母さんが毛布をかけてあげる。

その頃、犬小屋で飼った犬のジョンが新聞を眺めている。

ざああああああああ。

「えらい犠牲者だな……」

一昨日、東日本で大震災が起こった。

ジョンはみかん箱の上に原稿用紙を広げ、小説を書き始めた。

書いては丸め書いては丸めの繰り返し。小屋には読みかけの文庫が散乱している。

ジョンは疲れてきたのでホットココアを入れて飲んだ。

「ふう」

ざああああああああ。

ジョンはよっくんに散歩に連れて行ってもらおうと思い、ケータイで電話した。

「あっよっくん。散歩連れてってよ」

「雨降ってるじゃないか」

「車で行こうよ。オレ運転するから」

「それ、散歩って言うのか」

ジョンは毛皮を着て、外に出た。よっくんも、寒いのでジャンパーを着てる。

ざああああああああ。

二人でドライブに出る。

「ジョン。小説どうだい」

「まだ知らない漢字が多いから、ひらがなが多いよ」

「ふうん」

前を猫が飛び出した。「あっ危ない」

ジョンはブレーキしようとしたが、何とジョン、犬ゆえ、ブレーキまで足届かへん。

どーーーん。

ガードレールに突っ込んだ。

猫は尻餅をついて、がたがた震える。

ぐちゃぐちゃの車の中で血だらけのよっくとジョン。

ざああああああああ。

ざああああああああ。

震災震災やかましい。テレビ観てもネット開いても、職場行って

も、話題は震災震災震災……いいかげんウンザリだ。

増村勝男は、原付を飛ばす。雨が激しい。寒くてめげそうだ。

「くそつ。非正規雇用問題をもっと話題にしろ。十年も低賃金重労働なんだぞ。震災なんて今日起こったばかりじゃないか。話題になんかするな」

勝男がむちゃくちゃなことを言ってるのは作者には解る。ただ、勝男には解らない。当然だ。それほど貧困に苦しめられている。

勝男は、あるマンションの前に原付を停めた。このマンションには、勝男の彼女、大沼華子が住んでいる。

勝男は華子の部屋のチャイムを鳴らした。

「おかしいな。いないのかな。もう仕事終わってるはずだけど」

何回チャイムを鳴らしても出ない。勝男はイライラして、ケータイで電話してみた。でも、出ない。「おかしいな。何かあったのかな」

勝男は、ひとまずどうにもならないので、原付にまたがり飛ばした。雨はますます激しくなっている。

「くそつイライラするなあ。何で働いても働いてもスズメのポジションに入るくらい金額しかもらえないんだ。全員正社員でいいじゃないか。まさか経営者のやつ、全員非正規にしようと企んでるんじゃないだろうな」

勝男は原付の上でうわああああと叫んだ。気が狂いそうだ。政府からも援助されない。企業は対策を練ろうともしない。

声は雨の音にかき消される。

「ふぎゃああああ」

野良猫をはねたが、気がつかない。

勝男は雨に打たれながら涙が出てくる。何でこんなに労働者間に格差ができるんだ。ある層は結婚でき、ある層はできない。こんなバカな話があったたまるか。いいかげん通り魔でもしたくなつてく

る。

雨はますます激しくなる。

急にケータイが鳴る。勝男はめんどくさいので原付に乗ったまま、電話に出た。危なすぎる。「なんだ」「ふっふふ。お前の大事な華子という女を誘拐した。返してほしければ至急」「わあああああああ」

勝男はガードレールに突っ込んだ。「もしもし！ おい！ もしもし！ 聞いているのか！」

アスファルトに転がってるケータイから犯人がわめいてる。
ざあああああああああ

原付は、広島原爆の被爆者のようにぐったりしてる。

「いてててて。この野郎。脅かすなよ。今日はエイプリルフルじゃねえぞ」

勝男はよろめきながらケータイを手にとる。頭血まみれ。

「うるさい。マジだ。早く来い。場所と時間は……」

勝男は一応、メモをとる。紙がびしょ濡れになるので、イラついてボールペンを放り投げた。ついでにヘルメットも叩きつけた。

「覚えた！ 待ってる。今すぐ行く。あ。しかしやっぱどうしようかな。オレ金ないもん」

「女はどうなってもいいのか！ 今女に代わる！」

華子が電話に出た。めっちゃめっちゃにわめいてる。

「かっちゃん！ あなた、非正規だからお金ないでしょう！ 無理しないで！」

「し、しかし。華子の命が……」

「かっちゃん！ ああ。いや。おっばい。いや。だめ。そこはだめ」

「華子！ 華子！ ああ！」

ざあああああああああ

「てか、何でお前はオレらがつき合ってること知ってんだ！」

「それはな、まあ簡単に言う……」

というか、だんだん声が聞き取りにくくなり、ついには聞こえない

くなった。当たり前だ。ケータイは水に弱い。

「どうしよう。原付壊れちゃったし、警察に言ったら殺すと言うし」

その頃、アジトの小屋では。

ざああああああああ。

「すごい雨だな。ふっふふ。早く来ないかな」

犯人は拳銃を磨きながら、いやゝな笑顔を見せる。華子が縛られたまま、わめく。

「無理よ！ かつちゃんお金ないもん」

「ふん。闇金か何かに借りるさ」

「何であたしたちがつき合ってること、あんたが知ってんの！」

「ふっふふふ。それはな」

どおおおおおおおおおん。

「うわっ」

「きゃっ」

窓ガラスが割れ、何か飛び込んできた。

「な、なんだこれ」

飛んできて床に転がったものを見ると、ボーリングの玉。

「????????」

窓を見ると、自衛隊がずらりと小屋を包囲してる。

「あの野郎」

自衛隊の隣で勝男は腕を組んで勝ち誇ってる。「ふっふふふふ。

警察には言わなかったぞ。ふへへへへ」

バカである。完全に華子の存在を忘れてる。おそろく、ボーリングの玉をどーんと飛ばすマシンが気になって気になってしょうがないのだろう。子どものように夢中になってる。

「軍人さん。これいくらくらい？」

「こらっ危ないから触っちゃだめ！」

ざああああああああああ。

「あいつ、何て頭の悪さだ。彼女がいるというのに」

「かつちゃん、あなた、持ち前のアホさとクレイジーさが全面に出てるわ!」

どおおおおおおおおん。

また窓からボーリングの玉が飛んできて、華子の頭を直撃。「ぐはっ」

華子は倒れ、即死。関西人でもないのに「なんでやねん」という表情をしてる。

「や、野郎。とんでもねえ野郎だ」

犯人はおろおろするが、どうにもならない。勝男の頭の悪さは筋金入りというのは冒頭を読んだ読者にはわかってるだろう。まともな非正規労働者なら、今の会社の業績の悪さをよく知ってる。そして、正社員の過酷さも。

どおおおおおおおおん。

どおおおおおおおおん。

次々とボーリングの玉が飛んでくる。

「お、お母ちゃあああん。た、助けてえええええ」

「うはははははは。おもしろい」

「君、性格悪いね」

自衛官も呆れ顔だ。てか、自衛官も頭悪いな。

どおおおおおおおおん。

どおおおおおおおおん。

ざああああああああああああああああああああ。

上司に怒鳴られお客様に怒鳴られ、むちゃくちゃこき使われて、スズメのポシエットに入るくらいの金額しかもらえない。

定食屋で一番安い定食に箸を伸ばすも、気分が悪くて食が進まない。

テレビで、ニュースキャスターが、東北地方太平洋沖で大震災が起こったとしゃべっている。

「ふうん。地震かあ。だから何だ」

地震が起きようが起きまいが、非正規労働者の生活がよくなることは一生ない。

「こっちでも地震起きないかなあ。んで、正社員が全滅しないかなあ」

疲れ果てており、まともな思考回路になってない。

「東北地方、いいなあ。たくさん正社員が死んだんだろ。羨ましいなあ」

非正規労働者もたくさん死んでるだろ！

勝男は、定食屋を出て街をふらふらさまよう。包丁を振り回し、通行人を次々と斬りつけたい気分である。

しかし、こらえる。勝男は小説を書かないといけない。

しかし、怒りが増幅し、それが外に発散できないとなると、自然に自分に向かう。

いつの間にか、踏み切りの前に立ってる。

「うう。うううう」

電車が通り過ぎた。

やはり、死ねない。小説を書かないといけない。「よし」

勝男は、早足でアパートに向かった。

「オレには小説しかない。被災者が少しでも元気になるような小説を書けるように技術を磨かないといけない」

そりゃそうだ。被災地に物資を送ろうにも、勝男はカネがない。

月収がわずかに13万円である。

だけど、震災で暗く陰鬱になった日本を元気にさせる小説なら書ける。紙とペンがあれば書ける。

オレは引きこもりを3年、非正規労働を10年、実に13年、裏街道を歩いてる。現在、35歳。闇の13年である。いわば、長いトンネル。百キロくらいあるトンネル。

しかし、やっと、今月末、すばる文学賞に投稿することができる。

光が見えてきた。長かった。いよいよ表舞台に立つことができる。嬉しい。めちゃくちゃ嬉しい。

と喜んでいるが、それは当選すればの話である。落選すれば、また非正規労働に戻らないといけない。あるいは、当選したとしても、小説一本で生活できなければ、非正規労働を続けるしかない。

すばる文学賞の応募総数は確か去年1300点だったらしい。あるいは、一万部売ったとしても印税が150万円。まだまだ裏街道を走らないといけない可能性が高い。胃がちぎれそうである。裏街道は暗くじめじめしてるからやだなあ。

一体、オレはどこに行こうとしてるのか。何を目指してるのか。一言では言えない。そのあたり、複雑怪奇なのだ。

とにかく、小説に関しては、自己責任でがんばってくしかない。誰に頼まれたわけでもない。自分が選択したのだ。

しかし、非正規労働まで自己責任にされてはかなわない。企業は雇用責任をきちんと果たしてほしい。十年も勤務してるのである。正社員に準じた社会保障をするのは企業の当然の義務だ。非正規労働に関してはオレは選択していない。実際に、何度か辞めさせてくれと頼んでる。その度に引き止められているのだ。それなのに自己責任で片づけようとは怠慢にも程がある。

しかし、企業のこういった理不尽なシステムというのは、半ば完成されてしまっている。あきらめず、根気よく主張していかねばならぬだろう。何しろ命がかかっている。

もう震災のニュースはやめてくれ。憂鬱になる。もっとお笑い番組を流して愉快にさせてくれ。

特に最近仕事が激減して本当に生活が苦しい。震災のニュースばかり流されると気が滅入って自殺してしまう。もっと楽しいニュースを流してくれ。

悲惨悲惨なニュースはもうウンザリだ。そんなもんを流さなくとも、非正規労働者は低所得過ぎてすでに悲惨なんだ。もっと愉快

な番組を流して、この悲惨な気持ちを吹き飛ばしてくれ。

悲惨なニュースはもうたくさんだ。今すぐやめろ。報道するな。自殺したくなってくる。

東日本大震災と非正規雇用問題。内容は異なるが事態は深刻という点は共通する。被災者と非正規労働者。共に生きるか死ぬかという、苦しい生活を送っている。

なぜこんなことになってしまったんだろう。被災者も非正規労働者も何も悪いことをしていない。むしろ、社会のために必死に働いてきた。なのに、なぜ地獄の苦しみを味わわねばならぬのだろう。神は存在しない。悪魔の天下だ。

非正規労働者と被災者が幸せになる日は来るというのか。さっぱりわからない。ずっと不幸なままなのか。そんなバカな話があるか。なぜ一生懸命に働いてきた者たちが不幸にならないといけないんだ。おかしい。何かが決定的におかしい。

しかしそんなことを嘆いてもどうにもならない。打開策がない。地震をなくすことも非正規労働をなくすこともできやしない。

地震なくなれ！

全員正社員にしろ！

虚しい叫び。そんなこと不可能だ。一体どうすればいいんだ。

とにかく、地震は廃止しないといけない。廃止しないと、不幸な人間が量産される。

非正規雇用も廃止して、皆正社員制度を導入しないといけない。しないと貧困に苦しむ人間が量産される。

しかし現実的には不可能だ。しかし実現させないと、本当に未来がない。

どうすればいいんだ。一体どうすればいいんだ。わからない。わからない。

どうすれば、被災者を生まずに済むのか。どうすれば、貧困をなくすことができるのか。

考えろ考えろ考えろ考えろ。

「非正規労働者支援にご協力お願いしまーす」

「お願いしまーす」

やばい。全然来ない。さっき、光子ちゃんのボインにつられてエロ小学生が一円入れたきりだ。

「被災地支援にご協力お願いしまーす」

「お願いしまーす」

「ようし。五千円入れてやる」

「あなたっやめて。それ生活費よ!」

「うるさい。被災者を見殺しにできるか」

いまましい。向こうめっちゃ繁盛しとるやんけ。むっちゃ人来てもうかつてるやんけ。

こっちは誰も来ない。何だこれ。アマチュア作家と東野圭吾くらい差がある。

オレたちは大声でわめいた。

「非正規労働者支援にご協力お願いしまーす」

「お願いしまーす」

光子ちゃんが業を煮やしたのか、脱ぎ始めた。

「あっ光子ちゃん。やり過ぎ」

「いくわよー」

光子ちゃんはブラとパンティー一丁で踊り始める。

だんだん人が群がってきた。被災者支援の募金の人たちがぽかんと口を開けて見てる。

オレたちは猥褻物陳列罪で警察に連行された。
ガッデム!

震災震災震災……うるせえ!

それより、非正規労働者の待遇を何とかしろ。何でこんなに貧困

に苦しまなきゃいけない。何も悪いことしてない。毎日毎日必死に働いてる。なのに、なぜ、非正規労働者にはスズメのポシェットに入るくらいの金額しか支給されないんだ。

「被災地には物質がたくさん届いています。日本人は何と素晴らしい民族なんでしょう」

「うるせえ！」

オレは金属バットでテレビを叩き壊した。非正規労働者をこんなに苦しめる国のどこが素晴らしいんだ。しかも、非正規労働者は1700万人もいるんだぞ。そんなにたくさんの人に貧困を強要するとはこの国も末期だ。恥を知れ、恥を。

ピンポーン。

「なんや。こんな時間に」

「被災地への募金お願いしまーす」

オレは募金箱を持った男の頭をハンマーで叩いた。

「ぐげ」

目ん玉が飛び出る。

倒れた男の腹を何回も何回も何回も蹴飛ばす。

「うるさい！ 震災震災うるさい！ 被災者がそんなに偉いのか！ 非正規労働者はスズメのポシェットに入るくらいの金額しかもらえないほどゴミなのか！」

イラつくイラつくイラつく！

ざああああああああああ

その頃、福島原発でフリーターが日給9000円で作業を続けていた。

またしても不謹慎なことを考えてしまう。

テレビで、枝野官房長官が記者会見してる隣で、小さい女の手が手を振り振りしてる。手話してる。

オレは、これを観て、女性が遠くから枝野官房長官に「大変です！

大変です！」と必死にサインを送ってるにも関わらず、官房長官が全く気づいてない、というストーリーを勝手に脳内で作って、一人くすくす笑ってしまった。

不謹慎である。震災から精神が危うい。ギャグでバランスをとろうとしてるのかもしれない。

微妙に政府批判になってるな。ギャグには風刺という機能もある。

我輩は猫である。名前はトム吉という。

なにゆえ、このような妙ちきりんな名前になったかといえば、飼主たる旦那さんが日本人で、奥さんがアメリカ人であるためである。我輩は、天気の良い日に、彼女の華子と、遊園地に行った。

華子はかわいらしい。我輩は好きである。

お化け屋敷に入ろうということになった。我輩、怖いのは苦手であるが、華子が抱きついてくるかも知れないとやさしいことを考え、入ることにした。

「トムちゃん怖いねえ」

「ははっ大丈夫だよ。しっかり腕につかまってな」

全然大丈夫じゃない。むしろ怖い。がたがた震えてしまう。

「きゃあああああああ」

どこからか悲鳴。しかし、真っ暗なのでさっぱりわからない。

本当に怖い。我輩、もう家に帰りたいにやあ。あ。つい、にやあと言ってしまった。

華子がしくしく泣き始める。女の子だからしょうがないね。

我輩も泣きたいが男なので泣けぬ。

我輩たちはびくびくしながら、闇の中を進む。

と、何とまあ不思議なことだ。少し明るくなってきたので、どうしたことかと思ってたなら、月が出てたのだ。

「今まで雲に隠れていたのね」

華子は納得していたが、我輩は納得がいかない。ここは外じゃないぞ。お化け屋敷の中だぞ。

オレは、間違えた、我輩は、華子に「あんな月はまやかしだよ」と言うが、華子は「ロマンチックね、うふふふ」なんて言ってる。

我輩は、でも確かにそうかもなあと思い、ベンチに座り、二人で月を眺める。

ざざあ。

波の音が聞こえる。いつの間にか前に海が広がっている。

「トムちゃん。潮風が気持ちいいねえ」

「そうだねえ」

なかなかいい雰囲気になったのでキスをした。

本部長が校舎に来たとき、「客商売です。頭ばさばさなのを何とかしてください」と言われた。一応、社会人なのでニコニコして「わかりました」と答えたが、心の中では、本部長の頭をハンマーで何回も何回も叩いていた。

床屋に行けないのはカネがないからである。仕事が激減した。カネがあれば床屋に行ってさっぱりしたい。ならば、本部長が言うことは二つ。「苦しいけど、がんばりましょう」「床屋代はボクが出します」これだけでいい。これだけで非正規講師は精神的にラクになる。店に専務が来た。その時、朝会で専務がこう言った。「被災地では仕事のない人がたくさんいます。我々は仕事があって幸せです」社会人なので黙って聞いていたが、心の中で、専務の胸を包丁で何回も何回も刺していた。オレたち非正規労働者は正社員と異なり、毎日毎日が貧困で地獄の苦しみを味わっている。この世の地獄に暮らしている。ならば、専務が言うことはただ二つ。「被災地も非正規労働者も苦しいとは思いますが、社会のためにがんばりましょう」「みなさん。あとでラーメン屋に集合してください。私がおごります」これだけでいい。これだけで、非正規店員は気持ちが多少ラクになる。

なれば仕事も上手く行くだろう。なのに、本部長も専務も言わない。仕事がちやくちゃになってもいいのか。一体、何がしたいんだ。

何も考えてないのか。お気楽に生きてるのか。

上の人間の考えてることがいまいち解らない。一度、脳を解剖してみたい。

東日本で震災が起きてから、毎日不安で不安でしようがない。なにしろ、オレは非正規労働をしてる。被災地になかなか支援が回らないのをニュースでみて、こりゃ非正規に支援が回るのはさらに困難だなと実感してしまったのだ。

とはいえ、前に進まないといけない。小説を書かないといけない。プロ作家になり結婚し子供を作らないといけない。

しかし、現状、それが困難であることはよく解ってる。すばる文学賞は去年確か1300点くらい応募があった。落選する確率、1300分の1299だ。

リアルに考え、どうしたらいいかさっぱりわからない。不安である。

先が見えない。出口のないトンネルに入ってしまった。光が見えない。

それでも進まなきゃいけない。理由なんてない。そんな大層なものはない。後退したら死ぬ。ただそれだけ。社会保障のある正社員とは立場が違う。生きるか死ぬかの世界に生きている。

特攻隊員の気持ちがよく解る。明らかに自分にとって損な生き方をしてる。

理由はお国のため。ただそれだけだ。

刑務所の壁の上から飛び降り、しゃばの地面に着地。

「9」「10」「9」「8」

審査員が点数をつけ、ぷちよしは観客にともどもと手を振る。

「バカなことしてる場合じゃない」

看守が棍棒振り回して追いかけてくる。

ぷちよしは走り出した。

「はあはあ。捕まったらまた恐怖の刑務所生活だ。捕まってなるものか」

沿道の人々が旗を振って応援してる。

「ぷっちゃん。がんばってえ」

「ファイトお」

ぷちよしはがんばらないといけない。これはたくさんの人が読んでいる。

ぷちよしは、路地裏に回った。暗い細い路地裏である。

「はあはあはあ。あ。ドアが開いてる」

民家に押し入る。

ちようど、家族が食事をしていた。

「ひっ」「強盗」

見渡せば、ボロい部屋だ。何もとるものなんてない。

「少しかくまってくれ」

「いやあああああああ」

「あっバカ」

看守がその声を聞いた。

「あっちだぞ」

「これはいかん」

ぷちよしは、靴を脱ぎ、ちゃぶ台を飛び越し、向かいの窓を開け、飛び出した。

「げ。あっっ」

見渡す限りの砂砂砂……砂漠だ。

「なんでやねん」

家族が、震災の影響で時空がねじれたなんてSF的な説明をする。

ぷちよしは、んなアホなと絶叫。

看守が部屋に乱入するのが窓から見える。「とにかく逃げろ」

ぷちよしは、あわてて靴をはいて、逃げる。炎天下だ。汗がただら流れる。

さて。話変わるが、作者は非正規労働から逃げ出したい。あまりに低賃金で重労働で苦しい。とはいえ、正社員もプロ作家もすごい倍率である。ニートしようにもスポンサーがない。

作者は机の前でうんうん唸る。「厳しい世の中だ」

テレビで大震災のニュースがやっていた。憂鬱になるので消した。ドアベルが鳴る。ドアをどんどん蹴飛ばす音。やばい。借金とりだ。作者は窓を開け、飛び出した。すでに借金とりの一味が待ち受けていた。

「カネ返せ」

「ありません」

作者は、借金とりの頭を竹刀で叩く。「痛い！」

竹刀を放り投げ走り出した。

その頃、ぷちよしは、砂漠の上を走りに走っていた。看守がしつこい。ぷちよしはへろへろであるが、看守もへろへろである。

「看守さん。しつこいよ」

「仕事だからしょうがない！」

前をラクダをひいた行商が歩いていた。

ぷちよしは駆け寄り、行商を殴った。「痛い！」と行商が現地の言葉で叫ぶ。ぷちよしは、えいと、ラクダの背中に乗った商品の上にまたがる。

ライターの火をラクダの首に近づけた。

「あづいいいいいい」

ラクダは時速80キロで走り出した。

その頃、作者は二丁目あたりまで来ていた。

「やくざさん。しつこいよ」

「仕事だからしょうがないわい！」

ちょうど、原付が通りすぎた。

作者は原付に乗ってたやつに石を投げ、見事命中。「うわあああああ

ああああ」
原付がガードレールに激突。乗ってたやつはぶっ飛び、ビルの壁に頭が突き刺さって失神。

ぷちよしは急いで原付に乗った。

「ざまあみろ。いひひひひ」

浮かれていたのもそれまで。赤信号で止まろうとしたら、止まらない。
い。

「壊れてる！」

そのまま直進。車がよけようとしてガードレールに激突。

原付は作者の意思を無視し、どんどん走る。「こ、怖いいいいいい」

と前方を見ると。

「ら、ラクダ??」

ラクダがすごいスピードで走ってくる。その上にはぷちよしが乗っている。

「うわあああ。どけええええ」

「いやあああああああ」

ガッデム！

死にたい。早く死にたい。苦しいのはもうやだ。

何の希望もない。絶望だらけ。光が見えない。まったく見えない。

どこまで行っても闇闇闇闇。偽善偽善偽善偽善偽善。

街には偽善者があふれ返ってる。全員皆殺しにしたい。

死にたい死にたい死にたい死にたい。

もう苦しいのはいやだ。本当にいやだ。苦しいのはいやだ。死んでラクになりたい。

いやだいやだいやだ。無になりたい。

死にたい。生きたくない。苦しみたくない。もうウンザリだ。

もういやだ。いいかげんウンザリだ。いやだ。絶望だ。恐ろしいほどの怒り。

怒り怒り怒り怒り。

寝ても覚めても怒り怒り怒り。

怒り怒り怒り怒り。

早く死にたい。死にたい。今すぐ死にたい。生きたくない。苦しいのはもうウンザリだ。

早くになりたい。死にたい。早く死にたい。

ついに、21世紀に入ってから、地獄の恐怖低賃金重労働時代が開幕してしまった。実にやばい。来年あたり、過労死か餓死しとるかも知れんな。怖え。

そりゃ、重労働なら高い報酬がほしい。当たり前である。仕事はラクならそんなに燃料を使わないのでお金はいらない。けど、仕事がいんどければしんどいほど燃料を大量に使うのでお金がたくさんいる。同様に、低賃金なら仕事を楽にしてほしい。

しかし、現実には厳しい。低賃金重労働である。心身ともに破滅寸前である。何でこんな愚かなことになってしまったのか。

簡単に言えば、日本のシステムが崩壊してしまったためである。長引く不況の影響で、日本の古きよきシステムがことごとく破壊されてしまった。

だから、今、非正規労働者は、低賃金重労働に苦しまなければならない。

では一体どうすればいいのか。低賃金というのは、これは動かせない。企業の業績が悪いゆえに、賃上げしようがない。

重労働も動かせない。企業の業績が悪いので楽して怠けたら、たちまち倒産する。

しかし、低賃金重労働をこれ以上拡大すると、餓死、過労死、自殺、通り魔に発展する。これはダメだ。絶対にダメ。

拡大も縮小も不可能となれば、臨機応変、変幻自在、神出鬼没、縦横無尽に生きていくしかない。

それしか方法はない。

世の中の色んなことに疲れた。疲れ果てた。非正規労働は地獄。この世の地獄。働けど働けどスズメのポシェットに入るくらいの金額しかもらえない。半分うつ病になってる。実に危険な状態。

しかし、小説は書かねばならん。理由なんてわからない。ただ脳が書けと腕に命令してる。

オレは書きながら、展開に詰まり、気分転換に、外に出て竹刀を振る。「正社員死ね！ 正社員死ね！ 正社員死ね！」

本当に正社員を殺すことができたならスカッとするだろうが、逮捕されるのでできない。「正社員死ね！ トラックにはねられて内臓破裂して死ね！ ハンマーで頭叩かれて、脳みそ散らばれ！」

竹刀を振っていると気分がいい。部屋の中で書いてばかりいると、気持ちちが窮屈になるのでいけねえや。

しばらくして、腰を下ろし、スポドリをこきゅこきゅ飲んだ。風が気持ちいい。

ちようど、前を華子を通る。

「おい華」

「げ。ぷちお」

オレは華子に駆け寄り、胸を触った。

「華子。気持ちいいよ。やわらかい」

「や、やめてよ。急いでるんだから。いゃん」

オレは無視して触り続ける。マジでやわらかい。マシマロみたいだ。

華子に話を聞くと、今からボランティアに行くらしい。まったく興味のない分野だ。

「どんなボランティアだよ」

「老人ホームに行つて、コントするの」

なにいいいい。むちゃくちゃ面白そうやんけ！

「オレも行く」

「だめよ。ぷちおのギャグ、ブラックだもん。おじいさんたちが怖がるよ」

「怖がらせてやる」

華子とはほほほという顔。オレが言い出したら聞かない性格と
いうことをよく知ってる。

オレは華子と歩く。いい天気だな。ピクニックにでも行きたい感
じ。でも、ジジババを驚かす方が楽しい。

歩きながらネタを考える。やばいネタ。下手したら、じじいが心
臓止まって死んでしまうかもしれない。

華子がそわそわしてる。不謹慎だめよ不謹慎だめよというオーラ
を出してる。

その表情が陰鬱でイラツときたので、また華子の胸をもんだ。

「いあん。やめて」

「マジ、やわらけえな」

女の胸ちゅうのは最高だな！

てなことをしていると、通りがかりのジジイがいつの間にか近くに
つつ立っていて、にやにや笑ってる。

「じじい。見せモンじゃねえぜ。向こう行け。しっしっ」

いきなり、ジジイが、竹刀でオレの頭を叩いた。「いてえ！」

オレは両手で頭を押さえる。

「ああん。ぷちお。助けてえ」

「ぐふふふ。やわらかい」

ジジイが華子の胸をもんでる。華子はジジイの頭を叩くが、ジジ
イはもみ続ける。

オレは、キレて、ジジイの頭を竹刀で叩いた。何回も何回も叩い
た。それなのにジジイは華子の胸から手を離そうとしない。「こい

つ……そんなにボインが好きなのか」華子はわんわん泣いている。

オレは、チキショーと叫び、仕方ないので、華子のお尻を触った。
「ぷちお。なにしてるの！」

「仕方ねえだろ。胸が空いてねえから、尻に行くしかねえ」

オレは華子のでかい尻を触る。いい尻だ。いい形だ。」

ジジイはジジイで華子の胸をもみ続ける。よだれを垂らしている。
しばらくして、警官がやって来て、オレとジジイの頭を叩いた。

「天下の公道で何をしとるんだ、お前たちは」

オレとジジイはぺこぺこ頭を下げる。華子は心底ほっとしてる。

警官が華子の胸をじっと見つめる。「ごくり」

警官が華子の胸をもみ始めた。

「いやーん」

「やわらかい！ やわらかい！ 信じられないほどやわらかい！」

オレとジジイは呆れてしまう。国家権力がこんなこととしていいのか。日本も末だな。

校舎に本部長が来て服装について注意を受けた。

穴の開いた靴。

壊れたベルト。

ネクタイにしみがある。

認印がない。

ボサボサの髪。

なるほど注意を受けて当然だ。お客様への印象も悪いだろう。まるでチャップリンだ。

まあ認印は百均で買う。ネクタイも親父に50円で買った中古のやつをもらおう。ベルトも直す。靴も修繕する。2000円の床屋に次の休日行こう。

しかし、いくら身なりを整えても貧困だけは解決しない。一日八

時間週5で働いてもバイトは月収13万円。オレの場合は仕事が激減し、現在9万。厳しい。貧困。厳しい日本の現実。非正規労働者は現在日本だけで1700万人。

小説の方はどうだ。非正規をこの歳までやってるのは小説のためである。

まあ、所得になるかもしれないが、なかなか難しい。狭き門である。倍率が高すぎる。

当然、正社員になるのも、小説ほどではないが倍率が高い。冷静に考え、簡単には貧困から脱出できない。がんばってもがんばっても、そう簡単には貧困から脱出できない。

頭を抱える。身なりが汚い方がいい、なんて考える。

身なりが汚い。お客様に貧困をアピールすることができる。

お客様が労働者をかわいそうに思っ、て、援助してくれるかも。

しかし本部長に言わせれば、客が離れていくだけだと。そりゃさうだな。確かに。

リアルに苦しい。非常に苦しい。逃げたい。胃がちくちくする。

どうしたらいいか、さっぱり解らない。再び頭を抱える。

これでは結婚できない。子作りもできない。家も建てられない。部屋でカップめんを食べながらため息をつく。

しかし、このカップめん、なかなか旨い。坦々麺。250円。普通ラーメン屋で食うと700円くらいするぞ。

低所得ではあるが、世の中のいろいろなものが低価格である。これは助かる。助け合って生きてるのだなあと思う。

まあ低価格だから低所得なのであるが。

震災でも助け合いは感じる。絵本を二万冊、被災地に送ったり、その他支援が被災地にいろいろ回ってる。日本人の団結力ってのはすごいもんだ。

しかし、手放して喜んでばかりもおれない。そこまでオレはおきらくではない。

福島原発で、作業してるフリーターの日給がわずかに9000円

である。しかも、東電のずさんな管理体制が原因で、被曝したり、コンタクトレンズをずっとつけて作業してたら取れなくなったりと、この世の地獄である。オレもバイトだからよくわかる。バイトに対し、還付金が返ってきたり、会社の人たちが優しかったりして、つい忘れがちだが、オレたちバイトは、ひどい扱いを受けてる。ものすごい低賃金でこき使われている。それなのに社会保障が一切ない。むちゃくちゃである。

それでも生きていかねばならない。理由なんてない。身体が生きたいと叫んでる。悲鳴に近いが。

まだオレには小説があるから幸せな方だ。小説を書いていると心落ち着く。パニックにならない。

ほんまに過酷だ。非正規労働は地獄である。この世の地獄。働いても働いてもスズメのポシェットに入るくらいの金額しかもらえない。

今、世間では地震のことばかりが話題に上る。確かに、地震は地獄には違いない。しかし、一時のものである。

しかし、非正規労働は毎日が地獄なのである。地獄のレベルが違う。地震の地獄レベルが2とすると、非正規の地獄レベルは8である。

てなことを友人に話すと、逆だろと言われる。どの友人に話しても言われる。地震がトラウマになって長いこと立ち直れない人もいるんだぞ。それどころか、死ぬ人もいるんだぞ。やれやれ。オレが間違ってるのかなあ。オレはやはり地震より非正規の方が過酷だと思う。何しろ支援がまるでない。地震の被災者にはある。

オレは、しかしそういうことをネットとか小説で訴えても意味がないことはよく解ってる。みんな自分のことで精一杯。非正規がどんなにひどい目にあっても知ったこっちゃないのだ。全部、自己責任で済まされる。

自己責任はいやだと言うと、じゃあ自己決定権を代わりにあげる

と言われる。じゃあ、給料の金額をオレが決定していいのかいと思うと、それはダメだと言われる。意味がわからん。どういうこっちゃ。

オレはイライライライラするので、原付を飛ばし、銭湯に行った。銭湯で、ロリ華に会う。

「珍太郎先生。小説、しっかり書いてる？」

「それがあんまり……」

「ダメねえ」

ロリ華は勤務先の塾の生徒である。

非正規労働は過酷だが、ロリ華の笑顔を見ると癒される。オレにとってオアシスだ。この世という砂漠を生きるのに絶対的に必要な存在である。

休憩所のソファーに二人座り、ジュースを飲む。

「ロリ華は最近どんな小説読んだ？」

「あたし、先生の新作読んだよ」

「マジ？ 嬉しいなあ」

オレは新人賞に投稿する傍ら、サイトでも小説を書いている。

「先生はどんな小説読んだ？」

「ロリ華の新作読んだよ」

「わぁ。嬉しい！」

ロリ華も同じサイトに書いてる。このサイトに年齢制限はない。

二人で、にへへへへと笑う。

その瞬間、床と天井がぐらぐらと揺れる。

あつという間に、銭湯にいた者が瓦礫の下敷きになった。

頭を抱える。小人になった気分だ。身長が3センチくらいになった気分がする。

例えば、小説家になろうと考えたところで、去年のすばる文学賞の応募総数が確か1300点。そのうちの一人が合格ということであるから、狭き門である。なれない方が自然である。

じゃあ、あきらめて社員になればいいのか。しかし、社員もけっこうな倍率だ。うちのスーパーなど従業員が百人くらいいるが、社員はわずかに5〜6人。塾だと社員は室長のみで、あとの十数名は非正規講師。

じゃあ非正規を続ければいいのか。いやこれはこれであまりに低賃金重労働できつい。結婚すらできない。早く辞めたい。

もう、通り魔か自殺しか思い浮かばない。どちらもないやである。しかし、それしか方法が浮かばない。

それらを回避する具体的な方法はないものか。できるならやりたくないが、それしか道がないのだ。病んでいる。

いまましい。また店長に怒られた。低賃金重労働に耐え必死に働いてるのに何で怒られんといかんのだ。

オレは便所にこもり、ポケットから藁人形を取り出す。

藁人形に釘を刺し、ぐりぐりやった。

店長死ね店長死ね店長死ね。

オレはすつきりして便所を出た。

仕事が終わリ、華子のアパートへ行く。店のすぐ近くにある。何と華子は留守であった。何回ベルを鳴らしても出て来ない。そういや友達と温泉に行くと言ってたっけか。

くそう。忌々しっ。華子をぶん殴ってストレス解消しようと思ったのに。

オレは仕方ないので、百均で竹刀を買い、公園へ行った。

ひとまず、素振りをしてみる。

「店長死ね！ 店長死ね！ 店長死ね！」

素振りをしてるうちに、ほんまに店長を殺したくなってくる。やばい感じ。犯罪者になってしまう。

仕方ないので、水飲み場で水を飲んでから、竹刀を放り投げ、公園を出る。

ちびっこたちが竹刀を振って遊んでる。

ひとまず、土手に寝転んだ。

「ああ。アルバイトは地獄だな。働いても働いても、生活がよくなりゃしねえ」

涙が出てくる。オレも今月で35歳。やるせない。

本日3月11日、オレの誕生日。オレ、おめでとう！

オレも35。おかん（62歳）にゆうたら、若いねえと言われた。オレとしては歳とった気分だ。非正規労働者だからだろう。正社員で35なら若い、非正規で35というのは年寄りだ。勤務先の塾でも学生の講師ばかり。当たり前だが、生徒は子どもだし。年寄り気分になる。小人の国にいるガリバーのような心境。

とはいえ、勤務先のスーパーでは、おばちゃんばかりなので、若いのかな。お客様もおばちゃんおじいちゃんが多い。若者気分になる。巨人の国にいるガリバーのような心境。

小説の世界ではどうか。10代でデビューする作家もいるので、それに比べれば、年寄りだ。

けど、50でデビューする作家もいる。それに比べれば、若い。

まあそんなのはオレは気にせず、マイペースで行こう。

とにかく、小説しかオレの居場所はねえ。塾とスーパーは明らかに違和感がある。オレが学生なら、おばちゃんなら違和感はないだろう。自然だ。

しかし、オレは三十路男子。小説を想定するとしつくりくる。

とはいえ、不安は不安である。小説は倍率が高すぎる。非正規でやってくのも貧困という問題を抱えるし。

てな話をおかんとしていると、今日生きるってことが問題じゃないかなとおかんが言ってた。

今の世の中、いつ死ぬかわからん。

おじいさんが運転を誤り、子どもをはねてしまったり、とか普通にある。

確かに。オレは原付だが、毎日怖い。左に寄り過ぎれば、ガート

レールに突っ込むし、右に寄り過ぎれば、車にはねられる。将来のことより、今の命が心配だ。

ある種、なるようにしかならん、つうことだな。

付記

これを書いているとき、東日本大震災が起こったことは知らない。

事実、月収が現在、10万円であるゆえに、30万から40万あるとだいぶ楽だなあと感じることはある。ちなみにうちの会社の社員の月収は26万。

ただ、この前、ラノベの教本読んでたら、カネ目的で小説家はできんなあと痛感した。

新人がだいたい8000部売り、一冊500円、印税が6%で、24万円。オレはだいたい二ヶ月で長編を一本書く。となると、月収12万の計算。

バイトだと、一日八時間週5で働くと、13万である。

つまり、小説というのは、村上春樹みたいな100万部作家以外は、あまり儲からんということだ。

儲からんどころか、かなり厳しい。漫画に押されてる。漫画はゲームに押されてる。ゲーム自体も少子化であまり売れん。じいさんはゲームやらんもんな。

それ以前にデビュー自体が難しい。電撃だと、確か5000人くらいが応募する。すばるでも1300人。すごい倍率だ。

ゆえに、小説もプロだけを想定したらきついし、カネだけを目的に書くのもきつい。

何か別の目標を立てないと、書き続けるのは難しいだろうな。

雨が降る。すごい雨。肌寒い。風邪を引きそうな気温。

ざあああああああ。

西田は華子の家を目指していた。今日は華子の誕生日。実は指輪を買った。ついに結婚しようと決意したのだ。

ざあああああああ。

西田は歩きながら、傘が吹っ飛びそうなので必死だ。ものすごい風だ。はげ頭のおっさんが、飛んでくカツラを追いかけてる。西田はおっさんがあまりに必死なのでちょっと笑ってしまう。

ざあああああああ。

ビルの屋上から誰かが飛び降りたのがちらりと見えた。

いつもなら西田は野次馬根性を発揮し、現場に駆けつける。しかし、今は華子に早く指輪を渡したくて、無視する。

ざあああああああ。ざあああああああ。

へつくしょんとくしゃみをする。

西田は、華子がチキンを作ってくると言っていたのを思いだし、よだれが垂れる。自分の誕生日に料理するとはおかしな話だが、西田がカネをないのを華子は知っていて外食はいいよと言ったのだ。一緒に祝ってくれるのが幸せと華子は言った。いい女だ。西田はにやにやしてしまう。

ざあああああああ。ざあああああああ。

前を誰かが走って行く。そのあとを警官が追いかける。雨なのに大変だな。

警官が発砲し、その流れ弾が、はげたじいさんの頭に命中して、じいさんが倒れた。

ざあああああああ。ざあああああああ。

警官は犯人に夢中で全然気づかず、そのままどこかに行ってしまう。西田はじいさんの死体を眺め、電話しようかなと思ったが、今日は無理だ。急いで。早く華子に指輪を渡したい。華子の指に指輪をはめたい。

ざあああああああ。ざあああああああ。

霧が立ちこめ、視界があやふやだ。傘が吹き飛びそう。寒い。ぶ

るぶる震える。鼻水も出てしまう。

ざああああああ。ざああああああ。

傘は差してるが、西田はびしょ濡れだ。華子のアパートに着いたら、まず風呂を借りよう。

ざああああああ。ざああああああ。

傘が飛んで行った。

「これはいかん」

西田が追いかける。視界が悪いので車道に飛び出してしまう。ちようど、西田に向かって、ダンプカーが突進してる。「!!!!!!!!!!」

アスファルトに血が流れる。指輪を入れた箱が転がる。

ざああああああ。ざああああああ。ざああああああああ。

会社も政府も非正規雇用問題に真剣に取り組んでほしい。無理とかほづくな。やってもおらんのに無理と言うな。やってから無理だと言え。

最低百年は取り組み。いやそんなに待っちゃおれんな。五年以内に、労働人口の80%を正社員にしろ（残り20%は身体の悪い人や学生や引退後のご老人ね）

待ったは許されない。もう十年も待ったんだ。重い腰を上げないといけない。もう待たされるのはウンザリだ。もう我慢の限界だ。政府も経営者も、もういいかげんふざけるのはやめて、真剣に仕事をしないといけない。おふざけはもう許されない。そんな悠長な時代じゃない。危機はすでに迫っている。

2011年3月11日、東日本で大震災が起きた。

「オレは小説家に向いてないかなあ」

机の前で腕を組む。とはいっても書かないといけない。オレは非

正規労働者である。何としても小説を所得にしないと未来がない。しかし、すぐに飽きてくる。やはり向いてない。向いてるやつはすらすら書く。

オレはジャンバーを着て外に出た。「華子のアパートに行こうかな」

華子のアパートに着く。

華子の部屋に上がり、寝転ぶ。「華子。めし作れ」

「横暴ねえ。ライス先生」

「うるさい。早くしろ」

華子はいはいと台所に行く。華子がなぜオレのことをライス先生と呼ぶかというと、小説の無料投稿サイトでは、師弟関係なのだ。二人でめしを食うと旨い。

「華子と結婚したいなあ。そうすりゃこんな旨いものが毎日食えるのにむしゃむしゃ」

「正社員になりなさいよ。非正規だと生活が苦しいわ。ずずず」

「うるさい。華子が正社員だろ。オレを養えばいいじゃないか。くちやくちゃ」

「無理よ。あまり給料よくないもの。もぐもぐ」

「オレはプロ作家になるんだ。もしゃもしゃ」

「無理よ。倍率が高すぎるわ。ちゅーちゅー」

「うるさい！」

オレは華子をぶん殴った。

華子がわんわん泣く。

「うわあああん。うわあああん。ライス先生のバカあ。ライス先生のバカあ」

「あわわわ。そんな子供みたいに」

しかし、何時間かすると、二人でベッドの上で抱き合ってる。あほだなこりゃ。

「あたし、でもライス先生がアマチュアでもいいわ。ライス先生の小説面白いもの」

「うるさい。オレは絶対にプロ作家になる。なめるな」

「んもう。誉めてるのに」

オレは華子のアパートを出る。深夜の二時。相変わらず、小説のアイデアは浮かばない。

「あーあ。このまま家に帰っても寝るだけだなあ」

オレは、よしビデオボックスに行こうと思う。ビデオボックスに行けば、カネを払うので寝ることができない。いやでも小説を書かないといけない。

「ようし。やるぞ」

オレは燃えていた。かっかと燃えていた。季節は春だが、オレの胸は夏である。

華子

「ライス先生。あなた、また太ったんじゃない？」

ライス

「むかつくなあ。華子だって下半身でぶだろ」

華子

「レディに対して失礼よ」

ライス

「ごめんなさい」

華子

「あれ。妙に素直。どうしたの」

ライス

「華子のへそくり勝手に使ってごめんなさい」

華子

「は？」

ライス

「しかも、競馬で全部スツちいました」

華子

「こらこらこらー。何なのよ！」

ライス

「みなさん。世の中っていろいろありますね」

華子

「客に向かって話すな。あたしの目を見て話せ」

ライス

「華子、怖いよう。長渕剛みたいな目してる」

華子

「ふざけんな！」

ライス

「みーに言いつけるよ」

華子

「は？ みー関係ないじゃん。てか、みー猫じゃん」

ライス

「みー。華子の秘密いろいろ知ってるよ」

華子

「話したことあるんかい！」

ライス

「居酒屋でね。ちょこちょここと」

華子

「もうええわ。くだらない」

ライス

「華子が夜部屋でベッドの上でござござしとるだろう。みー、実は隠し撮りしてネットで販売しとるらしいぜ」

華子

「こらこらこらー！ ちびっこも読んでるのよ。それにみーがそんなことするわけないじゃん」

ライス

「ははっ冗談だよ」

華子

「わかってるよ。んもう」

ライス

「華子には本当のことを言わないとね」

華子

「そうよ。うそはだめよ」

ライス

「オレ、実は、女子小学生とつき合ってるの」

華子

「えええええっ」

ライス

「何驚いてるの。正直にゆうただけやん」

華子

「普通テレビで言う？　ライス先生、これオンエアしたら逮捕されるよ」

ライス

「ふん。逮捕も小説家の勲章さね。小林多喜二だって逮捕されてる」

華子

「ライス先生の場合は全然かっこよくないよ」

ライス

「オレのこと嫌いになった？」

華子

「そんなことないよ。あたし、おデブ好きだから」

ライス

「じゃあ、モンブランとオレ、どっちが好き？」

華子

「モンブラン」

ライス

「チキショー！　即答かよ！」

華子

「だってしょうがないじゃん。あたし甘いもん好きなんだもん。じゃあ、ライス先生は、あたしと中トロ、どっちが好き？」

ライス

「中トロ」

華子

「言うと思った。ライス先生にとってあたしってその程度の女なんだ。ひどいよ。うう」

ライス

「あわわわ。泣くなよ。泣くんじゃないよ」

華子

「ひつくひつく。じゃあ、ハンドバッグ買ってきてくれる？」

ライス

「買うよ！ シャネルでも何でもいいよ！」

華子

「やったーわーい。嬉しいな」

ライス

「ちえ。まあいいや。華子のへそくり、まだ少し残ってるから」

華子

「！！！！」

低賃金であるにも関わらず、社会保障がないにも関わらず、雨の日も風の日も職場へ行く、全国1700万の非正規労働者。彼らを見てると、敵艦に突っ込んだ特攻隊を思い出す。

オレたち正社員はダメだ。裕福な生活を手放せなくて「我々正社員の賃金をカットしてもいいので、非正規労働者に社会保障してあげてください」の一言が言えない。貧しくなるのが怖い。人間の心を失ってしまった。悪魔になってしまった。こういう不況な時ほど、みんなが貧しくなり助け合って生きていけないのに、「非正規労働者の生活を犠牲にして、いい暮らししようぜ」という悪魔のささやきに負けてしまった。

非正規労働者が過労死しても、餓死しても、オレたち正社員は、いい車に乗るのをやめられない。いい服を着るのをやめられない。

いいもんを食うのをやめられない。いい家に住むのをやめられない。海外旅行に行くのをやめられない。

オレたち正社員は人間として終わってる。腐っちまった。

人間になりたい。悪魔でいるのに耐えられない！

働いても働いてもスズメのポシエットに入るくらいの金額しかもらえない非正規労働者。この世の地獄。見えない明日。果てない絶望。

オレは包丁を握りしめ、街をさまよう。暴れたい。

しかし、それは犯罪である。

警官がオレを発見し、銃刀法違反で逮捕した。

オレは留置場の中で頭を抱える。一体どうすればいいんだ。先の見えない不安感。東日本で大震災があったと警官に聞いたが、耳に入っていない。どうしたら貧困から脱出できるか。そればかり考えている。

苦しい本当に苦しい。胃がねじれそうだ。頭も痛い。

オレは、壁をがらがん殴る。拳から血が出る。

非正規労働者は1700万人。1985年の段階だと600万人。それでも日本は平和だと言えるのか。言ってるやつに限って裕福。オレたちは安泰だ、に言い換えてほしい。日本自体は別に平和じゃない。毎日、戦ってる。

絶望絶望絶望。どこまで行っても絶望。光が見えない。

オレは毛布にくるまり、涙が出てくる。悔しい。なぜ貧困に苦しまなきゃいけないんだ。非正規労働者だけが、なぜこんなに苦しんでいるしなきゃいけないんだ。

わからない。わからない。なぜ政府は何もしないんだ。なぜ企業は何もしないんだ。

ジャニーズのタレントたちが募金をして非正規労働者に送れば、日本は前進する。なのにしらない。

正社員たちが自分たちの賃金カットを申し出て、非正規労働者の社会保障に回せば、日本はよくなる。

なのに、しない。なぜだ。日本を前進させたくないのか。日本をよくしたくないのか。

わからない。わからない。意味がさっぱりわからない。何で日本はこんなにも腐った国になっちまったんだ。ダメな国になっちまったんだ。

神も仏もない。悪魔がのさばる世の中だ。

いっそのこと、原爆でも落ちて、皆殺しにしてくれ！

オレはもうプロ作家になるのをあきらめた。もうどうでもいい。被災者がどうなったって知ったことか。日本が滅んだってかまわん。こんなくそみたいな国、生きる資格ない。さっさと死ねばいい。

人間なんてくそだ。うそばかりこきやがって悪いことばかりやって腹が立つ。一度天罰を与えてやらんといかん。

もう何もかもどうでもいい。ぐちゃぐちゃに破壊されてめちゃくちゃになりゃあ、スカッとする。くだらん世の中だ。正義も優しさもありゃしない。

全員、死ね！

「結婚してください！」

「ええっと、そのう、あのう」

喫茶店にて。華子はいきなり米田にプロポーズされて困ってしまふ。

だって、今日は4月1日！

米田の目を見ると真剣そのものだ……マジなのだろうか？

華子はレモンスカッシュをちゅーと吸う。変な汗が出る。

「いやしかし、ダメか。オレ、非正規労働者だものな」
華子はあわてる。

「いやそういうわけじゃなくて……仕事に正規も非正規もないよ。
それに米田さん、小説書いてるんでしょ」

「書いてるけど、なかなかプロになるのが難しくってねえ」
沈黙。

華子は、これはひよつとしたら嘘のプロポーズじゃない、ほんとのプロポーズなんだって思えてきた。

試しに質問してみた。

「米田さん。日本の初代内閣総理大臣は？」

「ジョージ・ワシントン」

華子は焦る。嘘こいとるやんけーっ！

いや、しかし間違えただけかもしれない。目が真剣なもの。でも、普通、外人と間違える？

華子は恐る恐る次の質問をした。この質問なら大丈夫だ。

「米田さん。あなたのお母さんの名前は？」

「米田米子」

嘘こいとるーっ！

華子は何が何やらわからない。米田の目がマジなのだ。

米田はポケットから薬を取り出し、水で飲んだ。

「何の薬？」

「精神安定剤」

まさか、米田は頭がおかしくなってしまったというのか。

華子は急に心配になる。

「米田さん。大丈夫？ 顔色悪いよ」

「大丈夫。ちょっと疲れてるだけさ。なにしろ、オレ今日宇宙人に捕まったから」

「え？」

「UFOに連れて行かれて大変だったんだ」

華子は変な汗がだらだら流れる。目がマジだ。とても嘘ついてる

とは思えない。本当に頭がおかしくなってしまったのか。

「あの米田さん。最後に一つだけ質問」

「なに」

「あたしがプロ作家になるのあきらめてと頼んだらあきらめる？」

米田はしばらく考えた。

「うん。華子が言うならあきらめる」

「よかった」

「え」

華子はほっとした。今までの全部エイプリルフルだったんだ。だって、米田さんが小説をあきらめるわけない。

しかし、あまりに落選するので、米田が本当にあきらめかけてることを華子は知らない。

ガッデム！

震災で多くの人が家を失った。それをニュースで見てもオレは特に驚かなかった。驚いたのは、家を「持っている」人たちだろう。

オレは実家に寄生してるゆえ、寒さは凌げるが、月収がわずかに10万円のフリーター。今後、自分の家を建てることは、小説で10万部売らない限り、ありえない。

派遣切りの影響で住む所を失った人が、ネットカフェに住み、無銭飲食で現行犯逮捕、所持金はゼロ円みたいな事件は、震災前からざらにある。今もあるだろう。職を失い、ホームレスになった人はかなり多い。

そういうのを知っていたから、震災が起きても大して驚かなかったのである。テレビで有名人が「被災地に支援しましょう」とぬかしてるのを見ても、心和まない。イライラするだけだ。

なぜ失業者に支援しない！

震災で家を失った人に「自己責任だよ。支援はしないよ。自分で何とかしなよ」とぬかすやつはさすがにいないが、派遣切りされた

ホームレスには平気で言うのである。

こんな世の中は何とかしないといけない。めちゃくちゃに破壊して、さら地にして、建て直さないといけない。

スマイル企画は被災者向けゆえにダーティな表現は控えるつもりであった。にも関わらず、だんだん内容がダーティになってきてる。これは連載を完結した方がいいかな。ちょっと悩んでる。

オレとしては得してるんだよな。普段はアクセスがあまりないのに、企画作品でことでアクセス伸びてる。

ただ企画の趣旨とずれてまで書く意味があるのか。

利益と道德のせめぎ合い。ようわからんので、もう少し続けてみるか。やはり、オレは非正規労働者ゆえに、物資的な支援ができない。あまりに低所得で生活苦しい。

となれば、小説で支援しなきゃいけない。

まあ難しいところだなあ。

利益がないと作家として終わりだし、道德に反したら人間として終わり。

まあ葛藤しながら書いてくしかないな……。

テレビで有名人が「がんばれニッポン！」と言っていたのを聞いて、テレビを金属バットで叩き壊したくなった。

被災地の人はずでにがんばってるのである。がんばってがんばってどうにもならぬ立場にいるのである。その人たちにがんばれとは何事か。

オレを含む、被災地以外のやつらががんばって、被災地をフォローすりゃいいだけである。がんばれニッポンなんて口が裂けても言っちゃいけない。

その妙ちきりんながんばれ思想が餓死者を出してることになぜ気づかない。

生活ができなくて生活保護申請しても、役所に、がんばりなさいと言われ、受理されず、餓死してミイラ化された遺体が発見される、なんて現実が日本にある。

がんばることは悪いことじゃない。しかし、一歩間違えれば、死傷者を出すことを我々は知らねばならぬ。自殺者が年間三万人もいるのである。それを忘れるな。

テレビで「がんばれニッポン」とか、「がんばろうニッポン」とかぬかしやがるから、くそ腹立つ。

被災者以外の人間ががんばって、被災者をフォローすりゃいいだけの話だ。何で被災者にまでがんばれを強要する。被災者にがんばる余裕がないことくらいちょっと想像すりゃ解るだろう。マスコミあるいは日本人はここまで想像力が枯渇してしまった。

まあ、オレだってアホじゃないから、がんばれが、時に魔法の言葉になることくらいは知ってる。がんばってないヤツが先生に「がんばれ」と言われれば嬉しいと思う。励ましになると思う。逆に「がんばらなくてもいいよ」って言われるとイライラするかもね。なめられてる感じがして。

しかし、すでにがんばってて、もうこれ以上がんばりようのないギリギリのラインで格闘してる人に向かって「がんばれ。弱音を吐くな」ってのは脅迫以外の何物でもない。あんまり言い過ぎると、どうしていいかわからず首を吊ってしまう。電車に飛び込んでしまう。ビルの屋上から飛び降りてしまう。あるいは、通り魔するかもな。

まあ何でこういう発想になるかと言えば、最近読んだ本の影響かな。

その本にはこんなことが書かれてあった。

どうしても生活が立ち行かず、生活保護申請に言ったら、役人に「がんばれば大丈夫です」と言われ、受理されず、気づけば一人部屋で餓死し、ミイラ化された遺体が発見される。

てなね。そういうケースがざらにあると。

そういうの読むと、がんばれて言葉に敏感になってしまいうんだな。繰り返しになるが、がんばってないヤツに、がんばれと言うのは本人にとって励ましになるから嬉しいもんだとは思うんだよ。

ケース・バイ・ケースでことやな。言うべきヤツに言い、言うべきでないヤツには言わない。「がんばれニッポン」て言うのと、ケース・バイ・ケースから離れちゃうからいやだ。

まあそれとは話がちょっと違うけど、塾に勤務し始めた時、室長に「がんばって下さいと生徒用ファイルに書かない方がいいよ」と言われた。「じゃあ、どう書けばいいんですか」と聞くと「がんばりましょう、と書くといいよ」と。

要するに、「がんばってください」つうと、突き放されたと感じてしまうと。おまえが勝手にがんばれ、先生は知らんと捉えられるかもしれない。けど、がんばりましょうだと、先生と一緒にがんばろうというニュアンスが感じられるのでいいよ、ということ、まあ細かいとこだけど、言葉って繊細だよねえ。

非正規労働だと、働いても働いても所得が少なすぎて結婚が不可能だ。

かといえ、正社員になるのは倍率が高過ぎる。プロ作家となるとさらに高い。

オレに用意されてるのは絶望の椅子しかない。椅子の上に画ビョウが30くらい置かれてある。これに座って生活している。

震災のニュースを見てもあまり驚かなかった。驚いたのは社会的にフォロワーされ続けてきた人たちである。オレなど、大学を卒業してから、引きこもりと非正規労働しかしたことがない。実に、13年間もずっと地獄の中に闇の中にいるのである。震災で驚けと言われても無理な話だ。

早く地獄から脱出したい。早く貧困から脱出したい。もう闇の中にいるのはウンザリだ。

「わんわん！　わんわん！」

「バウバウ！　バウバウ！」

「2ひく1は？」

「わん！」

「バウ！」

「おーよしよし。たけしは偉いねえ。それに比べてジェイムズはおバカだ。飯抜きだな」

「バウウ……」

「もっかいだけチャンスやろう。5わる5は？」

「わん！」

「バウ！」

「おーよちよち。やっぱりたけしは賢いね。それに比べてジェイムズはまた間違えて。ちゃんと算数勉強しないと家から追い出すよ」

「バウウ……」

ジェイムズとたけしは小屋に戻った。

ジェイムズはたけしの胸ぐらを掴む。

「バウバウ！ バウバウ！」

「わんわん！ わんわん！」

たけしはジェイムズに殴られた。

「わーんわんわん。わーんわんわん」

ジェイムズは、やり過ぎたかなと思って、たけしに骨っこをあげた。

「わんわん！ わんわん！」

たけしは大喜びで、骨っこをしゃぶる。

ジェイムズは、たけしに海に行くぜと言った。

二人は鎖を外し、外に出た。

ジェイムズはバイクにまたがり、たけしはサイドカーに乗った。

「バウバウ！」

「わんわん！」

走り出した。

その日、主の吉山くんはバイクがなかったため、バイトに行けな

くて店長にむちゃくちゃ怒られた。たけしとジェイムズを飯抜きにしたことは言うまでもない。

敵だらけでR。

すばる文学賞では1299人が敵で、電撃文庫小説新人賞では4999人が敵。

会社でも20人が敵。なぜそういう計算になるかといえば、例えば、勤務先の塾で正社員（契約社員）は室長のみで、あとの十数名は全員非正規講師。

勤務先のスーパーは従業員が100人くらいいるが、正社員は5〜6人。

てなわけで、社会保障を獲得するには、20人を敵に回さないといけない。

四面楚歌状態である。

こんな状態でどうやって助け合いなんかすればいいのか、全然わからん。戦わないと殺される。命を奪われる。

とはいえ、理屈以前に人として助け合いはせにやらぬゆえ、被災地に向けてギャグ小説は書いてゆく。まあほんまに低所得過ぎて物資的な肉体的な支援がきんのでね。小銭を募金する程度。

被災地支援も大事だけど、まずオレは小説を所得にできるようにがんばらないといけない。この歳になるまで非正規をやってるのは非正規をやりたいからでなく、小説家になりたいからゆえ。

まあ道は前述の通り困難極まりないが、前進せねばならん。前進せねば死んでしまう。

「被災地に募金を」てのを店で見ると、「非正規労働者に募金を」だといいなあと思う。例えば、幼児以外の一億人くらいが一人一円募金するだけで一億円になる。オレは十年間、非正規労働者として低賃金重労働に苦しんできた。でも、一億円もらえれば、納得がい

スマイル企画でも被災者を癒すつもりが、いつの間にか自分の愚痴大会になってる。

確かに被災地への支援は大事だが、貧困層への支援も大事なんだよな。実際に、支援がなくて死んでる人もいるから。

ううむ。何ともやりきれない。憂鬱になる。動きたくない。じっとしていたい。引きこもりたい。

震災で犠牲になった人たちには関心がいくのに、貧困で餓死する人たちには関心がいかず自己責任で片付ける国。偽善極まりない。へどが出る。

被災地も自己責任で片付けろ！！！支援すんな！！！！

「珍太郎くん。やめてよ！」

「いいや。やめん！」

珍太郎は被災地に向け、悪質なチェーンメールを送り続ける。

「何でそんなひどいことするの！被災地の人の気持ちにもなって！！」

「うるせえ。みんな震災震災やかましい。非正規雇用問題なんてどうでもいいと思っていやがる。天罰を喰らわせてやるんだ！」

「やめて！正気に戻って！優しい珍太郎くんに戻って！」

珍太郎が被災地に送信している悪質なチェーンメールの内容はこんな感じである。

件名…パンツマンに気をつけてください。

被災地の混乱に乗り、パンツマンが出発しています。気をつけてください。

パンツマンとは、パンツを頭から被った全裸のど変態紳士です。パンツマンに遭遇しても決して騒がないようにして下さい。騒ぐとパンツマンは大喜びして、変なダンスをやり始めます。

そのダンスはあまりに奇妙で不気味なので、ちびっこたちがトラウマになります。

みなさん。パンツマンにご注意！

「珍太郎くん！ いいかげんになさい！」

ロリ華が珍太郎のケータイを取り上げた。「な、何をする。返せ」「正社員も非正規もがんばって被災地をフォローしなきゃだめなの！」

「このう。ロリ華。返せ」

ロリ華はケータイを持って走り出す。珍太郎が追いかける。

走り回ったあと、ロリ華がこけて倒れた。「きゃん！」

勢いで、珍太郎がロリ華の上に倒れる。

「ち、珍太郎くん。お、重い」

ロリ華のお尻に珍太郎の股間が当たる。

「ろ、ロリ華あ」

「いやーん。硬くなってる」

エロチック描写禁止委員会の連中がドアを蹴飛ばし、中に乱入した。

ガッデム！

現代は終戦直後に似てる。あの時はとにかく食料が少なくて餓死が多かった。

現代も餓死が多い。生活保護申請をしに行ったら、役人に「がん

「ばれば大丈夫です」と言われ、受理されず、餓死して、ミイラ化された遺体が発見される……なんてことが普通にある。

ゆえにテレビで有名人が震災関連のCMで「がんばれニッポン」とか「あなたは一人じゃありません。助けてくれる人がいます」とかぬかしてるのを観ると、テレビを叩き壊したくなってくる。

と同時に悔しいかな、オレが有名人なら同じことを言ってる。だってああいうことを言うのが有名人の仕事だもんな。実際に励まされる被災者もいるだろうし。

だから、葛藤するんだよな。発言というのは実に難しい。

ギャグとシリアスが混在した時代だな。震災に関するテレビCMがギャグとすれば、餓死者が出る貧困問題がシリアス。

かつて、ダウンタウンの松本はギャグでもシリアスでもない、いわゆる「笑えない笑い」をモチーフにしたコントを撮っていた。時代がやっと松本に追いついた感じ。

物書き仲間が、DVDを持ってるので、観せてもらい、研究してみよう。

街へ出て包丁を振り回したい。大量殺人したい。真剣に心の底からそう思う。あまりにあまりにあまりに地獄だ。この世の地獄だ。低賃金重労働。いや超低賃金超重労働。非正規労働者の過酷な現実である。正社員のようにまともな報酬がもらえない。ニートのようにラクできない。

被災地のことなんて知ったこっちゃない。こともない。助け合いは必要だ。人は一人では生きていけない。

しかし、あまりに仕事がつく、賃金が安い。震災になる前に、過労死か餓死か自殺か通り魔してしまう。助けてもらいう前に死んでしまう！

非常事態だ。戦争に突入した。企業、政府、自衛隊、そして世間との戦いだ。絶対に負けぬ。勝ってやる（＝生きてやる）

たかが世間ごときに負けてたまるか。オレは生きるんだ。殺され

てたまるか。

オレは日本人には負けない。殺されてたまるか。逆に殺してやる。絶対に生きる。生きてやる。

世間に殺されてたまるか。逆にぶっ殺してやる。オレは生きる。世間ごときへなちよこの言いなりになんかならない。

確かに世間てのは強敵だ。数もすごいしパワーもすごい。

しかし、言いなりになってたら、いつか殺される。黙って殺されるのと、戦うのと、どちらかを選べと言われたらオレは戦う方を選ぶ。

世間にぶっ殺されてたまるか。逆にぶっ殺してやる。世間に負けてたまるか。倒して勝ってやる。生きてやる。絶対に絶対に生きてやる。世間ごときに殺されてなるものか。

世間のやつらがオレの部屋に土足で入って来て、部屋の物を次々と壊してく。泣いても叫んでも無視。部屋は破壊され尽くし、めちやくちゃだ。地震があつたんじゃないかと思えるほどだ。

一体、なぜ世間はそんなひどいことをする。何が目的なんだ。なぜ非正規労働者にきちんとした報酬を支払わない。なぜ非正規労働者に過重労働を押しつける。

理由がさっぱりわからない。

もういいかげんにしろと言いたい。

しかし、世間は強すぎる。数が半端ないし、パワーもすごい。低賃金重労働でへとへtoになってるオレが戦うにはあまりに強すぎる。しかし、戦わないといけない。戦わないと、いつか殺される。

生きるために世間と戦え。これ以上、世間に好き勝手はさせない。オレは生きる。悪魔の世間をぶち殺す。

オレは生きる！

プリン公園に着いた時は、すでにものすごい人だった。

腹を出して踊ってたり、ゲロをゲロゲロ吐いたり、桜の枝を折って振り回したり、震災から間もないというのに、桜が泣いている。

オレはその様子を見て一句浮かんだ。

桜泣くゲロゲロ吐くやつ泣いている

意味がわからなかったので、頭の中で、紙を丸めて捨てた。

「珍太郎くん。もうここやだ。柄が悪すぎる。バミヤンコーヒー飲みに行こう」

「そ、そうだね……」

ロリ華とオレはプリン公園の近くにある喫茶店へ向かった。そこは、バミヤン共和国出身のペペモミンさんがマスターをしてる喫茶店で、バミヤンコーヒーが最高に旨い。穴場ですよ。みなさんも行ってみて下さい。

途中で、警官が全裸のおっさんを捕まえていた。

「痛い痛い痛い。おまわりさんのエッチ」

「いくら花見でも全裸は許さぬ」

おっさんは警官の頭を空手チョップして逃げた。

おっさんは尻の穴からジェットを噴射して飛んで行った。

警官がピストルを撃つと、おっさんに命中し、おっさんは落下。

「な、なんでやあああああ」

「まったくひどいおっさんだね」

「ぷぷぷ、ちょっと面白い」

「趣味悪う」

しかし、オレはロリ華を眺めていると、桜よりロリ華の方がきれいだなあなんて思ってしまう。

「どうしたの珍太郎くん。ぼうとしちゃって」

「い、いや、何でも」

「変なの」

オレは、やばいことに欲情してきた。桜の魔力か、ロリ華の魔力か、どっちもか。

「珍太郎くん。やだあ。ロリ華のお尻ジロジロ見ないでよ」

「ふがふが」

オレは今すぐこの場でロリ華を押し倒してしまいたかったが、そんな狼藉をすれば、全裸のおっさんと同じカテゴリーに収められてしまう。桜が泣く。

しかし、魅力的なロリ華！

「うおおおおお」

オレは両手を上に挙げ、腰を振る。

「ち、珍太郎くんが狂った」

「うええん。ロリ華あ。助けてえ」

人間様の意思を無視して、本能のアホが、腰を振らせる。しかも、たちの悪いことにどんどんスピードが上がる。「ろ、ロリ華あ。止めてえ」

「どうしよう。どうしよう」

すると、何ということだ。桜の木が急に地面から足を抜き、歩き出して、オレの前まで来たのだ。

「ひっ怖い」

「こら男性。女子を困らせるんじゃないよ」

そういうと、桜の木は、手らしき枝を、オレの尻に刺した。「ふぎゃあああああ」

「カンチヨウだ。いやあん」

ロリ華が顔を真っ赤にさせている。オレは激痛のあまり、地面に転がり回った。

桜の木があはははと笑ってる。

しかし、まわりの通行人は笑ってない。

「うわあ。桜が動いてる」

「ママあ。怖あい」

「桜がしゃべってるぞ」

桜の木はおろおろしてる。

「こ、こら。お前たち。騒ぐんじゃない。マジになるんじゃない。これは小説だ。ただのフィクションだ」

「うわあああん。ママあ。怖いいいいい」

「おのれ。ちびっこを怖がらせやがって、ひどいやつだ」

「誰か警察を呼べ」

「あわわわわ」

ロリ華は、泣きじゃくるオレを背負って、喫茶店へ向かった。桜の木は、治安錯乱罪の現行犯で手錠をかけられ、警官に連れて行かれた。「お、オレ、まだ仕事が」「うるさい。詳しいことは署で聞く」「誰かあああ。ギャグの解る人助けてえええ」

ガッデム！

床に男性がうつ伏せに倒れている。無念そうな表情だ。当然、死んでいる。男性は全裸。いや、全裸というのは正確ではない。胸にブラジャーをしている。そして、尻の穴には花火が刺さっている。

「他殺ね……」

華子が余計なことを言う。

「当たり前じゃないか！ どう見ても自殺じゃねえだろ！」

警部が吠える。

「うるさい親父だねえ。探偵華子が今から犯人を推理してやるからねっ」

華子がガッツポーズをとっている。警部は不安でならない。

部下が走ってきた。

「警部。身元がわかりました。ガイシャ（被害者）は本島元男、24歳、寿司屋の見習いです」

「ぶっ面白い名前」

「こらっ華子！」

「しかも若いのに頭薄い……ぷぷぷぷ」

「華子！」

警部が華子のほつぺたを叩いた。

「捜査の邪魔をするなら帰ってもらう！」

「ひっくひっく。警部のバカあ。華子、真剣なのに。ひっくひっく」
「あわわわ。泣くんじゃないよ。ったく女ってやつあ」

部下がやれやれという顔つきをしてる。

「他に情報はないのか」

部下の一人が「彼はSかMかかというと、Mの要素が多少あるが基本Sであると同僚が言っていました」

「何の情報だそりゃ！」

華子は腕を組んで、ちよつと待ってと言った。

「その同僚はSなの？ Mなの？」

「さあ。そこまではわかりません」

「早く調べなさい！」

華子が怒鳴るので、部下はあわてて走った。

「華子。もう捜査の邪魔しないでくれよ」

「まだ情報が少ないわね。警部。あなた、昨日の夜、何食べました？」

「え。ハンバーガーかな。残業だったから軽く」

「ふうむ。どうでもいい情報ねえ」

「じゃあ聞くなよ！」

その瞬間、ガイシャが起き上がり、華子と警部の頭を思い切りはたたいた。

「うきやん！」

「ひぎやっ！」

「やる気がないなら帰れ！」

華子と結婚して同じ家に住むようになってから、オレは華子のあ
る癖が気になる。

華子は、ごはんを食べる時、必ず、少し残すのである。

「華子。もったいないよ。全部食べなよ」

「だって全部食べると貧乏みたいじゃん」

「んもう」

オレが作家志望の非正規労働者で、華子が正社員。まあその差が表れてるわけかな。

まあしかしそういうの以外はだいたい上手くいつてる。

特に華子は、ギャグセンスが少し一般からずれている。そして、オレもずれている。だから、波長が合う。

「部長が朝会に遅刻してさ、自爆テロに遭遇してぶっ飛んだのかと思っちゃったよ」

「あははっ脳みそ飛び散ったりなんて」

普通の女子に話したらしかめ面される内容も華子は笑ってくれる。ただ、他人がオレたちの会話を聞いたら異常だと思うだろうな。

華子とソファアーに座り、映画のDVDを観る。

「オレ、華子と一緒になれて嬉しいな」

「あたしもよ」

ギューーーーーッ。

しかし、当然、人生は長いから事件も起こる。

華子の勤める会社が倒産し、華子も非正規労働者になってしまい、オレたちは四畳半のボロいアパートに移り住んだ。

「華子。オレの収入が少ないばかりにごめんね」

「二人でやれば大丈夫」

四畳半は狭かったが、オレたちの心は広がった。二人には小説があったから。

「華子。読んでよ」

「いいよ」

小説の世界では、飛んだり跳ねたり潜ったり落下したり、やりた放題だ。

「うふふふ。面白い」

「よかったあ」

二人は夜になると布団を敷いて、子供に見せられないプロレスを

する。

壁が薄いので、隣のおっさんが怒鳴るんだ。

「タイトルマッチは国技館でやってくれよ！」

そろそろ子供がほしいなあ。

町内会のおばちゃんが、震災の義援金の募金にやって来た。無論、当たり前だが、強制ではない。

色々悩んだ末、千円寄付した。おばちゃんが「ありがとうございます！」「と言い、オレは「いえいえ。こういう時はみんなで協力しないと」と答えたが、心の奥底では、非正規労働者に支援をおおとおと叫んでいた。悲鳴を上げていた。助けを求めている。

月収が30万から40万あれば、千円も安いものかもしれない。

しかし、オレの月収は「9万円」！

嘘じゃない。これが非正規労働の現実である。昭和中期の月収かと思ってしまう。大企業が最高利益をはじき飛ばした裏では貧困に苦しむ労働者が鬼のようにいる。

月収9万円で千円の寄付はかなり痛い。オレは頭がおかしい。狂ってる。被災者の命も大事だが、それは自分の命あつてのことではないか。自分の命を生活を危うくしてまで寄付する必要があるのか。まるで特攻隊ではないか。

どう考えても、オレは頭がおかしい。精神異常者だ。精神病院に入院した方がいいのかも知れない。

正社員は減給になると質素に暮らさないといけない。非正規労働者は減給になるとあまりの生活の苦しさに踏切の前に立つ。

叫びたい。助けてくれと大声で叫びたい。

確かに、震災は大きな事件だ。ニュースになるのは解る。

しかし、非正規雇用問題だって、派手さはないが、国家的な視点から見ても大事件である。なにしろ、1985年の時点で600万人だった非正規労働者が、現在は1700万人もいるのだ。これが国

家的な事件と言わずして何と言う。にも関わらず、相変わらずマスコミはニュースにしないし、企業はスルーし、政府自治体は援助する気がはなからない。

だから、こうして地道に文章にしていけないといけない。難儀である。実にめんどくさい。しかし、きちんと訴えていかないと、国民が真剣に非正規雇用問題について考えない。考えないと、第二第三の秋葉原事件が起こる。そんなのはまっぴらごめんだ。

だから、根拠よく諦めずに書いていきたい。自暴自棄にならず、どうすれば国民が幸せになれるかを真剣に考えていきたい。正社員だけ幸せというのはやはり国家運営の観点からして失敗であるとオレは考える。

ますます悪化する非正規雇用問題。解決の目通しがまったく立たない。一体、企業はいつになったら非正規労働者に社会保障をするのか。一体、政府自治体はいつになったら非正規労働者に支援をするのか。一体いつになったら。十年後か、二十年後か、それとも五十年後か、それとも永遠にしないのか。

今日も踏切の前に立つ。もう死んでしまいたい。死ねたらどんなにラクか。低賃金重労働から解放される。

生きるのは地獄だ。働いても働いてもまともな暮らしができない。利益をすべて正社員や経営者に持っていかれる。

本当に通り魔してやろうかと真剣に考える。このまま黙っていたらひどくなる一方だ。

しかし、被災地でがんばってる人たちのことを考えると、踏みとどまる。苦勞してるのはオレだけじゃない。

一体、どうしたら日本はいい国になるのか。ずっとクソなままなのか。いや、必ずいい国になる。それは百年後かも知れないし、千年後かも知れない。

とにかく、信じてがんばるしかない。いつまでもクソ国家じゃない。クソ国家はもう卒業しないといけない。

非正規労働者に生存権を！

低賃金重労働時代を愉快に生きるにはどうすればいいか。

一つは小説を書いて読むといい。

小説は図書館に行けば無料だし、なろうも無料だ。ブックオフでも105円で一冊買える。

おまけに多くの感動を得ることができる。

そりゃお金があれば、遊園地に行けるだろう。フランス料理を食に行けるだろう。しかしお金がないので、小説に頼らないといけない。

頼らないで、一人でがんばると、自殺や通り魔に発展する。それほど低賃金重労働は辛い。地獄だ。ラクして高い報酬を得ている官僚や政治家には解らないだろう。

オレたちには小説が必要なのである。単なる娯楽じゃない。生きるための重要なツールだ。

日曜日のレジは混雑する。むちゃくちゃ並んでいる。やってもやつても終わらない。

これで時給が1000円ないのだから憂鬱になる。

とはいえ、お客様の笑顔を見ると疲れも吹っ飛ぶ。不思議なものだ。

しかし、経営者はこれでよしと考えてはならない。労働者の生活を向上させるために奮闘せねばならない。今は低賃金時代だが、いつかは、まともな報酬が支払えるような、まともな社会にしていけない。

確かに震災は大ニュースである。多くの人が生活を壊された。

しかし非正規雇用問題も、派手さはないが、本来なら大ニュースである。なにしろ、1985年の段階で600万人いた非正規労働者が、今は1700万人もいる。これは国家を揺るがす大問題だ。

被災地ほど壊れていないが、非正規労働者は確実に貧困に苦しみ、悩んでいる。

日曜日のレジは混んでいる。やってもやっても終わらない。助けってくれと叫びたい。しかし、お客様の笑顔を見ればへっちゃらだし、がんばればいつかはいい暮らしができると思ってる。決してあきらめてはいない。

実に国内だけで、1700万人の非正規労働者がいる。1985年の時点で600万人ということを見ると驚異的な時代である。

大企業は、ここ数年、最高利益をはじき飛ばしている。その裏で貧困にあえぐ労働者が増大している。

意味不明である。なぜこんなにも貧富の差ができてしまうのか。例えば、がんばってない人の所得が少ないというならまだ話は早い。しかし、がんばってもがんばっても所得が少ないままというのは異常事態だ。

テレビで「がんばれ日本」というニュースを見ると、テレビを叩き壊したくなってくる。これ以上、どうがんばれというのか。過労死しろというのか。

低賃金だから餓死に怯え、重労働だから過労死に怯える。民生が羨ましい。重労働だけど、リッチな生活を送ってる。ニートが羨ましい。収入ゼロだけど、仕事せんでいい。

非正規労働は地獄である。でも仕方ない。正社員になると小説が書けなくなるし、スポンサーがいらないのでニートにはなれない。

ひとまず、小説を書きながら非正規労働をするという生活を送らないと。

密かな楽しみは、ビデオボックスに行くこと。本当にささやかな幸せだけど。非正規労働者は低所得過ぎて結婚できないし、風俗にも行けない。DVDを観て自分を慰めるしかない。

絵を描いたり作曲したりするのも、小説を書くのに役立つ。小説

てのは、言葉しか使わないゆえに、つい理屈ぽくなりやすい。でも絵や作曲で感性を鍛えれば、表情豊かな小説が書ける。

無論、感性以外に文章の研究もしないといけない。小説を読むのも勉強になるが、評論を読むのも勉強になる。

小説を読む場合、自分が小説書きなので、つい主観的な読み方になってしまうが、評論だと、客観的に文章を研究することができる。

小説はどれくらい倍率であるし、非正規労働は低賃金重労働。

一言で言うと、地獄である。明日が見えない。

それでもお客様には笑顔で。

一体どうすればいいのか。

絶望との戦い。いつそのこともう死んでしまいたい。

今日も踏切の前に立つ。電車が通りすぎる。

とにかく、小説を書かねばならぬ。ピンチの時はチャンスの時。

優れた文学作品は闇の中から生まれることが多い。

「がんばれ日本」なんて言うんじゃないよ。「がんばれオレ」でいいじゃないか。日本人の全員ががんばってないわけじゃないだろう。すでにがんばってる人にがんばれなんてぬかすな。過労死させる気か。

オレは犯罪を少しでも減らしたい。減らして住みやすい国にしたい。しかし、政府は犯罪を増やしたくてたまらない。巷の犯罪が増えると、みんなの関心がそちらに向かい、政府がしている色々な悪いことを隠蔽することができるのだ。だから政府は、大企業の上のやつらに援助をしまくり、下のやつらを切り捨てる政策をとり、貧困層を犯罪に走らせる。以前に警察24時で観た。派遣切りされた男性がネットカフェで暮らしていたのだが、いよいよカネがなくなり、スーパールのドアをハンマーで叩き壊し、中に潜入。ただ最近ではセキュリティがしっかりしてる。警察と内通しており、ただちに警官が駆けつけ、男を逮捕。警官が男にリュックの中身を見せろと言

ったら、中から、無洗米、海苔、塩、梅干し……おにぎりでも作るつもりだったのか！ 警官が「お前、どこで米炊くつもりだったんや」と問うと、男性は「あっ。考えてなかった……」てな話を見ると、政府の政策が実に上手く機能してる事が解る。パラサイトシングルとしては笑える話だが、非正規労働者としては笑えない。明日は我が身か。政府の策略に引っ掛かりやすい立場である。世の中にお金はたくさんある。大企業は最高利益を叩き出してる。なのに、貧困に苦しむ労働者が増大してる。単純におカネの回し方が下手なだけでないか。一部の労働者にたくさん回し、たくさん労働者に少ししか回さないからおかしくなるのではないか。均等に回さないのではないか。あれっ。これって共産主義かな。共産主義は滅びたな。怠けるやつにまで均等に回すから、みんなやる気がなくなっただけで潰れた。でもさ、今の日本怠けてるやつおらんやん。みんながんばってるやん。だから均等に回しても問題ないと思うけどなあ。共産主義は負けただけど、資本主義が勝ったわけじゃない。餓死者が出たり多くの労働者が貧困に苦しむ結果が出た。これは、ある種、資本主義が敗北してることを示している。共産主義と資本主義のバランスが大事なんじゃないかな。みんな給料同じじゃやる気がなくなり社会が停滞するが、貧困による餓死者が出てる国家ってのは国家と認定できない。完全に無政府状態である。

不安だ。日本が不安だ。非正規労働者が1700万人もいる。1985年の段階で600万人だったから、これは非常事態といえる。いわば、今は戦国時代。生きるか死ぬかの時代だ。テレビのコメンテーターがたまに「日本は平和ですねえ」と言う。理解ができない。平和ならなぜこんなに苦しいのか。貧困に苦しむのか。平和ならそんなことはないだろう。平和というのは落ち着いた状態のことである。

現在に戦争は存在する。心理的な戦争と経済的な戦争だ。有効な思想がないので人々は精神を病んでいる。また、不況のため、企業は

戦争をしてる。

いったいいつになれば日本は平和になるのか。オレは、15年間ずっと戦争してる。早く正規の仕事がしたい。

早く平和がほしい。戦争はもういやだ。疲れるだけだ。苦しむだけだ。

平和をくれ！

むなしい叫び。

おじいさんが「今の日本は平和だねえ。昔は戦争というのがあってひどかったんじゃない」とつぶやいているのを見ると殺したくなってくる。

何回も言ってるだろ！ 日本の若者は今戦争状態なんだよ！！！！

一体どうすればいいんだ。一体どうすれば。

いい方法が浮かばない。もがき苦しむ。

一体どうすれば人々が幸せになれるんだ。苦しみから解放されるんだ。地獄から解放されるんだ。一体どうすれば。

わからない。さっぱりわからない。なぜがんばってる人がバカな目にあうのか。なぜ怠けてるやつが美味しい思いをするのか。

世の中はわからない。意味不明である。システムがすでに崩壊してるにも関わらず、誰一人それに気づいていない。

国がすでに末期ガン状態なのに、まだみんな心の中で大丈夫と思っている。

みんな早く目を覚ましてほしい。早くみんな真実に気づいてほしい。早くみんな動いてほしい。早くみんな人間になってほしい。早くみんな悪魔から足を洗ってほしい。早くみんな過ちに気づいてほしい。早くみんな治して欲しい。早くみんながんばってほしい。早く早く早く。もたもたするな。起きろ。いつまでも寝ておるな。

一部の人に苦痛を負わせるシステムはやはり間違ってる。間違いは早く直してかないと国家が成立しない。

早く早くまともな国になってほしい。早く早く真面目な国になってほしい。早く早く早く早く弱い者に優しい国になってほしい。早く弱い者を助ける国になってほしい。早く悪いやつをこらしめることができる国になってほしい。早く働く国になってほしい。早くいい国になってほしい。早く素晴らしい国になってほしい。早く性格のいい国になってほしい。

マスコミは嘘の情報を流すな。真実を報道しろ。この国の国民はもっと低俗で愚劣だ。逆のイメージをテレビで放映するな。現実逃避するな。

現実を真っ正面から受け止め戦え。夢はもう見るな。夢はもう終わった。寝る時間は過ぎました。日本のみなさん、起きてください。

被災地で被災者が「明日がわからない……」という表情してるのをテレビで見ると、「オレは13年間、明日が見えてない!」と叫びたくなる。

引きこもりを3年、非正規労働を10年。長いトンネルの中にいる。

しかし、きっと明日はある!

被災者だって、ずっと闇の中にいるわけじゃない。時間はかかるかもしれないけど、いつかきっと光をつかむ。非正規だって同じだ。今は苦しくて低賃金だけど、いつかはきっと賃上げされ、仕事が楽になる。

その日を目指し、戦おう。前進しよう。

絶対に絶対に明日はある。明けない夜はない。きっとトンネルを抜ける。

その日まで前進前進前進あるのみだ。

オレたちは負けない。

勝たないけど、負けない。

生きてやる。

絶望なんかに殺されてたまるかボケえ！

終わることのない戦争。低賃金重労働。戦闘を繰り返す毎日。毎日毎日職場に爆弾が降ってくる。毎日毎日職場でマシンガンを構えている。敵兵と戦っている。

早く日本が平和にならないかなあ。戦争はもうやりたくない。平和がほしい。ノーウオー。

平和が、平和が、平和がほしい。もうウンザリだ。

ある男性が、生活保護申請しに役所に行ったら、役人に「がんばれば、大丈夫です」と言われ、受理されなかった。

結果、男性は餓死した。遺体が部屋で発見された。

ある男性が派遣の仕事を無理矢理辞めさせられ、アパートが借りられず、ネットカフェで暮らしていた。

しかし、ついにカネが尽き、男性はハンマーでスーパーのドアを叩き壊し中に潜入。しかし、現代はセキュリティがしっかりしてる。警察と内通しており、警官が駆けつけ現行犯逮捕。警官が男性にリュックの中身を見せろと言ったら、無洗米、梅干し、塩、海苔……。

警官が「お前、米をどこで炊くつもりやったんや」と尋ねると、男性は「あっ……」

ギブ・ピース・ア・チャンス。

平和にチャンスを与えないか。かつて、ジョン・レノンはそう歌った。オレたちが言いたいのはただそれだけさ。

非正規労働者に生存権を。オレたちが言いたいのはただそれだけさ。

日本がいい国になったって、美しい素晴らしい国になったって意味がない。

餓死者やホームレスをこんなに出してちゃ、美しい国なんて、くそくらえさ。美しくなくてもいいから、餓死者やホームレスを減らせ。食べ物あげろ。住む所あげろ。美しい国になりたきゃ勝手

になれ。そんなことどうでもいい。くそだ。

「がんばれ日本」なんて言ってる場合じゃねえ。お前ががんばれ。オレはすでにずっとがんばってる。

負けてたまるか。くそ。負けそうだ。挫けそう。

確かに世間というのは強敵だ。一人一人はへなちよこでヘタレだが、集団になるとごつつ強い。怖い。負けそうだ。もう降参してしまおうか。「世間様あなたが正しゅうござえます。えへへ」と言っ
てしまおうか。白旗を上げてしまおうか。上げれば、陰湿ないじめを受けずに済む。ラクになる。世間というやつは、自分にとって都合の悪いやつには厳しいが、都合のいいやつに対しては優しいものだ。くそ野郎だからな。白旗上げれば優しくしてくれる。

いかんいかんいかん。ダメだ。戦わないと。戦う前に降参してどうすんだ。情けない。ひるむな。やってやれ。負けるな。戦え。進め。撃ちまくれ。斬りまくれ。殴りまくれ。

世間がどんなに悪いことをしても、正しい心を持続けろ。

世間がどんなに正しさを振りかざし弱い者をいじめても、お前は、悪いこととしてでも弱い者を助ける。

負けるな。たかが世間のへなちよこくそ野郎ごときに負けるな。戦え。

「あーあ。あーあ」

飯沼ぶり雄は、踏切の前に立っていた。

「もう死んでしまいたいな……」

電車が通りすぎる。人間、簡単には死ねないものだ。

しかし、死にたくなる原因が取り除かれたわけではないゆえ、死にたい気持ちは残ってる。

ぶり雄は、今度は、廃ビルの屋上に上った。

「うわあ。高え。ひいい」

ぶり雄は飛び降りることができなかった。

「情けない。死ぬこともまともにできないのかオレは」
誰に言ってるのかな。読者かな。そうかも。

ぶり雄は、公園に行き、木を見つけ、ベンチを移動させ上り、枝にネクタイをくくり、ワツカを作った。首吊りするつもりか。

「お父さんお母さん。ごめんなさい……」

ぶり雄がワツカに首をかけようとしたその時、野球の玉がぶり雄の額に命中し、ベンチから転げ落ち、気絶した。

「おじさーん。ごめんごめん。あっ」

ちびっこは、気絶したぶり雄を発見し、揺するが、ぶり雄は起きない。

仕方ないので、みんなで協力して、担いで、野球をしてたちびっこの一人のアパートへ連れて行った。

ぶり雄が目を覚ますと、布団の上にいた。

「??????」

「あっ目が覚めたみたいだね」

目の前には、きれいな女性がいる。ちびっこの母親だろうか。ちびっこがいないということは、また野球にでも行ったのか。

ぶり雄は顔が真っ赤になった。もろタイプだったのだ。

「お茶飲む？」

「す、すみません」

お茶を飲みながら、ちびっこの母親を眺める。

「あたし、津村ぷちえ。あなたは？」

「飯沼ぶり雄」

「ぷっ変な名前」

「君だって」

二人してあははと笑った。

「あっこうしちゃおれない」

「どうしたの？」

「自殺の途中なんです。早く死なないと」
ぷちえは顔が曇った。

「自殺する理由で何よ」

「そ、それは言えません」

「大丈夫。誰もいないよ」

「読者が読んでます！」

ぶちえは、だから理由を聞いてるのにと思いつつ、まあ理由は何でもいいかと思う。自殺を食い止めるのが先だ。

「ガスかネクタイを貸してください。お願いします」

「死ぬ気満々ねえ」

ぶちえは、「死ぬ前にあたしとする？」と聞いた。

ぶり雄は顔が真っ赤になった。耳まで赤くなってる。

「だっダメです。読者が読んでます」

「描写を省略すれば大丈夫よ。それとも、あたしとするのいや？」
「え」

ぶり雄は鼻血がたら〜と垂れた。

「ねえ」

ぶちえがぶり雄に寄る。甘い香りがする。

「いやっちゅうか何ちゅうか。できればしたいけど。あははは」

「じゃあ決まり！」

「とほほほほ」

ぶちえは、布団にもぐり、ケータイ電話をかけた。

「あっマチャキ？ 母さん今からちよつとエッチなことから、あんた、七時くらいまで遊んでなさい。いいね」

「もう言ってるよ……」

ぶちえは、ぶり雄を仰向けにさせ、上に乗った。

「キスするよ？」

「うん……旦那さんに怒られるな」

「母子家庭よ」

緊急ニュースです。東北関東地方で大震災が起きました。繰り返しの報道します。本日、東北関東地方で大震災が起きました。みなさん、余震に気をつけてください。引き続き、地震情報を確認ください。

「ぶり雄！　ぶり雄！　ぶり雄！」

「ぷちえさん！　ぷちえさん！　ぷちえさん！」

一階の豆山さんの部屋。

「うわっばあさん。地震じゃ。地震じゃよ」

「違うよ。上のぷちえさんが男とやってんだよ」

「ほ、ほんとに？　しかし、すごい揺れだなあ」

「旦那さん亡くしてだいぶ経つからねえ。たまってたんじゃないのかい？」

繰り返し報道します。本日、東北関東地方で大規模な震災が発生しました。詳しい情報は随時お伝えします。引き続き、地震情報をご確認ください。

また大きい地震が起きて、聖騎士さんの住んでる真下が震源らしい。亡くなった人もいるらしい。

そんな中、聖騎士さんは、パワフルに長編を一話約14万文字も更新した。逆境にいるやつは気迫が違う。

翻ってオレは、小説書くのしんどい……環境はいいんだけどなあ。

インフラばつちり、ライフラインは正常なのにまるで書く気が起きぬ。やる気が起きぬ。一文字書くだけでひいひいひい。

眠気と戦うために、手の甲にペンを刺す。「痛え！」尻を鞭で叩く。

「ぎゃふん！」頭を壁にがんがん打ちつける。「うぎゃあ！」

ただ痛いだけで、進まない。
ガッデム！

（聖○騎○士「……」）

がたがたがたがた。

「うわあ地震だ。やばい」

「相当でかいぞ。テレビつけろ。震源はどこだ」

ニュースを見てみても、地震情報なんてやってない。

がたがたがたがた。

「あーっ。政夫がタンスの下敷きになった」

「に、兄ちゃん。助けて。苦しい」

「おい哲夫！ 母ちゃんと父ちゃん、どこだ。呼んでこい！」

「寝室だよ！ 入っちゃだめって言われてるよ！」

「な、なにに！」

「兄ちゃん。苦しいよう。苦しいよう」

「チキショー！」

がたがたがたがた。

働いても働いても働いてもまともな暮らしができない……非正規労働は地獄だ。

1985年の時点で600万人だった非正規労働者が、現在はなんと1700万人。なんという時代だ。狂ってる。

しかし、嘆いてばかりもいられない。いくら世の中が狂っていても、オレたちは進まなきゃいけない。一步一步、歩みは遅いが確実に……。

オレの目標は、五年後に非正規労働者をゼロにすること。全員正社員にすること。労働者全員に社会保障をすること。

無理かも知れない（てか、100%不可能だろ！）

でも、夢は大きく持たなくちゃな。政府は、現状維持に政策転換したようだが、そんなの許さないぜ。

絶対に景気を回復させる！

まあ不可能かもしれんけど、夢は大きく持たないとな。男だから！

オカマはどうすればいいの???

震災も怖い、ワンクリック詐欺も怖い。震災は天災だからある種仕方ない面もあるが（言い方悪いけど、実際に天災に関しては達観しとる。だから、昔の「原爆投下は仕方ない」発言は許せぬわね。

ありや完全に人災やけん）、ワンクリック詐欺は完全に人災。そこが怖い。自分と同じ形したやつが犯人でところが怖い。自分もまかり間違えば、同じことをしてるかもしれないが、ごつつ怖い。

オレにも犯罪者要素であるからなあ。弱者を助けるためならルールを破れて、ちょっと思ってる。ソクラテスみたいに「悪法といえど法は法」と言って、毒の入った水を飲むことはできんよ。くだらぬ下劣な法律なら変えてやろと思ってしまう。

日本国憲法なんてゼロから作り直したいね。ありや百害あって一利なしだよ。貧困に苦しむ労働者を助けることができんし、自衛官の名誉を守ることもできん、へなちよこ憲法だ。

尖閣諸島の映像を流した人の気持ちわかるなあ。同じ犯罪でも、京大カンニング事件のアホとは根本が違うよねえ。

政治家と渡部陽一の違いかな。

どちらも、犯罪者だよ。政治なんてなくたって別に生きてけるのに、勝手に政治家なんてポジションをこしらえて多額の報酬をかすめとってけてかる。愚劣な犯罪者だ。

陽一も犯罪者だ。何だよ。戦場カメラマンで。戦争を商売にすんな。平和主義の日本では違法だぞ。

しかし、陽一の撮った写真を見て日本国民が真剣に物事を考えるようになりバカじゃなくなってるのを見ると、いい犯罪者だと思うね！
陽一はいい犯罪者！

生活があまりに苦しい。月収が19万円だったのが13万になり、それが10万になり、ついに新年度から9万になる。仕事が激減した。

11月発表のすばる文学賞に当選して100万円が入ればバランスがとれるが、可能性は1／1300。厳しい。実に厳しい。ほとんどバクチだ。作家はヤクザだ。

そうは言っても嘆いていても先には進まないの、今できることに全力を尽くしたい。収入ゼロよりよしとしよう。オレたちもがん

ばるから、経営者も労働者の生活を少しでも向上させるために奮闘してもらいたい。

まったく、しかし経営者と労働者とは温度差があり過ぎだな。例えば、バイトは一年契約である。これはすごい不安定だ。一年すれば自動的に切られてしまうのである。終身雇用の真逆である。いいかげんに腹が立つ。

しかし、経営者は「一ヶ月や二ヶ月では切りませんよ。一年は雇います。安心してください」なんてぬかす。正直、「はあ?？」という感じだ。ぶちギレそう。

もう意味がわからん。これが新自由主義ってやつか。胃がちぎれそう。ああ。頭が爆発する。この怒りをどう発散すればいいのか。

明日も明後日も来年もそのあとも貧困貧困貧困……。

夜が明けない。一体いつになれば闇から脱出できるのか。理不尽極まりない世の中である。踏切の前に立つのが日課になってしまった。

ガッデム！

世の中のありとあらゆることが気に食わない。実はこれは小さい頃と逆の発想だ。幼き頃は、割りと世の中を肯定していた。

悪い人がいても、心の闇を抱えてるからしょうがないなあと思い、いい人のことは無条件で尊敬していた。

しかし今は悪いやつを見たらぶっ殺したい。いいやつを見てもすぐに悪いところを発見して殺したくなってくる。

なぜかそうなってしまってる。修羅場の数がそうさせたのか。幼き頃の方が幸せだったような気がする。

ここまで悪いことがよく見えるほどんよりしてくる。苦しい。痛い。疲れる。

だけどオレたちは進まなきゃいけない。理由なんてない。進まなきゃいけないんだ。理由なんて考えてる暇はない。

前進前進前進あるのみだ。早く闇から脱出しなきゃいけない。早

く光をつかまなきゃいけない。
生きるために。

いったいオレはどこに向かっているのか???

どこから来て、今どこにいて、どこに行こうとしてるのか。

くじけそうである。あまりに状況が厳しい。自暴自棄になりそう。
月収が9万円になった。もう35歳である。

とにかく心に響く小説が書きたい。ただそれだけ。ほかにはあまりない。

いろいろ悩むが、どうにも道はひとつしかないようだ。いろいろあるように見えて、ひとつだ。

それは、生きる、ということである。

生きるのを阻害するものは山ほどある。収入もそうだし、人間関係もそうだし、天災もそうだ。

しかし、負けぬ。

勝ちはないが、負けぬ。

世間を敵に回しても、生きたい。

世間が殺しにかかってきても、生き延びたい。

確かに世間というのは強い。パワーがあるし数も半端ない。戦うと疲れる。

しかし、生きるためには仕方ない。世間と戦うしかない。死ぬよりましだ。

原付で走っていた。原付というのは悲しい立場だ。あまりに左に寄り過ぎるとガードレールに突っ込むし、右に寄り過ぎると車にはねられる。いや／＼ないや／＼な立場である。ひやひやする。

これは、今のオレの精神状態に関係してるようで、さらにいや／＼な感じだ。オレは、今、小説を書きながら非正規労働をしている。職場に行けば、小説家志望なんてオレしかないから心理的に孤立してしまうし、プロ作家業界に意識を向ければ「あんたアマチュア

でしょ」とはじき出される。

つらい時代だ。しかし、それでも、やってかねばならない。誰かに文句言ってもしょうがない。まだ仕事があるだけまし。小説という夢があるだけまし。と思わねばならぬ。仕事がなかったり、小説がなかったりするのとは地獄である。

とはいえ、つらいことはつらいので、オレはビデオボックスへ行く。現実逃避だ。オールナイトコースという夜九時から朝までのコースが2000円である。月収9万円の身としてはきついですが、風俗に行くと考えれば安い。

オレはだいたい、エロいのお笑いDVDを見る。ダウンタウンの笑ってはいけないシリーズは大好きで、繰り返し見ている。

システムを盗めないかなあと思う。テレビのものなので、やはり文学的ではない。しかし、お笑いゆえにばりばりエンタメである。

小説はやはり、文学性とエンタメ性が共存してるのが心地いい。笑ってはいけないシリーズ的なギャグ話を文学的に肉づけし、長編小説が書きたいなあなんて思う。イメージとしては町田康先生の「パンク侍、斬られて候。」が、一番、理想のエンタメ文学に近い。

まあそれはそれとして、今の一番の問題は所得である。月に20万あれば何とかなるが、9万はきつ過ぎる。先日すばる文学賞に投稿した。これが当選すれば百万円もらえるが、1300人が応募する新人賞である。なかなか難しい。

ケータイ代8000円が所得の一割てやばいでしょ。胃がちくちくする。

五年後には全員正社員にしたい。

1985年の段階で600万人だった非正規労働者が現在は1700万人もいる。それを考えると実現不可能な夢かもしれない。

しかし夢は持続したい。一部の人に社会保障があって、一部の人にはないというのはやはりおかしい。何としても全員正社員にし、

適正報酬が支払われるようにしなきゃいけない。低賃金をずっと維持するのは法律で禁止しないといけない。

革命を起こすしか方法はない。普通にやってたら、いつまで経っても変わらない。

革命の内容も現代的でなくちゃいけない。フランス革命やロシア革命を真似してもダメだ。古すぎる。現代に合った革命を起こさなくちゃいけない。

考えろ考えろ考えろ考えろ。

全員正社員にするにはどうすればいいか考えろ。

死にたい。苦しいのはもういやだ。楽になりたい。早く死にたい。生きていたくない。死にたい。苦しいのはもういやだ。苦しいのはもうウンザリだ。楽になりたい。終止符を打ちたい。死にたい。苦しいのはやだ。もういやだ。早く楽になりたい。早く早く早く楽になりたい。死にたい。早く死にたい。今すぐ死にたい。苦しいのはもういやだ。楽になりたい。苦しいのはもうたくさんだ。苦しみ続けるのはもういやだ。楽になりたい。安心したい。戦いたくない。早く死にたい。苦しい。痛い。もうウンザリ。早く死にたい。生きていたくない。終止符を打ちたい。ジエンドにしたい。死にたい。苦しいのはやだ。早く死にたい。楽になりたい。苦しむのはもういやだ。楽になりたい。死にたい。生きていたくない。死にたい。楽になりたいたい。もう苦しみたくない。死にたい。早く死にたい。

生きてても何もいいことがない。死にたい。

あるのは絶望ばかり。死にたい。

何でオレは生きてるんだろう。生きてても意味なんかないのに。

何で死んでないんだろう。死ねば楽になれるのに。

不思議な日々だ。死にたい。

死ねば幸せになれる。死ねば苦しみから解放される。

死にたい。死んでしまいたい。

生きていたって何もいいことがない。辛いこと悲しいことばかり。いつそのこと死んでしまいたい。苦しいのはもういやだ。悲しいのはもういやだ。

もう耐えられない。死にたい。死んでしまいたい。死んで幸せになりたい。地獄から解放されたい。闇から解放されたい。この腐った世の中から抜け出したい。

死にたい。終止符を打ちたい。死にたい。終わりにしたい。死にたい。早く死にたい。

生きるために。

「華子。オレたち結婚できないかな」

「あたしは法的にできるけど、みつくんは無理でしょう」

「あーあ。つまんねえな」

土手に寝転ぶ光男の頭を華子がなでる。

あたたかい。春である。

二人は、川を眺めながら異変に気づく。

「おいっ誰か流されてるぞ」

「ほんとだ」

「わいーん。助けてー」

「ジョンだ」

光男は、急いで走って、服を脱ぎ、川に飛び込む。

「わーオレ泳げないんだったー」

「ば、バカ！」

華子は仕方ないと思い、服を脱ぐ。

読者がじろじろ見る。

「ぐへへ華ちゃん。いい胸してるな」

「尻もいいね」

「いゃん！」

華子はあわてて胸と股間を隠す。

どんどん流されるジョンと光男。

今日はいい天気である。春だから、いい感じだ。あったかい。ほのぼのしてる。

幸助が土手に座って漫画雑誌を読んでいたら、川に流れる光男とジョンを発見。

「あつ流されてる」

「わいーん」

「助けてー」

幸助は急いで走って、服を脱いで、川に飛び込んだ。

「うわー！オレ泳げないんだったー」

「バカー」

どんどん流されるジョンと光男と幸助。

実にいい天気だ。こんな日は桜でも見に行きたいですな。

作者は土手に座り、ペットボトルに入ったレモン水を飲みながら、ノートを広げ、小説のアイデアを書いていく。

「ああ。いい天気だな。彼女がいりゃデートに行くのにな。悲しい小説人生だ」

タバコに火をつける。

ジョンと光男と幸助が流されてるのを発見する。

「お。何だあれ。む。アイデア浮かんだぞ」

作者はノートにさらさら書いていく。

「出だしは、川でおぼれてる主人公。いいぞ。いい滑り出しだ」

「たすけてー」

「わいーん」

「おかーちゃーん」

作者は熱中して、夕方まで書いていた。

「だいぶ暗くなってきたな。そろそろ家に帰るか」

土手をあがると、土手の上の道で、香坂に会った。

「香坂」

「やあ」

香坂は作者が書く小説の主人公のモデルとなった男である。

「どこ行くの」

「ちよつとバッティングセンターに」

「そうか」

「そういや、先生。知ってる？ 田中さんとこの犬のジョンと幸助と相澤（光男のこと）の遺体が、河口あたりで発見されたらしいぜ？」

「え。本当に」

作者は変な汗が出てきた。

「かわいそうだねえ」

「そうだねえ」

作者は知らなかったふりをした。

「あつ先生」

「どうした」

「誰か流されてる」

川を見ると、確かに誰か流されてる。

「オレ助けに行く」

香坂は急いで土手を下り、服を脱いで、川に飛び込んだ。

「うわーオレ泳げないんだったー」

香坂と誰かはどんどん流される。

作者は、「あっお笑い番組がやる時間だ」と言っ、あわてて家に帰った。

翌日、新聞を広げると、ジョンと幸助と光男と香坂と誰かが遺体で発見されたという記事が載っていた。

「ふうむ。いろいろあるな人生というのは」

それにしても、今日もいい天気である。春である。

作者はレモン水を飲みながら、土手でノートを広げ、アイデアを書き込んでいった。

前の川を誰かが流されていく。

「助けてー」

しかし、作者はネタ作りに没頭していたので、気づかなかった。
「ううむ。しかし、事件性に乏しいなあ。平凡な日常に起こる意外な出来事。小説というのはなかなか難しいものだ」

作者は土手に寝転んだ。いい天気。鳥が鳴いている。春。あたたかい。

「あーあ。青い空。彼女がいたらなあ。デートにでも行けるのになあ。悲しい小説人生だ」

作者はうとうとしてきて寝てしまった。

しばらくして、その前を誰かと誰かが流されていく。

「うわーーーー助けてーーーーー」

「誰かーーーーー」

作者は夢の中で海でおぼれてる夢を見た。

「うわっぷ。わっぷ。オレ泳げない。助けて誰か助けて」
サメが近づいてくる。

「怖いいいいいい」

作者は目を覚ますと、汗びっしょりだった。

「ああ。何ちゅう夢だった」

一応、股間を覗いてみた。よし。もらしてはいない。

作者がタバコに火をつけ、川を見ていると誰か流されてる。

「あっあれは、隣の節子さんじゃないか」

節子さんというのは未亡人でむちゃくちゃボインである。

「誰かー助けてーーーーー」

「よし。待ってろ！」

作者は急いで土手を下り、服を脱いで川に飛び込んだ。

泳いで、節子さんのところまで行って、泳ぎながら、節子さんの胸をもんだ。

「うわっぷ。いあん。やめて。誰。おっぱいもまないで。うわっぷ。いあん」

「うへへへへ。すんげえやわらけー」

そのまま、二人は抱き合い、どんどん流されていく。

「あ。あなた隣の先生」

「うへへへ。節子さん。いい身体してますね」

「やらしいわね先生！」

二人は抱き合い、どんどん流される。どんどんどんどん流される。その先は滝になっていた。

二人は抱き合いながら、落ちていく。

「せんせええええええ」

「節子さああああん」

恋に落ちていく。フォーリング・ラブ。

まるで下降する日本経済のようではないか。
ガッデム！

踏み切りの前に立つ。飛び込みたい。いやなことがあるすぎる。陰鬱な表情。太陽が出ているというのに暗闇の中にいるような気持ちでいる。雨が降ってないのに心の中でざあざあ降っている。

死ねたらどんなに楽だろう。苦しい思いをせずに済む。いやなものを見なくてもいい。悲しまなくてもいい。

電車が通り過ぎる。

次の電車を待つ。次こそ飛び込む。

あまりにいやなことが多すぎる。陰鬱きわまりない表情。太陽は出てる。しかし、心は暗闇だ。真っ黒だ。ヘビースモーカーの肺の中のような。人間社会のような。雨なんて一滴も降ってない。それなのに心はびしょ濡れだ。心の中では雨がずっとずっと降って止まない。寒い。風邪を引きそうだ。

電車が来た。

「怖い」

電車が通り過ぎる。

次の電車を待つ。次こそ絶対に飛び込む。

いやなことが世の中多すぎる。あまりにいやなことが多すぎる。つらい。苦しい。心が闇夜に包まれる。何も見えない。光がない。どこまでいっても陰惨絶望憂鬱……天気はいいのに、心の中ではどしゃ降りだ。ずっとずっと降っている。ざあざあざあざあざあざあざあざあざあ、てな感じた。止む気配がまるでしない。ずっとずっとずっとずっと。

電車が来る。よし今度こそ飛び込む。

ごおおおおおおおおおおおお。

電車が通り過ぎる。

「次は絶対に飛び込む」

苦しいのはもうウンザリだ。痛いのはもうウンザリだ。死にたい。死んで楽になりたい。もう苦しみたくない。この世から脱出したい。何もいいことがない。苦しいことばかり。

無になりたい。終止符を打ちたい。人に会いたくない。死にたい。滅びたい。

生きるのがやだ。ウンザリだ。これ以上生きてても苦しいことしかない。楽しいことなんて何もない。死にたい。

早く死にたい。憂鬱から解放されたい。疲弊から解放されたい。陰惨から解放されたい。

地獄から脱出したい。死んで地獄から脱出したい。

早く死にたい。早く早く早く死にたい。楽になりたい。苦しいのはもういやだ。苦しいのはもうウンザリだ。楽になりたい。安心したい。もう戦いたくない。

死にたい。

死にたい。早く死にたい。

早く死にたい。苦しいのはやだ。楽になりたい。

地獄から早く脱出したい。闇から早く脱出したい。シニタイ。早く死にたい。生きていたくない。苦しいのはもうウンザリだ。早く死にたい。

シニタイ。生きていたくない。シニタイ。生きていたくない。もううんざりだ。苦しいのはもうやだ。痛いのはもうやだ。悲しいのはもうやだ。うんざりだ。シニタイ。

脱出したい。地獄から抜け出したい。もう苦しいのはやだ。つらいのはもういやだ。地獄から脱出したい。シニタイ。生きていたくない。悲しいのはもううんざりだ。耐えられない。シニタイ。早く早く死にたい。もううんざりだ。もういいかげんにいやだ。頭にくる。シニタイ。早く死にたい。

体調が悪い。ああそうゆうことなら休んでも給料払いますよ。

となれば、休む。しかし、うちの塾には有給休暇の制度がない。となれば、生活のために行くしかない。行かないと餓死する。

結果、余計に身体を壊し、入院する。当然、会社では、アルバイトに社会保険の制度はない。健康保険に入る余裕がなかったヤツなら、完全、自腹。貯金のあるヤツなら助かるが、ないヤツには、死あるのみ。だいたいの非正規には貯金する余裕がないので、病気になるれば死ぬしかない。

震災で騒げない理由がこのへんにある。震災があってもなくても、非正規労働者は毎日毎日ぐらぐら揺れて安定しないのだ。震災になる以前から、被災者に近い生活を送っているので、震災が起きてもあまり驚くことができなかった。それどころか、震災以前から非正規の仕事を解雇され死んでる人がいる。

とても、震災が起きてびっくりするような状態じゃない。びっくりしてたのは富裕層だけである。

筒井師匠の「ダンシング・バニティ」が文庫になっていた。解説は清水良典さん。「バニティ」は反復文体をモチーフにしている。

ちよっと思ひ出すに、オレが去年から今年にかけて制作した三本の長編もまた、反復文体をモチーフにしている。なぜだ。筒井ファンだからと言ってしまえば話は早いが、師匠は反復文体以外にも多くの実験をしている。

ちなみに、筒井康隆師匠は「ダンシング・バニティ」という長編で反復文体を試みている。文庫も最近出た。解説は清水良典さんだ。なかなかいい解説を書いている。オレも昨年から今年にかけて執筆した長編三本で、反復文体を試みている。筒井ファンだから真似してるわけだが、師匠は反復文体以外にもたくさん実験してきている。なにゆえ、反復文体をオレは真似しているのか。反復文体を扱った、師匠の長編「ダンシング・バニティ」が文庫化されていたので、友達に送ろうかな。解説は清水良典さんである。オレも最近の長編で

反復文体を試みている。

早く死にたい。生きていたくない。早く死にたい。地獄から脱出したい。この世の地獄から脱出したい。楽になりたい。苦しみたくない。早く死にたい。

早く早く死にたい。苦しみから解放されたい。地獄から抜け出した。早く死にたい。

楽になりたい。早く死にたい。生きるのももううんざりだ。苦しいことばかり。いいことが何もない。死にたい。早く死にたい。楽になりたい。苦しみから抜け出したい。闇から抜け出したい。地獄から抜け出したい。

苦しい。疲れる。早く死にたい。楽になりたい。早く死にたい。

早く死にたい。苦しみたくない。

早く死にたい。

生きたい。殺されたくない。生きたい。

生きたい。殺されたくない。社会保障が欲しい。

生きたい。死にたくない。ボーナスが欲しい。

生きたい。死にたくない。生きたい。

死にたくない。社会保障が欲しい。生きたい。月収40万円欲しい。

生きたい。

社会保障が欲しい。喉から手が出るほど欲しい。生きたい。死にたくない。殺されたくない。生きたい。

死にたくない。生きたい。ボーナスが欲しい。死にたくない。生きたい。

生きたい。死にたくない。社会保障が欲しい。殺されたくない。生きたい。ボーナスが欲しい。生きたい。

死にたくない。将来設計が立てられるだけの収入が欲しい。生きたい。死にたくない。ギリギリの生活はいやだ。

生きたい。死にたくない。安定したい。非正規労働はウンザリだ。

生きたい。死にたくない。殺されたくない。
殺されたくない。生きたい。社会保障が欲しい。
生きたい。死にたくない。

早く死にたい。もう生きるのがいやだ。うんざりだ。苦しい。もう
いやだ。早く死にたい。生きたくない。地獄から抜け出したい。早
く死にたい。

生きるのは地獄だ。苦しい。痛い。疲れる。早く死にたい。早く早
く早く死にたい。

死んで幸せになりたい。不幸なのはもううんざりだ。不幸の連続は
もういやだ。シニタイ。生きていたくない。生きるのもういやだ。
うんざりだ。シニタイ。早く死にたい。

苦しい。痛い。疲れる。シニタイ。苦しいのはもういやだ。生きて
いたくない。シニタイ。苦しい。生きたくない。シニタイ。苦しい。
シニタイ。生きていたくない。苦しい。頭が痛い。苦しい。

シニタイ。生きていたくない。気が狂いそう。シニタイ。
生きたくない。苦痛から解放されたい。地獄から解放されたい。シ
ニタイ。生きたくない。シニタイ。もううんざりだ。生きるのがう
んざりだ。どこまでいっても苦痛苦痛苦痛。いいことなんて何
もない。苦しいことしかない。

シニタイ。早く死にたい。生きていたくない。地獄から抜け出した
い。苦しい。早く死にたい。早く早く早く死にたい。

一刻も早く死にたい。

シニタイ。生きていたくない。シニタイ。地獄から逃げたい。もう
いやだ。ここはいやだ。苦しいことばかり。悲しいことばかり。い
いことが何もない。早く死にたい。苦しい。もう死にたい。早く死
にたい。早く早く早く死にたい。

ハヤクシニタイ。ハヤクハヤクシニタイ。生きていたくない。苦し
いばかり。悲しいばかり。痛いばかり。疲れるばかり。もう死にた

い。ハヤクシニタイ。生きたくない。地獄から脱出したい。シニタイ。生きていたくない。ハヤクシニタイ。ハヤクハヤクハヤクハヤク・シニタイ。ハヤク・シニタイ。

シニタイ。生きたくない。苦しいのはもういやだ。シニタイ。いいことが何もない。ただ苦しいだけ。シニタイ。苦しい。ハヤクシニタイ。地獄から抜け出したい。ハヤクシニタイ。ハヤクシニタイ。もう生きたくない。苦しいのはやだ。もううんざり。痛いのはもういやだ。苦しい。生きたくない。地獄はもういやだ。シニタイ。苦しみたかない。ハヤク・シニタイ。ハヤク。ハヤク。ハヤク、シニタイ。シニタイ。一刻も早く死にたい。苦しみたかない。地獄から脱出したい。シニタイ。もううんざり。シニタイ。生きていたくない。苦しい。地獄から抜け出したい。地獄から脱出したい。

実にバカナやつが世の中多すぎる。自分は全部正しくて相手は全部間違っていると断罪する愚か者が多すぎる。全部正しい人間なんていない。間違った部分てのは誰でも何個かは持っている。それが自分でわからないんだから、バカというより病気。

そんなやつが一人や二人じゃない。実にたくさんいる。だから実に疲れる。

まずは、自分の過ちに気づけ。人をけなしていい気分になってんじゃない。そんなもん何の意味もない。まず己の過ちに気づけバカ者めが。人の過ちを指摘するなんて百年早い。

って言ってもバカはわかんないんだなあ。バカだから。これ読んでも、「お前が間違ってる」って言うんだろうなあ。やれやれ。疲れるわい。

バカが多くて実に疲れる。自分のことが全部正しくて、人の言うことは全部間違ってると思ひ込んでるバカが多すぎて、疲れる。

少しは自分の胸に手を当て考えてみれば、間違いの五個や六個ぼろぼろと出てくる。それなのにそれを見ようとせず、人のことをた

だ「間違ってる」と言って優越感に浸って喜んでるからバカは疲れる。しかもそんなバカが世の中多過ぎて、ほんまにしんどい。

だいたい、人間なんて正しいだけじゃ誰も耳を傾けない。正しいことってのはどこまで行っても何度唱えても、ただ正しいだけで何の意味もない。だいたい、バカが正しいことを誰かに偉そうに垂れた場合、その内容は、バカに言われる前から、その誰かは十分過ぎるほど知ってる。

そのあたりのことはバカには解らない。バカだから。だから疲れる。

バカの言うことは日本語でも全然理解できんし、バカに何言っても、バカが日本人でも話が通じない。

実に疲れることである。

バカばっかで疲れる。実にバカだらけ。こっちがいくら日本語でしゃべっても理解しやがらぬし、バカが日本語でしゃべっても理解できん。

言葉の限界、言葉の無力を感じる。

バカに勉強せえと怒鳴っても、そもそも勉強せんからバカなわけ、怒鳴ること自体、無意味である。

だから疲れる。生産性がない。バカに勉強せえと怒鳴って勉強してくれりゃ怒鳴る意味もあるが、一生しやがらんで怒鳴るだけ無駄である。

とにかく、バカには早く死んでもらいたい、とにかくバカというのはストレスフリーで生命力が強い。バカを殺す前に、こっちがバカに攻撃されて死んでしまう。

バカに勉強させる有効な方法はないものか。こんなにもバカが多いと日本が滅びる。一人や二人だったらいいけど、多すぎるので、今の日本は危険な状態だ。末期がんである。

昨年から今年にかけて制作した長編三本はいずれも反復文体をモ

チーフにしている。

筒井康隆師匠が最新長編（といってもだいぶ前のだが）で反復文体をやっているのを見て真似しとるわけだが、師匠は反復文体以外にもたくさん実験しとる。なにゆえ、オレはその数ある実験の中で反復をチョイスしたのか。

師匠以外にも反復の準拠はある。師匠はジャズを参考にしようだが、オレが好きなロックやヒップホップも、反復表現がある。ギャグマンガで言う漫画太郎先生がコピーギャグが得意だ。チャップリンにもどんなにか忘れたが、確かそういう繰り返しギャグがあった。

ダウンタウンも「なんで二回ゆうねん」てなギャグある。評論でいえば、坂口安吾は重複表現が多い。強調表現だな。

あとは、絵もそうだな。ピカソはある一つのモチーフを発見したら、それを繰り返し繰り返し描いた。

映画でいうと、何かあるかな。ドラえもんは、ある種の繰り返しだけだな。毎年パターンが同じ。

ただまあ短編に関しては、反復を嫌うな。同じのを繰り返したくない、新しい表現を、新しい表現を、という気持ち強い。

自己責任はある。それは認める。オレが35になるまで非正規をやっているのは小説家になりたいからだ。それは自己責任である。

しかし、そうは言っても、例えば、塾の場合は十年も勤務してる。してるのに、社会保障が全くないのはおかしくないか。そこは企業が雇用責任をとらないといけないのではないだろうか。勤務して二年三年ならそんなこと言わない。

オレが35になるまで小説家の夢を追い続けている。これはオレが狂っているといえる。普通、さっさとあきらめて、正社員を目指す。このしつこさはオレの狂気といえる。

しかし、例えば、うちの塾は、正社員は室長のみであとの十数名は非正規講師。スーパ―は、百人くらい従業員がいて、正社員はわず

かに5〜6名。全国的に見ると、労働者5400万人のうち、1700万人が非正規労働者。実に、三分の一。1985年の段階で600万人であることを考えると、いかに日本自体が狂ってきてるかわかる。

ただ嘆いてもどうにもならない。嘆いても、600万人から1700万人になって非正規労働者がゼロになることはない。おそらく増えるだろう。小説だって、とにかく書くのをやめれば、一生所得にならない。

自分が狂っていいようが、世の中が狂っていいようが、前に進まないといけないのである。

大事なのは、世の中が狂ってる、という感覚だ。もし、その感覚がないと、自分がおかしいのかなと思って自殺してしまう。

あるいは、自分が狂ってるという感覚も大事だ。もし、その感覚がないと、すべて社会の責任にして通り魔とかしてしまう。

世の中も自分も狂ってる。その「事実」を受け入れ、前進する。それしか生きる方法はない。時代はそこまで来ている。震災関係のコンマーシャルのように「日本を信じてる」場合じゃない。そんな悠長なこと言ってる場合じゃない。この国に信じる要素なんて全くない。その事実を受け入れ進むのだ。そして、いつかは、信じられる国家にするのだ。偽善はうんざりだ。偽善のせいで餓死する貧困者がいるのだ。死者まで出たら、黙っておれない。

死にたい。

働いても働いても働いても働いても朝から晩まで休みなしで十年も二十年も必死になって働いても非正規労働者は給料がまったく上がらない。どんだけ結果を出しても、ボーナス出ないし、社会保険もないし、何にもない。社員旅行なんて洒落たものもない。交通費も全く出ない。ないないない。ないない尽くし。会社にどんだけ貢献してもどんだけ利益をもたらしても、何も支給されない。「賃金上げる」と当たり前のこと言っただけで「自己責任ですから……無

理です」と突き放される。ズコーっとこけてしまう。こけた瞬間、骨折する。ガッデム！

周りのみんなはオレがちょっと死にたいともらすと「生きる」「生きる」「生きる」とやかましい。がしかし、こんな過酷な状態で「生きたい」なんて思ってたら頭がおかしい。精神病院に入院した方がいい。

けど、ほんとは、生きたい。

死ぬと小説が書けなくなる。生きたい。小説をもっと読んでもっと書きたい。死んだらそれは不可能になる。そんなのいやだ。

けど、非正規労働の現場に行くともた死にたくなってくる。果てることない低賃金重労働。もたげる自殺願望。通り魔願望。

しかし、書齋に戻るとまた生きたくなってくる。果てることない創作意欲。もたげるアイデアの数々。書きたいシーンの数々。

そんな感じでやってる。

死んでしまいたい……無になりたい。終止符を打ちたい。ジェンドにしたい。ファイナルにしたい。完結篇にしたい。シリーズ最終作にしたい。

踏切の前に立つ。飛び込みたい。ごっつい飛び込みたい。

もうウンザリだ。疲れた。ほんまに疲れた。いろんなことに疲れた。30年勤務した会社をリストラされてからアルバイト。年下のやつにあごで使われる。おまけに、離婚するし、息子が交通事故で死ぬし、借金抱えて、毎日やくざがアパートに来る。娘がやくざに捕まって、風俗で働かされている。しかも、その店に、前勤めていた会社の人事部長が客として来ているらしい。くそつたれと思って屋台で飲みまくり、ふらふらしてる帰り道、宇宙人に捕まってUFOに連れていかれて……。

もう死ぬ。もうこの世からおさらばする。こんなくだらないクソみたいな世の中とはもうおさらばだ。まっぴらごめんだ。うんこ社会になんかおってあげるかボケ。カネくれたらおってやってもいい

けどさフン。

「ごおおおおおおおおおおお。」

電車が通り過ぎる。

「生きたい……」

人間というのは悲しい生き物だ。ここまで世間にひどい仕打ちを受けても、生きてやろうと思ってしまふ厄介な厄介な存在だ。

ぶらりと本屋に寄る。

エロ本でも買って帰ろうかなと、ふとふらふらと何かに誘われるように文芸コーナーに回った。

一冊の本を手にとって題名を眺める。

「自殺する前に小説書こうぜ……」

オレは電流が全身に流れ、その本を持ってレジに向かった。

踏切の前に立つ。オレは死にたくて死にたくてたまらない。生きるのが苦痛だ。死んで楽になりたい。

非正規労働は地獄だ。働いても働いてもスズメのポシエットに入るくらいの金額しか支給されない。生きてる意味がわからない。

「ごおおおおおおお。」

電車が通りすぎる。やはり死ねない。死んだら小説が書けなくなる。

オレは踏切を離れ歩き始めた。小説をもっとたくさん書きたい。量だけでなく深く書きたい。

曲がり角の煙草屋で、ロリ華ちゃんに、マイルドマイルドライトを一箱もらう。

「おばあさん、まだ退院できないの」

「おばあちゃん、死んじゃったの……」

「そう」

煙草屋のお米ばあさんとは長いつき合いだ。初めて煙草を吸った二十歳の頃からこの煙草屋で買ってるので、十年以上のつき合いになる。

い。できんことを無理矢理やっても過労自殺するだけだし、できることをやらんと会社が倒産して路頭に迷う。

寝ても覚めても怒ってる。そんな毎日。怒ってばかり。一体その理由は何だ。

腕を組んで悩む。なかなか理由が浮かばない。怒りだけはあるのだが。

怒ってばかりいても仕方ないので、パソコンに向かい、小説を書き始める。

書いていても、だんだんムカついてくる。一体なぜだ。以前はあんなにも愉快に書いてたじゃないか。

パソコンをたたき壊したくなってきた。

これはいかんと思い、バイトに行く。

バイト先の塾でもムカついていた。なぜだ。以前はあんなにも楽しく仕事してたじゃないか。

発作的に生徒をぶん殴ってしまった、室長に帰らされた。

わからない。原付に乗りながら考える。なぜ怒ってるんだ。何が気に入らないのか。

非正規労働者が1700万人もいるから社会に対して怒ってるのだろうか。すばる文学賞が1300人も応募があるので、それに対して怒ってるのだろうか。

しかし、それは今に始まったことじゃない。前から状況は同じだ。なぜ今頃、怒っているのか。

わからない。さっぱりわからない。ただムカつく。

「うわああああああああああ」

「わいーん」

野良犬を跳ね飛ばしても気づかない。安全運転してよオレ。

フラストレーションがたまってる。怒り怒り怒り怒りの連続。苦し

い。

理由がさっぱりわからん。余計に腹が立つ。ぶっ殺したい。ぶっ壊したい。イライラする。何だこの感じは。

「うわあああああああああ」

土手で叫んでみる。まるで解決せず。びっくりした野良犬が川に飛び込んだだけ。

仕方ないので、喫茶店へ行き、じっくり考えることにした。

イライラする。コーヒーカップを床に叩きつけたい。怒りが増幅する。

「うおおおおおおおおお」

叩きつけた。ウェイターがやってきて、どうされましたかと言った。オレはウェイターの顔を殴った。マッチョなマスターが駆けつけ、オレはつまみ出された。

怒り怒り怒り。なんだこの怒りは。得体の知れない怒り。

原付を飛ばしながらも、やはりイライライライラする。

「腹立つ！ 腹立つ！ 腹立つ！」

理由がさっぱりわからないので余計にイライラする。くそつたれ。オレは土手へ行った。

「うおおおおおおおおお」

叫んでもあまり意味がない。余計イライラするだけ。びっくりしたじいさんが川に飛び込んだだけだ。

「ムカつく！ ムカつく！ ムカつく！」

悩んでいても仕方ないと思って、喫茶店に入った。

コーヒーカップを叩きつけたくなってきた。ムシヨウに叩きつけたくなった。

「むおおおおおおお」
叩きつけた。

ガシャーーーーーン。

「どうされましたか」

ウェイトレスが駆けつけた。

オレはウエイトレスの胸をもんだ。

「や、やめてください。いやん。だめ」

おおおお。怒りが収まってきた。いい気持ちになってきた。

「ばか。あほ。おっぱいもまないで、おっぱいもまないで」

「むほおおおお。もほおおおおおお」

マスターが駆けつけ、オレはつまみ出された。

人生に疲れたなあ。異様にしんどい。疲れる。まあ昨日、下痢で何回もトイレに行ってた影響は大きいが、それ以外に疲弊する理由が色々ある。多すぎるから、いちいち挙げないが。

相当やばい。自殺願望がもたげる。屋上に行ったり、踏み切りの前に立ったり。まあ実際には今のことではないが、心理的にはかなり追い詰められている。いつ死んでもおかしくない状況だ。

それでも戦わないといけない。理由なんて何もない。ただそうしないといけない。

本能的にそうだと。理由なんてくだらないものはないのだ、きっと。

戦え。

本音を言えば、前途多難。建前を言えば、「大丈夫ですよ」。

非正規雇用の問題は年々悪化する。例えば、オレなど十年も勤務してるのに社会保障が全くない。嘘ではない。これは現実である。

一体なぜこんなバカげた現象が起こってしまうのか。日本が狂っている。それがその理由である。

では、なぜ日本は狂ってしまったのか。確かに昔はまともな国家だった。正常に国が機能していた。しかし、今は国の色々な機関が麻痺してる。なぜか。

それがよくわからない。怠けてるからだよ、と言う人がいる。これは間違い。怠けてる人もいる、というのが正しい。大半の人間は頑張ってる。

にも関わらず国が国として機能していない。ほとんど末期がん状態だ。

問題はどうすればいいかだ。さっぱりわからない。日々に疲弊し、考える余裕がない。

暇な時間を無理矢理作って、今後の日本の歩むべき道を模索していかねばならない。五年後には非正規労働をゼロにし、全員正社員にし、全員に社会保障がなされるようにする。政治家が動かないなら、自分たちで革命を起こすしかない。

時代はもはや待ったなしである。平和な時代は終わった。戦争に入した。

世の中もわからんが、自分もわからん。

世の中は複雑怪奇であるし、自分もまたそうだ。

まずそもそもなぜ非正規労働者が1700万人もいるのか理解できない。

例えば、オレが今10代だったらわかる。不況の時代に生まれた世代なら、当たり前のように、まあ世の中というのはこういうものだなと達観できる。

あるいは、親の世代でもわかる。親の世代はもともと貧乏なところからスタートしてがんばって経済発展させた世代であるから、今、日本がこういう状況になっても、昔に戻っただけさと達観できる。

しかし、35のオレは……。

ともかく、小さい頃にバブル期を経験している。

簡単にいえば、子供の頃は、金持ちを経験して、大人になってから貧乏しか経験してないという感じだ。

だから常に不全感がある。不安感がつきまとう。もともと貧乏だったら、あるいはずっと金持ちだったら、悩んだりはしないだろう。まあこういうのは世代的なものなのでどうにもならない。60代になろうとしても、10代になろうとしても無理である。

問題は、この立場でどうがんばればいいかということだ。何もしな

いと何も変わらない。しかし、自分の立場でがんばることが大事だ。親の気持ちになっても、若者の気持ちになってもあまり意味がない。なぜかという、そういう気持ちになっても、親の問題や若者の問題は解決できても、自分自身の問題を解決することは不可能だからだ。

奥田民生の名曲「野ばら」とは関係ありません。

踏切の前に立つ。もういつそのこと死んでしまいたい。

ごとおおおとおおお。

電車が通り過ぎる。

「はあ。やはり死ぬのは難しいな」

人間死にたいと思いつつ、なかなか死ねないものだ。

勝夫は、今年で35歳になるというのに、いまだにアルバイトだ。

小説家を目指しているが、なかなか厳しい世界。小説家で食っていく以前に、デビューするのが難しい。

とはいえ、この歳になると社員雇用も難しい。社員でさえ、アルバイトに降格になったり、解雇されることがある世の中。

そんなわけで死ぬことを考えてしまう。

勝夫は歩きながら、ぼんやり、なぜこんなことになってしまったのか考える。自分が怠けていたからこうなってしまったのか。

いやそれは断じてない。一生懸命やってきた。

世の中がおかしいのか。

確かにおかしい。非正規労働者が1700万人もいる。そもそも社会システムがおかしい。全員正社員ではないか。全員に社会保障すればいいではないか。なぜ社会保障される層とされない層に分かれてしまうのか。

正社員の論理としては、「正社員はがんばってるけど、非正規は怠

けるから」ということだが、これには納得がいかない。非正規もがんばってる。

それなのに、所得に差ができてしまう。

勝夫は、廃ビルの屋上に上った。

下を眺める。もう飛び降りたい。

強風が吹く。よろめく勝夫。怖くてなつてきて、やめた。

歩きながら、勝夫はぼんやり考える。なぜ政府は何もしないのか。企業は何もしないのか。労働者の生活をよくするのが企業の使命ではないか、政府の使命ではないか。なのになぜしない。なぜ。なぜ仕事をしない。仕事しないのに給料をもらう。給料泥棒ではないか。しかし、なんて負け人生なんだ。名前と裏腹だ。勝夫なのに負けてばかり負け組人生。

勝夫は、また踏切の前に立った。今度こそ、飛び込もう。

電車を待ちながら、勝夫はつらつら考える。

悔しい。おかしくないか。

なぜ、所得に余裕があるやつが上手いこと生活保護を受けて贅沢をし、死ぬ寸前のやつが生活保護を受けられず餓死するんだ。いったいどんな世の中だ。狂ってる。おかしい。ことごとくおかしい。破壊しないといけない。革命を起こさないといけない。まともな国家にしないといけない。とにかくこのままでは国が滅亡する。やばい。しかし、方法がさっぱりわからない。そもそも自分は自殺をしようとしてるではないか。死んでしまったらどうにもならないではないか。解決のしようがないではないか。

「くそ」

勝夫は踏切から離れた。

ごおおおおおおおお。

「やっぱりオレは小説を書かないといけない。この狂った世の中を乗り切る小説を書かないといけない。あきらめるのもういやだ。オレはやる」

道の端に、野ばらが咲いていた。珍しい。たんぽぽとかに紛れて、

野ばらが咲いていた。

野ばらは、大地にすっかり立ち、トゲを世間に放ってる。どんなことがあっても挫けず、世間と戦ってる。

「やるぞやるぞやるぞ」

勝夫。おまえも野ばらみたいになれ。おまえならなれるよ。

震災は大事件である。ニュースでもたくさん取り上げられている。しかし、地底深くではもう一つの事件が勃発していた。

非正規雇用問題である。

1985年の段階で600000人だった非正規労働者が現在は何と1700000人にまで膨れ上がっている。これは国家を揺るがす一大事件だ。

にも関わらず、マスコミはニュースに取り上げない。なぜだ。1700000人が正社員じゃないという状態は明らかに異常である。有事である。震災も有事であるが、こちらも有事である。

テレビコマーシャルは連日、「日本を信じてる」と繰り返してる。どアホめ。寝ぼけたことをぬかすな。目を覚ませ、ちんかすめ。

日本を疑って分析して、どうすれば信用に値する国家にすることができるか模索して前進していかないといけない大事な時期なのに、信じてる場合か。

マスコミは本当にお気楽ちゃんて涙が出るぜ。ちゃんと仕事しろよベイビー。ぬくぬくとした環境で仕事すんな。

自殺したくて自殺したくてたまらない。これは非正規労働を十年続けた人にしか解らないだろうな。

非正規労働も二年や三年ならまだ我慢できる。

しかし、十年も続けていると、いいかげん爆発しそうになる。

とは言っても、誰が助けてくれるというわけでもないの、地道に

小説を書いていくしかない。

しかし、非正規労働者が1700万人って多すぎないか？ 全労働人口の三分の一が正規じゃないってどういう状態だよ。意味がわからない。

オレが経営者なら全員正社員にして全員に社会保障がなされるようにするけどなあ。そうすれば、皆のやる気がアップして、仕事のレベルが上がる。

もちろん、怠けるやつもいるけど、そういうヤツはほんの一部。たがいの労働者はがんばってる。

だから、あまりの低賃金に、労働者は疲弊してる。疲れきっている。うつ病寸前にまで追い詰められている。

政府は至急、非正規対策委員会を設置して、皆正社員制度を導入すべし。

そうすれば、国が明るくなり活気が出る。

アルバイトだと、フルタイムで働いても、月に13万。

たった13万で明るく生きると言われても無理である。

確かに被災地復興のことは大事であるが、我々は非正規雇用問題のことも忘れてはならない。

国家を揺るがす一大事項なのだ。百年後の日本のことを考えた場合、皆正社員制度は絶対に必要、必須である。

世間は震災震災とやかましいが、こっちはそれどころじゃなかったりする。

いわゆる、非正規雇用問題である。

1985年の段階で600万人だった非正規労働者が、何と現在、1700万人もいる。

国家として終わってる。本来なら全員正社員でなければいけないのに、何だ、この数は。

震災でわめく前にまず非正規雇用問題でわめけよとオレなんかは思ってしまう。こんなに多くの労働者が、優秀な人材が貧困に苦しんでいる。国家を揺るがす大事件である。

にも関わらず、マスコミは報道しようもしないし、政府・企業は何の対策も練らない。どうなったんだ。頭がおかしい。狂ってる。爆発しそうな毎日である。暴れそうな毎日である。

下手なことをしないように慎重に生きないといけない。

政府は、至急、非正規対策チームを結成し、仕事を始めよ。待ったは許されない。正社員だけが利益を享受できるのは間違ってる。労働者全員に利益が回るようにしなくてはいけない。それが正常な国家の在るべき姿だ。

もう11月ともなれば、だいぶ寒い。オレは身体をあつたためるためにジョギングをしている。

二丁目に来たところで、勤務先の塾の生徒に会った。

「やあロリ華」

「珍先生」

ロリ華は相変わらずキレイだ。まだ小学五年生だけど。

「ロリ華。どこ行くの」

「図書館。ちょっと調べたいことがあって」

「そうか。オレもいっしょに行こう」

二人で歩いて図書館へ向かう。

途中で野良犬がからんできた。

「かわいいお嬢ちゃんだね。オレっちと遊ぼうぜ」

野良犬がロリ華の腕を引っ張る。

「いや！」

ロリ華が野良犬の頭の上に空手チョップをくらわせた。

「わiiiiiiiiいん」

アスファルトに転がり回る野良犬。

「だっ大丈夫？」

オレは野良犬を背負った。

「ロリ華。やり過ぎだよ」

「ごめんなさい……」

病院に着いた。

野良犬は入院ということになって、ロリ華とオレは別れた。

ジョギングの続きをしていると、前から、勤務先の塾の生徒が歩いてくる。

「やあ。聡美」

「珍先生」

聡美は相変わらずきれいだ。小学六年生とは思えない。

「どこいくの」

「図書館。ちょっと調べものがあってさ」

二人で歩いて図書館へ向かう。

その途中、四丁目あたりで、野良猫がからんできた。

「お嬢ちゃんおっさん。オレにカネを貸しな。モンブチ買うから」

野良猫が聡美に迫る。

「いや！」

聡美が野良猫のほつぺたを思い切りひっぱたいた。

「うひゃああああああ」

野良犬は後方数メートルぶっ飛び、塀に激突して気絶した。

「ああ。死んだか？」

オレは野良猫を背負った。

「聡美。やりすぎだよ……」

「ごめんなさい」

病院に着いた。

お医者さんが、野良猫は一日入院することになりますと言った。そして、聡美に「きみ、かわいいね。私とつきあわないかい？」と迫った。

聡美は、お医者さんの頭に空手チョップを食らわした。

「うぎゃあああああああ」

お医者さんは床に転がり回った。

「あららら。聡美。やりすぎだよ」

「だって」

想村拓次郎が自宅を出たとき、二丁目あたりで、昔の友人に会った。その友人は、学生時代、あんなにイケ面でスリムだったというのに、かなりぶくぶく太っていて髪もぼさぼさだし、パジャマを着てるし、冴えない。

「オレ、会社やめて、今ニートやってんだ」

「ははあ。それでかあ」

友人は、ゲーセン行こうぜと言うが、拓次郎は急いでいたので断って、また歩き始めた。

しばらくして、三丁目の交差点で、拓次郎は、女性に声をかけられた。

「誰」

「あたしよ、あたし。光子」

「え。光子さん」

光子というのは、拓次郎が小さい頃、よく遊んでくれたお姉さんだ。しかし、当時、光子は、美人でスリムだったというのに、かなりぶくぶく太っていて髪もぼさぼさだし、パジャマ着ていて、冴えない。

「あたし、離婚してから、実家でニートしてんだ」

「ははあ。なるほどねえ」

光子が、ゲーセンに行こうよと誘うが、拓次郎は急ぎの用事があったので、断ってまた歩き始めた。

歩いて、だいぶ経つ。森ビルの近くに来たところで、昔同じ職場で働いていた先輩に会った。

「拓。おまえ変わらねえなあ」

「先輩は変わりましたねえ」

先輩は、昔、ものすごい女子にモテていた。イケ面でスリムだった。しかし、今はかなりぶくぶく太っていて髪もぼさぼさだし、パジャ

マ着ているし、冴えないことこの上ない。

「オレさ、上の連中とやりあっちゃってさ解雇されちゃったの。今、女房に食わせてもらっててさ。いわゆるニートだなあ」

「働いてくださいよ」

先輩が、ゲーセン行こうやなあとしつこいが、拓次郎は断って、あわてて走った。

「なんだあ。つきあい悪いなあ！」

先輩が大声で叫ぶが無視する。遅刻してしまう。

双葉公園の前あたりを歩いていると、前から太って髪がぼさぼさでパジャマを着ている男性がこっちに向かって歩いてくる。

男性は、拓次郎に気づき、手を振る。

拓次郎はあわてて、ルートを変えて、逃げた。

だんだん不毛な愚痴大会になってきたので、ひとまず完結とします。また愚痴りなくなったら、連載設定にして、開始するかもしれんけど。

この連載でオレが言いたかったこと……それは何だ。さっぱりわからん。

反復文体がやりたかったとか、ついったー小説をやりたかったとか、エッセイと小説を行ったり来たりするのをやりたかったとかいろいろ、技術的なことだな。

魂的なことかというと、偽善が勘弁ならんてことかなあ。まあオレの発言も偽善にまみれているので、自分に対しても言ってるけど、震災が起こって、まず真っ先に思ったのは「非正規雇用問題はどこ行った！」てことやねんな。不謹慎ながら。

震災で被害にあった人を支援するのはもちろんだけど、貧困で苦しめられてる人を支援するのも国民の義務であるはず。

それなのに、それはせん。そこに偽善を感じる。

まあ別の人に言わすと、オレのその考えこそ偽善らしいが、まあ色々な考えがあるね。

経営者に感謝してる気持ちと殺したい気持ちと両方ある。

不況の世の中であるに関わらず、うちの会社はよほどひどいことをしない限り解雇しない。これはすごくありがたい。そういう意味で経営者には感謝してる。

しかし、低賃金である。あまりに生活が苦しくて苦しくて狂いそう。そういう意味で経営者を殺したい。

どちらが本当の気持ちかといえば、どちらも本当なのだ。

だから葛藤する。二律背反を抱えている。

厄介な時代である。結局どうあがいても、という感じである。

だけど、我々は進まないといけない。理由なんてない。進むしか道はないのだ。前進前進前進あるのみである。

笑いながら泣きながら。

被災地でちょっといいことがある。テレビでやってた。

ある八百屋のおっさんが、被災地で露天を開き、激安で野菜を売ってるらしい。

まあそのおっさんも被災者なのだが、こういう時ほど助け合わないといかんと思って、きゅうり10本100円大根一本50円みたいな値段で売っている。

おっさんがお客さんにお米をもらい、「ありがとうございます」と泣いていた。ええ話だな。

しかし、雑誌を眺めたら、真逆のことが載っていた。被災地で露天を開き、大根一本1000円トマト一個500円みたいな値段で売ってる悪徳おっさんもいるらしいのだ。

一瞬「こら」と叫びたくなったが、現在、自殺者が年間3万人もいる。自殺する人はこの悪徳おっさんを少し見習った方がいいかもしれない。

れないと少し思った。生きるバイタリテイ、半端ねえ。ごつつどん欲。中国人みたい。

ううむ。いろんなやつがいて面白いな。

生き方は多様だと面白い。

自衛官ややくざや小説家は、坂本龍馬のような生き方をしてる。つまり、「今日死んだとしても、それも天命ぜよ。がはははは」みたいな、死に飛び込むような生き方。カッコいい。

しかし、一般人にまで竜馬的な生き方を押しつけることはできない。例えば、政府が被災者に「今日あんたが死んだとしても、それは天命ですよ。あきらめなさい。うひゃひゃひゃひゃひゃ」なんてぬかしたら、ぶち殺す。

弱いやつはフォローし、強いやつにはしない。ただそんだけ。強いやつはフォローをいやがるかな。自分で何でもやりたがるから。手塚治虫とか。弱いやつはフォローしないと死んじゃう。子供とか。

世の中、ケース・バイ・ケースである。歩調を合わせなきゃいかん時もある、逆らわないといけない時もある。

例えば、倫理的に考え、非正規労働者が通り魔をするのはオッケーだと思う。恵まれてる正社員がぬくぬくとした環境で生活してる正社員が遊びでレジャーで通り魔をやるのはいけない。

しかし、貧困に苦しめられている非正規労働者がストレス発散のために通り魔するのは法的にはNGだが、道徳的にはOKだと思う。貧困を押しつける世間が悪い。

しかし、被害者の苦しみや、遺族の悲しみを考えると、世間の「通り魔はいけない」という考えに歩調を合わせないといけない。

あるいは、福島原発で作業してる人たちがいる。

本来なら作業はしてはいけない。放射能だだ漏れと思われる現場へ行けば、被曝して死ぬ可能性がある。

戦後、日本は生命至上主義をずっと採ってきた。生きるのが一番大事という思想を日本は半世紀以上、重んじている。原発に作業に行くのはこの思想に反している。死ぬ危険性の高い現場に行くのは、世間に対する反逆だ。

しかし、国民の安全と生活を誰かが守らないといけないなら、原発での作業は中断できない。世間で蔓延してる生命至上主義の風潮に逆らっても、作業を継続しないといけない。

このように、人間は歩調を合わせたり逆らったりを繰り返して生きていくわけだな。

この理不尽な暴力にまみれた日本社会。オレは十年間ずっと低賃金という暴力にさらされてきた。いや、今でもある。

一体、日本はいつになれば暴力をやめてくれるのか。わからない。低賃金という名の暴力をやめようとはしてくれない。自殺寸前である。

非正規労働者が1985年の段階で600万人だったのが、今は1700万人もいる。実に1700万人の労働者が低賃金という暴力にさらされている。暴力を受けてない労働者はたったの3600万人だ。

日本は平和だと言うコメンテーターがいる。それは嘘だ。平和というのは暴力を受けていない状態である。正社員だけは平和である、の間違いである。確かに正社員は多額の報酬を得ている。つまり、平和な状態にある。安泰である。うはうはである。（ちなみに非正規から見ても多額の報酬というだけで、正社員にとっては多額ではないかもしれない）

一体、どうすれば、低賃金という地獄から抜け出すことができるのか。低賃金という暴力を受けずに済むのか。さっぱりわからない。だけど、戦え。進め。進めば道は拓ける。進まなければ、道は拓けない。いろいろ想いながら拓いていけ。

詩心も忘れずにな。それを忘れると醜くなる。

最近、自殺をよく考える。原付で走っていても、たまに発作的に車に突っ込みたくなる。

栃木県でクレーン車が児童数人に突っ込んだ事件。原因は居眠り。容疑者は、前科もあり、発作的に居眠りをしてしまうことがあったようだ。種類は違うが、オレも他人事じゃない。いつの日か、原付で児童に突っ込んでしまうかも知れない。

漫画家の藤子先生は、「まんが道」にこんなシーンを挿入した。

F先生がモデルである才野が、公衆電話で、編集長にむちゃくちゃに怒鳴られ、電車の踏切まで走り出す。それを満賀が追いかける。胸が締めつけられるシーンだ。

なぜ、編集長が怒鳴ったのか。

足塚茂道（藤子先生がモデル）は、デビュー間もなく、たくさんの連載を抱え有頂天になっていた。しかし、まるでペースがつかめず、ほとんどの連載を落とし、業界から干されていた。

謝ろうと思い、比較的温厚な、雑誌編集長に電話したら、

「君たちは我々に迷惑をかけたが、読者をも裏切った。毎月楽しみにしてたちびっこ読者が雑誌を開いて載ってなかったらどういう気持ちになると思う！」みたいに怒鳴られ、それで、才野は踏切の前まで走ってしまったのだ。

オレの場合は何でだろう。なぜ自殺したいなんて思うんだろう。

生きるのは何て苦しいんだ！

働いても働いてもスズメのポシエットに入るくらいの金額しかもらえない！

ああ！

非正規労働者の過酷な現実！

低賃金力士と重労働力士に挟まれて、息が詰まりそう！

はあはあうるさい力士！

暑苦しい！

人は正社員の面接を受ければいいじゃんと言う！

そういう問題じゃない！

全国に1700万人いる非正規労働者が全員社員面接を受けて合格しますか！

つう話をしとるんだこっちは！

寝ぼけたことをぬかすな！

現実を見ろ、ちんかす！

時代は狂ってる！

頭がおかしい！

その中を生きてかないといけない！

だから疲れる！

苦しい！

でも進め！

進むしか道はない！

世間に殺されるわけにはいかない！

オレは生きる！

狂った世間など、金属バットでめった打ちにしてぶっ殺してやる！

オレは生きる！

織田信長は冴えない中学二年生だった。成績は後ろから数えた方が早く、運動も全然だめ。それでもイケ面ならまだ救いはあるが、メタボリックで全然モテない。

父は強い子になってほしいと願いを込めて信長と命名した。完全に名前負けしてる。

そんな信長は密かに、同じクラスのロリ華ちゃんに恋をしていた。授業中もうっとり眺めてしまう。

「織田。この問題、解きなさい」

「えっえっどこですか」

「わははははははは」

「お前、戦国武将なんだからしっかりしてくれよ」

「わははははははは」

くそう。ちきしょう。ロリ華ちゃんまで笑ってる。屈辱的。

信長は、バスケット部に所属していた。もちろん、レギュラーになったことはない。

「信長。ボール全部磨いておけ」

「はっはい！」

雑用ばかりやらされる。

信長は頭の中で、先輩を火縄銃で撃ち殺していた。

それにしても、ロリ華ちゃん、かわいい。

またうつとり眺めてる。ロリ華ちゃんは女子バスケット部なのだ。

「うへへへへ、ぐはっ」

信長の顔にバスケットボールが命中した。

そんな冴えない信長だったが、実は特技もあった。信長はギターがめちゃくちゃ上手かった。もちろん、バカにされるので、みんなには内緒だが。

部屋でギターを弾きながら、作曲をする。

「あーあ。ミュージシャンになりたいなあ。でもこんなメタボリックじゃ、いくらいい曲書いても売れないだろうなあ」

信長はため息が出る。

ロリ華の顔を想像しながら、ラブソングを書く。

そんなある時、信長は、道で千円札を拾った。

「うわあラッキー」

信長は真面目ゆえに交番に届けようかどうしようか迷ったが、普段ひどい目にあってるオレへ神様が小遣いをくれたのだと思い、ポケットにしまった。

口笛吹きながら、しばらく歩くと。

何とロリ華ちゃんが不良にからまれてる。

「ぐふふふ。かわいいお嬢ちゃんだぜ。たまらねえ」

「オレたちといいことしようぜ」

「いや！」

信長は頭の中で、不良どもを打ち首にしていた。

しかし、実際はガタガタ震えていた。「あっそうだ」

信長は、千円札を不良に差し出した。

「これあげるから、ロリ華ちゃんを離してあげて」

「信長くん！」

不良どもはけたけた笑う。

「ふん。もらえるもんはもらう。でも女は離さん」

不良が信長を殴った。

「ぐはー！ーっ」

信長は後方数メートルぶっ飛び、塀に頭を思い切り打ちつけ失神した。

「信長くーん」

ロリ華ちゃんは不良に連れて行かれてしまった。

信長は頭の中で、不良を斬りまくり、ロリ華ちゃんを救出し、ほったにキスされていた。

「信長様。すてき」

「うへへへ。ロリ華姫。むひひひ。むにゃむにゃ」

誰かが信長に水を被せる。

信長は我に返った。

「??????」

そこには鎧を着た戦国武士が数人いた。

「信長様。このままでいいのですか！」

「いやしかし。不良怖い」

「天下を取りたくないのですか！」

「別にとりたくない」

「では、ロリ華姫が不良どもにむちゃくちゃにされてもいいのですか！」

「いやだ」

「じゃあ決まり！」

武士たちは信長を立たせ、鎧を着せ始めた。

「信長様、お乗りください」

「で、でかい……」

強そうな馬がアスファルトの上に数頭並んでいる。

武士たちは次々と馬に乗った。信長もあわてて乗ろうとするが、鎧が重くて上手く乗れない。

すると馬が座った。

信長が馬の背中に乗ると、すぐに立ち上がり、すごいスピードで走り始めた。「怖いいいいいい」

「さあみんな。信長様に続け。はいやーっ」

「はいやーっ」

敵のアジトでは、不良どもがロリ華に宿題を教わっていた。

「やはりオレが思った通り、君、頭いいね」

「しゃべってないで、手を動かさない！」

「はあい」

「ロリ華ちゃん。ここわかんない」

「そこはさっき説明したでしょ。つまり、2yをね……」

今から武士たちになぶり殺されることも知らない、真面目な不良たち。

ガッデム！

いくら面白い小説を書いても、オレの今の月収は9万円。35歳。これが現実だ。厳しい。

とはいえ、ピンチの時はチャンスの時とも言える。時間はたくさんある。小説をたくさん書こう。

しかし、変な状態だなあ。一体どんな明日が待ち受けているのか、毎日毎日心臓ばっくばくである。

それでも進まない。前進前進あるのみだ。オレが狂ってるのか。

世の中が狂ってるのか。そんなのどうでもいい。進むだけである。それだけである。

それ以外に道はない。背水の陣なり。

世の中おかしい と言ったところで
どうしようもない

世の中狂ってる と嘆いたところで
どうにもならない

非正規労働者が1985年の段階で600万人だったのが
今じゃ1700万人にまで膨れ上がってる

実に1700万人の優秀な人材が貧困に苦しんでいる

3600万人の正社員が募金して非正規労働者にあげればいいじゃないか

正社員一人につき月に10万円非正規労働者に寄付すれば

非正規労働者の所得がプラス20万円になる

もし月収が13万円の非正規労働者なら33万円になる

これはいいぞ 結婚できるじゃないか やったぜ

これをやれば日本はよくなる いい国になる

なのに政府も正社員も企業もやらない なぜだ いい国にしたくないのか

意味不明 理不尽 狂った世の中 狂った日本

世の中おかしいと言ったところで

どうしようもない

世の中狂っていると 嘆いたところで

どうにもならない

ただひたすら進め 進むしかない 進むしかない

正社員に期待せず 進め 己の力で進め 人に頼るな

世の中おかしいと 言ったところで
どうしようもない
世の中狂ってる と 嘆いたところで
どうにもならない

ただひたすら前進 進むしかない 進むしか道がない
世間に期待せず 進め 自分で進め 人を気にするな

不安で不安で不安で死んでしまいたい！
生きるのが怖い！ がたがた震える！

あまりに震えるので、窓も揺れている！
子供の頃は、生きたくて生きたくて生きたくてたまらなかった！
なのに、今は死にたくて死にたくて死にたくてたまらない！
噂によると、自殺者が年間三万人いるという！

人ごとじゃない！

リアルに自分の問題だ！

オレが死にたい理由は割とはっきりしてる！

正社員かプロ作家になりたいのに、それが絶望的に難しい状況が
今あるからだ！

とにかく、非正規労働は仕事として不安定過ぎる！

今はできても、十年二十年続ける自信がない！

安定した収入が必要だ！

今は何とか根性でできても、長くは続かない！

あまりに低賃金であまりに重労働過ぎる！

にも関わらず、半強制的に非正規労働を続けないといけない状況
が現実にある！

子供の頃はまさか35歳でアルバイトをやっているとは思ってなか
った！

今正社員かプロ作家をやっているならば、不安になったり死にたくなることもない！

ただ……正社員で自殺する人もいるんだよな！

芥川や川端も自殺してるし！

ゆえに単に非正規だから自殺するというのは何だかなあという気もする！

だいたい、非正規は全国に1700万人いる！

1700万人が全員自殺するわけがない！

だから他にも自殺したい理由があるんだよな！

非正規だからというのは理由の一つに過ぎない！

何だろそれって！

非正規労働者から不当に利益を奪う正社員ども……許せねえ。悪は許せぬ。悪魔は早く倒さないといけない。

オレは、非正規労働者を集め、会議をした。場所はマイタケ橋の下。

「えーではみなさん。まずは乾杯と行きましょう。かんぱーい」

「かんぱーい」

まずは、みんなでサイダーを飲んだり、ポテチを食ったりする。

その後は缶けり。

「えーい」

「わー逃げろー」

いよいよ会議だ。オレはホワイトボードを用意する。

「さてみなさん。正社員をブツ殺すアイデアを色々出してください。ボードに書いてくんで」

「疲れたー」

「ねむたーい」

「オレ、カラオケしたいぞ」

「やろうやろう！」

「あっちょっと勝手なことは」

非正規労働者はどこへ行くのか。非正規労働者は何をすればいいのか。

あまりにあまりに過酷だ。厳しい。苦しい世の中だ。陰惨きわまりない。残酷な現代日本社会。

嘆いていても始まらないが、嘆いていると少しラクだ。

優しすぎるのはよくない。自殺してしまう。相手を思いやり譲歩し譲歩し譲歩しまくってるうちに、自分の居場所がなくなり首を吊ってしまう。

優しすぎるのはよくない。

厳しすぎるのはよくない。人を殺してしまう。相手を攻撃し攻撃し攻撃しまくってるうちに、相手を死に至らしめる。

厳しすぎるのはよくない。

バランス。

時には厳しく時には優しく。

なかなか難しい。国内に、年間三万人も自殺者がいる。戦争で死んでく人が世界にはたくさんいる。

進まないことも大事かもしれない。一步引いて状況を眺める。そういう姿勢も大事かも。

前進だけが正義でなく、後退にもチャンスあげたい。生きるために。

進むばかりが正義じゃない。

時に後ろに後ろに行くことも大事。

まあ後ろに行ってばかりもいかんが。

前に進んだり後ろに進んだり、後ろに進んだり前に進んだり。

セ〇〇スのようです人生は。

試行錯誤。実験。

そうしてる間が幸せかな。完成してもあまりうれしくないし、何もしないのも愉快でない。

「ああでもない」「こうでもない」

と悩んでる時が一番燃える。

その運動が心地いい。

最近貧困の問題をよく取り上げるが……。

貧困者を十割助けよ、てのはやはり違う。それは「おまえは生きるな」と言ってるようなものだ。「何もすんな。肉体的には助けるが、精神的に死ね」と言ってるようなもんだ。

貧困者を全く助けるな、てのも違う。そんな愚かな国には住みたくない。それもまた「死ね」と言ってるようなもんだ。

助けたり突き放したり。突き放したり助けたり。

漫才みたいなものだ。笑いが起こる。突き放してばかりでも、助けばかりでも大爆笑は来ない。

ひさびさに松ちゃんのヴィジュアルアルバム観ようかな。

苦しい。苦しい世の中である。がんばれば過労死。仕事が減れば餓死。どっちにしても幸せになれない。

怒りが増幅する。通り魔でもしたい。

いったいなぜ日本はこんなことになってしまったのか。意味がわからない。

1985年の段階で非正規労働者は600万人だった。なのに、今、1700万人もいる。

少子化にならない方がおかしい。なって当たり前である。こんなに所得が少ないのに結婚なんかできるか。自分を養うのさえギリギリなのに。

頭がショートする。もうだめだ。苦しすぎる。自殺でもしようか。絶望的だ。

それでも前に進まないといけない。理由なんてない。本能だ。

一体どうすればいいのか。意味がわからない。

ほかっくと、死にたい気持ちが増幅する。死にたくて死にたくて

たまらない。上手く生きなくてはいけない。生きるのが下手だな。とにかく、非正規労働者が全国に1700万人いる。1985年の段階で600万人だったことを考えると、驚異的だ。日本は変わった。悪い方へ残酷な方へ変わった。地獄だ。

明らかに生きるのが苦しい。働いても働いても暮らしがよくならない。身を削られる。頭が狂いそう。

なぜ非正規労働者が1700万人もいるのか。単に不況だからという説明では納得がいかない。1985年の段階では600万人だった。

なぜ、全員正社員という制度ができないのか。なぜ、非正規労働者が1700万人もいるのに、先進国と呼ばれているのか。どう考えても日本は発展途上国だ。先進国じゃない。先進国になりたいなら皆正社員制度を導入しなければいけない。1985年の段階で非正規労働者は600万人だった。

わからない。意味不明である。なぜ貧困に苦しまなければいけないのか。一体オレが何をしたというのだ。悪いことは何もしてない。むしろ世のため人のためにがんばってる。必死にがんばってる。なのに貧困を強要される。意味がわからない。

死にたい。世の中に絶望している。

意味がわからない。何もわからない。心が崩れていく。寒い。現在労働者の三分の一が非正規労働者。実に1700万人。1985年の段階では600万人。それを考えると驚異的な数字である。頭がおかしくなりそう。

日本がバラバラ。みんな好き勝手に生きてる。

もっと協力し合わない。自分がよけりゃそれでいいのか。困ってる人がいるのに見殺しにしているのか。

てのはまあ建前ですなあ。みんな所得が少ない。まず自分の生活を成立させないと前に進めないってのが現状。

といっても、だから人のことなんかどうでもいいと言っていたら

人間が腐ってくる。

自分のこと人のこと。バランス。

作家の書きたいもの。読者の読みたいもの。バランス。

葛藤しながら書く。

世間が俺を殺そうとする。一体何の目的で。

いやだ死にたくない。殺されたくない。

世間はいつからこんなに凶暴になったんだ。昔はもっと優しくて親切だったのに。

昔はもっと人間性にあふれていたのに、今は動物化してる。

人を殺して利益を奪うことしか考えてない。それしか頭がない。

くそつたれ。負けてたまるか。世間に殺されてたまるか。俺は生きる。

世間なんか逆に倒してやる。死んでたまるか。殺されてたまるか。

俺は生きる。世間になんかに負けてたまるか。殺されてたまるか。逆。逆に倒してやる。ぶっ殺してやる。

1985年の段階で6000000人だった非正規労働者が現在は17000000人もいる。

今後、この数が増えることはあっても減ることはない。あったとしたら、非正規から無職に転落するパターンだけだ。非正規から正社員に昇格することは、よほどのミラクルが起こらない限り、ありえない。

こうした残酷な世の中で、どのように生きていけばいいのか。どうすれば、人間の心を失わずに生きていくことができるのか。

殺さなければ殺される。そんな世の中は間違ってる。いや、動物の世界では正しい。しかし人間社会ではありえない。弱い者を困てる者を助ける。それが人間だ。

我々は今は動物だが、いつかは人間になろう。あきらめずに、信じ

て、いつかは人間になろう。

それは百年後かもしれない二百年後かもしれない。気が遠くなるが、あきらめず地道に努力していき、動物を脱却し、いつかは人間になろう。

みんな、いつまでも動物でいたいなんて思ってたやいけな。

日本国民よ。人間になる努力をしよう。

正社員は仕事がしんどい。半端ねえ。

だけど、給料がめちゃくちゃいい。

ニートは収入ゼロ。お金がまったく入らない。

だけど、仕事せんでいいからめちゃくちゃ楽。

一方、全国1700万の非正規労働者は、過酷なまでに安い賃金で、過酷なまでに度の過ぎた労働を強制されている。

こんなバカな話があるか。こんなめちゃくちゃが許されるのか。

一度、一旦停止違反で警察に捕まった時、調書をとられた。

その時、警官に何をしてるのと聞かれ、アルバイトですと答えたら、「無職」と書かれた。ちなみに当時、オレは休日なしで一日13時間労働に従事していた。

一日13時間働いて無職だって！

うははははは。笑ってしまうよ。どうなってんだ。狂ってる。

しかも、世間にはまだ根強く、フリーターはお気楽だというイメージが残ってるようだ。警官にも「フラフラしてないで早く地に足つけた生活しなよ」とやかましい戯れ言を言われた。

ばか野郎！

オレは何回も何回も会社（塾）に辞めさせてくれと頼んだ。早く正社員になりたいのだ。

それなのに何回も何回も止められた。当たり前だ。オレはベテラン講師。うちの塾は学生講師が多いのでオレに辞められると大打撃。しかし、うちの塾は低価格が売りのため、室長以外は全員非正規講師。だからオレは生活があまりに苦しくて辞めたくて辞めたくてた

まらない。しかし、これも世のため人のため国家のためお客様のためと思い、必死に踏み留まってる。

それでもフラフラしてるというのか！

世の中の意味不明さに頭を抱える。自殺したい。もうこんなくらない世の中で生きていたくない。

しかし、お客様を笑顔にさすために、国家を前進させるために、自殺することはできぬ。それに小説が百万部売れば一億五千万円印税が入るので（半分は税金だろうけど）割りと樂觀的な部分もある。しかし、1985年の段階で600万だった非正規労働者が現在では1700万だ。異常事態だ。非常事態だ。国家を揺るがす大事件だ。いくらオレが金持ちになったとしても、世の中にこんなにも貧困に苦しむ労働者がいては、オレの心は癒えない。不安で不安でならない。

非正規労働者に力を。非正規労働者に力をくれ。頼む。落ち込ませないでくれ。ドント・レット・ミー・ダウン。

非正規労働者に光を。非正規労働者にパワーを。エネルギーを。非正規労働者に生きるチャンスを。

オレたちが言いたいのはそれだけだ。日本が平和だろうが美しい国になろうがそんなの知ったこっちゃない。

非正規労働者がバカな思いをする国はいずれ滅びる。早くまともな国家になってくれ。勉強してくれ。動いてくれ。

これ以上、悲しい人間を量産しないでくれ。希望をくれ。未来をくれ。

朝から晩まで働かされ、スズメのポシエットに入るくらいの金額しかもらえない非正規労働者。

そんな非正規労働者が今日本に1700万人いる。日本は狂ってる。さながら列島が精神病棟だ。

この狂った世の中をどう生きていけばいいのか。まともにやってた

ら殺される。

しかし、まともにやらないといけない。犯罪はいけない。地道にやらないといけない。

しかし、それだと自殺するしなくなる。地道にやって生きていけるのは好景気の時代だけだ。不況の時代まともにやってたら自殺するしかない。自殺はいやだ。だから、みんな犯罪に走る。

しかし、オレは犯罪もいやだ。みんなの真似して犯罪するというわけにはいかない。倫理がある。となると、やはり、自殺するしかないのか。

どうすりゃいいんだ。自殺しないで済む方法はないのか。

一つだけだけ方法がある。正社員が、一人、月に十万円だけ、非正規労働者に寄付すればいい。そうすれば、非正規労働者の所得がプラス二十万円になる。そうすれば、非正規労働者もまともに暮らすことができる。そうすれば日本もよくなる。

しかし、一向に実現しない。どうなってんだ。狂ってる。みんな頭がおかしい。日本をよくしたくないのか。

意味がわからない。日本が悪いままで満足なのか。

すると、やはり自殺するしか道がない。自殺者は今年間三万人いるという。これをゼロにしたい。どうすればいいのか。悩む。

正社員「わしの月収26万だぞ。殺す気か、き0ち0が0いめ！！
！ 死んでくれ！！」

ざあああああああ。

窓の外をぼんやり眺める。てるてる坊主がごめんなさいという表情をしてる。別に坊主のせいじゃないのにな。国民にいじわるする神様が悪いだけなのに。

ざあああああああ。

すごい雨だ。オレは執筆にいそしむ。こういう時、作家は便利だな

と思うが、夜からバイトに行かないといけない。オレは原付しか持っていないから厄介だ。

ざああああああああ。

華子からケータイに電話がかかる。

「どうした華子」

「会いたいな」

「だめ。雨降ってるし、今からバイトがあるし、小説のメ切も近い」
ざああああああああ。

てるてる坊主が、みっくん彼女に優しくしなよと言う。オレはむかついて、坊主のおでこに「肉」と書いてやった。

ざああああああああ。

しかし、憂鬱になるな。この雨。天が涙を流してるのかな。くそくだらない世の中だから。

ざああああああああ。

寒くなってきた、オレは鼻をかむ。

キーボードを叩く。こんな雨なのに、小説のキャラクターたちはピクニックに来ていたりする。忌々しいことだ。

ざああああああああ。

早く止まないかなあ。カップ着るのめんどくさいな。

オレはコーヒーを入れて飲んだ。

「ふう。雨のバカは予約なしで来やがるからイラつくな。でも雨のおかげで農作物が育つから文句ばかりも言えないしな」

誰に向かってしゃべってるのかな。読者かな。

ざああああああああ。

ざああああああああ。

何のためにがんばってるのか、もはや意味不明。

正社員ががんばってるのは理解できる。正社員は多額の報酬を受け取ってるので、がんばるに決まってる。がんばってないやつがいたとしたら、病気だ。精神病院に入った方がいい。

しかし、非正規労働者は……これ以上賃上げされることがない。スズメのポシエットに入る金額しかもらえない状況は変化しない。十年経っても二十年経っても低賃金。がんばるだけの燃料を会社からもらうことができない。ほとんど自腹だ。

なのに、がんばってる。意味がわからない。国家のため人々のためとしか言いようがない。

ぬくぬくとした、あたたかい環境で生きている正社員がうらやましい。非正規労働はこの世の地獄である。無限地獄である。救いがない。毎日悲鳴を上げている。

正社員「オレたちは厳しい環境の中で日々戦ってる！」

非正規労働者「うそこけ！」

正社員「うそじゃない！」

非正規労働者「……じゃあそういうことにしときゃいいよ。もう疲れた」

正社員「……！！！！！！」

非正規労働はこの世の地獄だ。正社員の二倍働いて、正社員の半分以上が賃金がもらえない。ひどい世の中である。陰惨極まりない世の中である。平和な時代が懐かしい。

だけど、挫けるな。負けるな。戦え。進め。光はきつとある。闇か

ら脱出しろ。

いくら正社員に攻撃されても、お客様にいじめられても負けるな。悪はいつかは滅ぶ。神を信じて戦え。進め。挫けるな。負けるな。

野に咲く花となれ。

光を掴め。進め。正社員に負けるな。お客様に負けるな。生きろ。死ぬな。戦え。がんばれ。挫けるな。光はきつとある。きつといつかは闇から脱出することができる。

非正規労働者よ、野に咲く花となれ。

いくら正社員に不当に利益を奪われても、お客様に色々ひどいことをされても挫けるな。負けるな。戦え。進め。がんばれ。光はきつとある。絶対にいつかは光をつかむことができる。いつの日か、闇を脱出する日はきつとくる。

その日を信じて戦え。非正規労働者よ、野に咲く花となれ。

明日に向かって戦え。前進しろ。

とにかく生きろ。死ぬな。

うわああああああああ。

と叫びたい気分である。非正規労働者はむちゃくちゃ働かされて、スズメのポシエットに入るくらいの額しかもらえない。

しかも非正規労働者は全国に1700万人もいる。1985年の段階で600万人だったことを考えると驚異的な数字である。

一体日本はどこへ向かおうとしているのか。こんなにも多くの労働者を貧困に追い込み、しかも、相変わらず正社員とその家族はいい暮らしをして、それを恥とも思っていない。

一体日本はどうなってしまったんだ。いつからこんなくだらないクソみたいな国になっちまったんだ。思いやりとか礼節はどこに行っちゃったんだ。

毎日生きるのが不安で不安でしょうがない。踏切の前に立つのが日課になってしまった。死んだらどんなに楽だろう。死んだら今より幸せになれるかな。そんなヤバいことばかり考えてしまう。

その考えが間違ってるのは解ってる。

でも同時に世の中も間違ってる。がんばってる人がひどい目にあう世の中は間違ってる。悪いことしてるやつらがいい目にあう世の中は間違ってる。

しかし、世間のやつらはそれに気づいてない。どんなひどい手を使ってもいい暮らしができればオツケー。どんなにがんばっても所得が少なければクズ。そんなむちゃくちゃな思想が平気でまかり通っている。

早くまともな国家にしたい。狂った国にはしたくない。早くこの国の病いを治療したい。早くこの国の病気を治したい。

一刻も早く。

非正規労働者はどこへゆく。地獄に行くのか天国に行くのか。どちらに行くんだ。さっぱりわからない。

先のことはよくわからない。ただ、小説は書き続けないといけない。

最近、小説が上手く書けない。書いては丸め、書いては丸めを繰り返してる。長いトンネルに入ってしまった。民生の歌じゃないけど、辺りは暗黒の闇♪ でR。

それと、最近、巷で盗作が問題になっている。模範生は、「オリジナルを追求してこそクリエイターだろ。盗作するやつは死ね」

と言うけど、人間ちゅうのは誰の影響も受けずに生きるてのは不可能だ。ゆえに、盗作問題は、加害者として誰の身にもふりかかる可能性がある。

とはいえ、模範生の言うがごとく、オリジナルを追求するのがク

リエイターの使命というのは確かに事実だ。

というより、みなさん。人のネタより自分のネタを書きたくありませんか？

なくんて言いつつ、すばらしい作品を読むと真似したくてしたくてたまらなくなってくるのも事実。

たまに連れと話すのだが、その作品のネタを盗むのはいけないけど、システムは盗みたいね。

例えば、オレはここ二三年、ガキ使の笑ってはいけないシリーズを死ぬほど観てるが、あれのシステムを盗みたいよ。ネタは盗みたくないけどさ。

この連載で死にたい死にたいと嘆いていたが、「ドラえもん のび太の鉄人兵団」を再読したら、その理由の一端が少しわかった。自己犠牲の意義というか。

リルルが、のび太たち地球人を救うために自ら死を選ぶわけだな（リルルはロボットだから死ってのは変だけど、ごっつ人間ぽく描いてるので、ちびっこ読者は自決と受けとるだろう）

特攻隊にも通ずる。年間三万人の自殺者にも通ずる。あるいは三島やゴッホ。

オレは自殺肯定論者じゃないけど、自殺する人を「バカか」と達観できるほど強くない（無論、バカとみなして生きようとする人には肯定的だけど）

愛する人のために死を選ぶてのは、まったくわからんじゃない。

それより、アレだな。そういうことより、気になったのは、ドラは児童漫画の王道だなんてことだ。

ロボットのリルルを死なせたけど、のび太たち人間を殺してないし、鉄人兵団が攻めてきたときも、鏡面世界に攻めさせて、建物は破壊しまくったけど、人間を一人も殺してない。ちびっこに対する配慮。

その上で、自己犠牲の貴さ、戦争の愚かさを描いてる。さすが。リルルの裸というサービスも児童ポルノ禁止法に抵触しない程度にやってるし。

そのあたり、藤子先生、さすがだなと思う。

震災は確かに大事件に違いない。しかし、非正規雇用問題も大事件である。

何しろ、朝から晩まで必死に働いてるのに非正規労働者はスズメのポシェットに入るくらいの少ない金額しか受け取ることができない。意味のわからない時代だが、これが21世紀というものだ。20世紀、人々は希望に満ちた未来を描いていたが、ふたを開ければ、地獄の苦しみに満ちた世紀になっていたというわけだ。

なぜだ。と考える。普通、怠けてるやつが少額の報酬を受け、がんばってる人が多額の報酬を受け取らないといけない。そうしないと世の中がむちゃくちゃになる。

それなのに、がんばりにがんばり抜いている非世紀労働者が少額の金額しか受け取ることができない。だから、世の中、犯罪が増えてむちゃくちゃだ。秋葉原の通り魔事件も根底には貧困があった。

なぜこんなむちゃくちゃな世の中が存続されているのか。

それは、正社員の野望のためである。正社員は自分たちだけいい暮らしをして、非世紀労働者に貧困を押しつけたいと企んでいる。そして、正社員は頭のいいやつが多く、非正規はまじめなやつが多いので、つい、こういう理不尽な社会が成立してしまうのだ。正社員がバカで、非正規が不真面目なら、とつくに革命が起きて、世の中がいい方向に動いてる。

いったいどうすればいいのか意味不明である。被災地支援のことより、まず日本をまともな国家にしないといけない。いくら被災地が復興されても、非正規雇用問題がきちっと解決してないと、また同じことの繰り返しだ。貧困層にだけ苦しみを押しつける愚かな時代が延々と続く。意味がない。

思わず嘆いてしまうが、しかし、とにかく我々は前進しないといけない。日本の未来のために。前進前進前進あるのみである。

そうすれば、五年後には、全員正社員にすることができる。大丈夫だ。がんばれば、非正規雇用制度を全廃し、全員正社員にし、全員に社会保障ができる社会がきつと作れる。

大丈夫だ。一部の人間が豊かな時代は五年後には終わる。

いいかげん頭にクル。

非正規雇用問題である。

本来なら非正規雇用なんてやってはいけない。全員正社員にしないといけない。

それなのに、全労働人口の三分の一、1700万人が非正規労働者である。

かくいうオレも十年間非正規労働をしてる。いいかげん、ぶちギレそうだ。

それか、死にたい。生きていても何の希望も持てない。非正規労働者など安い賃金でこき使われるだけ使われて、いらなくなればポイ捨て。絶望にまみれている。電車に飛び込みたい。屋上から飛び降りたい。

だけど負けるな。進め。戦え。理不尽な社会に負けるな。

前進前進前進あるのみだ。世間が我々非正規労働者に戦争を仕掛けてくるなら戦うのみだ。それ以外ない。

生きるために。

「死にたい死にたい死にたい」

勝沼死郎はわめきながら、街を走っている。

まあなぜ死にたいのかはようわからぬが、それなりに理由があるのだろう。「死にたい死にたい死にたい」

死郎は死ぬ前に焼き肉を腹いっぱい食べたくなった。無論、カネは

払わぬつもりだ。どうせ死ぬんだから。

「いらっしやいませー。お一人様ですか」

「死にたい死にたい死にたい」

「え。お客様？」

「死にたい死にたい死にたい死にたい」

会話がまるで成立しない。

店員は、死ぬほど食いたいのかなと勝手に解釈し、ひとまず、席に案内した。

「ご注文はよろしいでしょうか」

「死にたい死にたい死にたい」

店員はやっと異変に気づき、店長をあわてて呼ぶ。

「死にたい死にたい死にたい死にたい」

「お客様、おふだけは困りますよ」

「死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい」

死郎はいきなり、隣の座敷の鉄板の上にダイブした。

「死にたい死にたい死にたい」

「きゃあああああ」

死郎は熱さのあまり転がり回り、客は悲鳴を上げている。

死郎は立ち上がり、次々と鉄板に飛び込む。

「死にたい死にたい死にたい」

「いやあああああ」

「狂ってる」

「こいつはまずい。おい。警察を呼べ」

「はい！」

「死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい」

死郎はふらふらになりながら、店を出た。

「死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい」

左腿の裏に激痛が走る。完全にストレスだ。非正規労働はいくらがむしゃらに働いても、いい暮らしができない。がんばってもがん

ばっても貧困。そのストレスから身体のアチコちに異変が起き始めている。

一体非正規労働者に未来はあるのか。非正規労働者が幸せになれる日は来るのか。

さっぱり解らない。絶望の毎日である。毎日毎日、踏切の前に立つ。死ねたらどんなに楽だろう。苦しまずに済む。生きるのは地獄だ。悩みのない学生がうらやましい。毎日毎日遊んでばかりいる。たまに殺してやろうかなと思う。このバカタレどもを養うために、自分を犠牲にして税金払ってるのかと考えると、イライライライラする。

しかし、我々は前進しなきゃいけない。日本の未来のために、挫けてはいけない。前進前進あるのみだ。

学生も社会に出て十年くらい経てば多少使えるようになるだろう。鍛えないといけない。甘えた根性を叩き直さないといけない。

非正規労働者に明日はあるのか。毎日が地獄である。闇である。どしゃ降りの雨である。

しかし、きっと晴れる日は来る。何年後かは解らない。だけどいつかは光をつかむことができる。

その日を信じて、一歩ずつ着実に進んで行こう。
前へ前へ前へ。甘えたことぬかす学生はぶっ殺す。

非正規労働者……彼らは低賃金重労働に苦しんでいる……。朝から晩まで大量の仕事をこなしながら、スズメのポシエットに入るくらいに金額しか受けとることができない。

しかも、非正規労働者は現在1700万人もいる。1985年の段階で600万人であったことを考えると、いよいよ日本はやばい状態に突入した。この状況を放置しておく、国家が崩壊する。

しかし、いいアイデアがある。

正社員が非正規労働者に経済的支援をすればいい。

正社員は非正規労働者の仕事を手伝うことができない。自身も

のすごい量の仕事を抱えてるからだ。

しかし、彼ら正社員は、多額の報酬を会社から受け取ってる。その何割かを非正規労働者に寄付すればいい。どうだ。いいアイデアだろう。最高だ。特に正社員は非正規労働者に対し罪悪感がある。非正規労働者から不当に利益を奪ってオレたちだけいい暮らししてもいいのかな、と正社員は日々悩んで苦しんでる。しかし、このアイデアをとれば、もう苦しまずに済む。

さらにいいアイデアが浮かんだ。

学生が非正規労働者の仕事をボランティアで手伝えばいい。

学生は、正社員と異なり、収入がゼロなので、非正規労働者に経済的な支援ができない。

しかし、仕事をしてないからパワーがありあまつてる。

そのふんだんにあるエネルギーを使い、非正規労働者の仕事を無償で手伝えばいい。

特に学生は非正規労働者にばかり苦しい思いを押しつけ自分たちだけ遊んでることに罪悪感があり、悩み苦しんでる。

しかし、このアイデアを採用すれば苦しみから解放される。

早速、明日、正社員と学生にこのアイデアを話してみよう。きっと喜んでやってくれるはずだ。

付記

結果、正社員に「賃下げになって生活が苦しくてそんなカネない!」、学生に「勉強や部活が大変でそんな暇ない!」と怒鳴られた。理不尽な世の中だぜ……。

非正規労働は地獄だ……覚めない悪夢である。晴れてるのにまるで真っ暗闇にいるような気分……それが非正規労働だ。

正社員は最高だ。確かに仕事は大変だが、多額の報酬を受け取りい

い暮らしを満喫できる。実に最高だ。

学生も最高だ。収入はゼロだが仕事をしなくていい。むちゃくちゃ楽だ。過労死の心配などまるでないでいい。

しかし非正規労働者は……朝から晩までこき使われ、スズメのポシエットに入るくらいの金額しかもらえない……日々餓死と過労死に怯えている……。

正社員になりたい！

学生に戻りたい！

この世の地獄である。どこまで行っても闇闇闇。果てしない絶望絶望絶望。

平和国家に住んでるはずなのに毎日戦争をしている。葛藤に憂い癒えない。

しかし、我々は進まねばならぬ。前進前進前進あるのみだ。日本の明るい未来のために戦え。オレの命などどうでもいい。日本のためならくれてやる。

いつかは光をつかめる。その日が来るのを信じて戦おう。いつまでも闇にいるわけじゃない。いつかはいつかはきつと光をつかむ。

その日が来るのを信じて進もう、諸君。戦おう。がんばろう。がんばれば、五年後にはきつと悪の自民党と民主党と官僚が滅び、全員正社員になることができる。全員に社会保障がされる日がきつと来る。

一部の人間だけがいい暮らしをし、一部の人間にだけ貧困を押しつける、そんな狂った国家は、もう五年後にはなくなる。

進もう。地道に着実に進もう。悪はいつかは滅ぶ。真面目な人が適正報酬を受け取り、不真面目な政治家が時給200円になる日がきつと来る。

みんな、がんばろう！

正義は必ずある！！

疲れたな。何もかもどうでもいい。めんどくさくなってきた。しん

どい。

全部投げ捨てたら楽だなあ。

ああ。何もかもいやだ。捨てたい。

楽になりたい。疲れた。

死にたい。死んだら楽になる。色々悩んだり苦しんだりしないでいい。

早く死にたいなあ。生きるのはしんどい。疲れるだけで何もメリットがない。

早く死にたいなあ。

しかしなかなか死なない。意味がわからない。こんなに苦しいなら生きてても意味がないのにまだ生きてる。

早く死にたい。

死にたい死にたい死にたい死にたい。

苦しいのはもういやだ。痛いのはもういやだ。

死にたい！

死にたい！

死にたい！

死にたい！

死にたい！

非正規労働者に力をくれ。

そりゃまあ正社員も力がほしいと思うよ。仕事量すごいからね。むちゃくちゃな量の仕事を抱えているからね。

でも多額の報酬を受け取ってるから、非正規の二倍三倍の給料を得ているから、それを忘れちゃいけない。贅沢言っちゃいけない。

学生も力がほしいと思う。収入ゼロだからね。お金が全然ないからね。

でも、働いてないのを、気楽な身分であることを忘れちゃいけない。

い。贅沢言っちゃだめ。

一方、非正規労働者は、むちゃくちゃな量の仕事を抱えながら、スズメのポシエットに入るくらいの金額しかもらえない。

だから力を。非正規労働者に力を。パワートゥTHE非正規。

このままだと首を吊ってしまおう。

他に何もいらない。力をくれ。

本音を言えば、楽したい。適正報酬がほしい。

しかし、今は不況だから、怠けると倒産するし、会社の業績が悪いから、人件費を削ってくしかない。

だから、低賃金重労働は受け入れる。その代わり、力を、パワーをくれ。ないと自殺してしまう。

苦しみは受け入れるが、自殺するのはいやなんだ。

だから力を。パワートゥTHE非正規。

非正規労働者に力をくれ。今すぐに！

非正規労働者は現在国内だけで1700万人もいる。1985年の段階で600万人であったことを考えると驚異的な時代だ。1700万人も低賃金重労働に苦しんでいる。

一体なぜ日本はこんな国になっちゃったんだ。一体なぜ。なにゆえ。WHY。

しかし、我々は負けてはいけない。進まなきゃいけない。前進しなきゃいけない。

どんなに辛くてもどんなに苦しくても。

いつかは光をつかめると信じて頑張ろう。

大丈夫。五年後には全員正社員になれる。全員に社会保障がなされる。こんなむちゃくちゃな世の中は長くは続かない。絶対に絶対にまともな世の中が来る。がんばる労働者が報われるまともな社会がきっと来る。

その日を目指して前進しよう。正社員だけが幸せな世の中なんて間違ってる。非正規労働者にだって、いい暮らしをする権利はあるん

だ。

進め戦え挫けるな。

世の中をよくしよう。腐った世の中は破壊しよう。

労働者が幸せになれる、まともな世の中にするのだ！

絶対に！！

光をつかめ！

闇から脱出しろ！

正當に評価してほしい。

世間は非正規は楽だと言う。それは好景気の時代までの話だ。今は不況。非正規も普通に社員の業務を請け負ってる。

世間はお金をもらってんだからしつかりやれと言う。

冗談じゃない。こんなのもらってる内に入らない。あまりにも少なすぎる。ボランティアに近い。感謝もしないで、しつかりやれとは何様だ。

まやかしの評価はもうウンザリだ！

それか、ほんまに仕事を楽にして、お金をきちんとくれ。頼む。それなら世間の今言ったような評価も受け入れるぜよ。

学生と正規社員はいいなあ。羨ましい。学生は働かなくてもいいし、正規社員は多額の報酬を受け取ることができる。

非正規労働者は大量の仕事を抱えながら（ほとんど殺人的な量！）スズメのポシエットに入るくらいの金額しかもらえない（生活がむちゃくちゃに苦しい！）

まあ学生と正規社員は「楽な仕事でカネがもらえるなんて非正規労働者はいいなあ」と思ってるのかもしれない。勝手に妄想してるのかもしれない。

学生はこう思ってるかも。「収入ゼロだし、部活や勉強がしんど過ぎて、学生生活は地獄だ！」

正規社員はこう思ってるかも。「仕事量が半端ない。その割りに給料が安い。社員は地獄だ！」

バカ丸出しである。非正規労働者の仕事量に比べれば、学生のしんどさなんてたかが知れてるし、非正規労働者の生活の苦しさ比べれば、正規社員の生活の苦しさなんておならプーだ。

まったく甘えたやつらである。自分らだけ憂鬱だみたいな面しやがってヘドが出る。非正規労働者の憂鬱さたるや、ヘビー級のチャンピオンだ。それをもっとよく見て反省しろ。

まったく、学生と正規社員は甘ったれが多くてウンザリする。中には、できた学生や正規社員もいるけど……200人いたら一人いるかいなかだ。日本の未来は暗い。

オレたち非正規労働者ががんばらないと、日本は簡単に崩壊する。

がんばろう！

非正規労働者は世界の奴隷か！

これは、ジョン・レノンの「女は世界の奴隷か！」のもじりです。前に書いた「非正規労働者に力を！」は、ジョン・レノンの「人々に力を！」のパロディ。

ジョン・レノンの影響で大きいな。何か知らんが、オレ、ジョン・レノンが好きなんだよなあ。

まあこれは好みだね。ジョンが嫌いつう人も多いからな。

ジョン・レノンの発言で気に入ってる一節。

僕は反抗的な人間だが
社会に愛されてもいたい
生意気で頭のおかしいミュージシャンなどいやだ
だが僕は僕でしかない

うる覚えなので、ところどころ違ってるかも。映画「イマジン」からの引用。

オレが非正規雇用問題にこだわってるのは自分が非正規労働者をやってるからなんだけど、それだけじゃない。他にも理由がある。まあ複合的な理由。胸の辺りにもやもや存してるね。一つ一つ言葉にして行こう。

非正規労働者も正社員も暮らしやすい世の中がいいね。

一体オレはどこへ向かっているのか。明らかに苦しい方へ苦しい方へ進んでる。

非正規労働者は重労働だ。ならば高い報酬を要求してもいい。なのにしない。オレが高賃金になると商品の価格が上がり、お客様が困るからいかんとつい考えてしまう。

非正規労働者は低賃金だ。ならばもっと仕事を減らしてもらっていい。しかし、しない。仕事を減らすとサービスの質が低下しお客様が困るとつい考えてしまう。

優しすぎるのがオレの弱点だ。正社員のように高い報酬を要求したり、学生のように楽したりすることができない。

だからたまに学生と正社員が羨ましくなる。いい環境で生きてる人たちが羨ましい。非正規労働は本当に過酷だ。地獄だ。

だけど進まないといけない。日本の未来のために。

金持ちとかは、こういう震災とかのとき、多額の寄付金を出すのですごいなあと思う。やるなあと思う。非正規労働者なんて全然だめだ。低賃金過ぎて生活苦しい。逆に寄付金がほしいくらい。

しかし、非正規労働者は、労働を寄付してると言える。例えば、正社員にやらすと20万かかる仕事を非正規労働者が10万でやれば、10万の寄付になる。非正規労働者が奮闘することにより、世の中の色々なことが、低価格でよいサービスになってるということを考ええると、非正規労働者は労働が社会に対する寄付になってると考えられる。金銭的な寄付はできませんけど。

非正規労働者に明日はあるのか、ないのか。

暗闇にまみれた心。

晴れ渡った空の下、夜汽車が走ってる。昼間でも、闇の中にいる気分だ。

一体非正規労働者が何をしたんだ。一生懸命働いてきた。なのに、なぜ貧困に苦しまなきゃいけないんだ。

世の中の理不尽さに爆発しそうである。

そうは言っても、手を抜くことはできない。手を抜くとお客様が困る。

しかしこのままだと負担が大きすぎて自殺してしまう。

こういう時ほど小説を読み、書くのだ。小説には、人間を前向きにさせる力がある。

地獄この世の地獄だ。非正規労働はこの世の地獄だ。

働いても働いてもスズメのポシェットに入るくらいの金額しかもらえない。

しかも、非正規労働者は現在1700万人。全労働人口の1／3。

1985年の段階で600万人であったことを考えると、驚異的な時代だ。異常事態宣言を政府は早急に出し、対策チームを結成しなきゃいけない。

助けてくれ！

そう叫ぶ日々。果てしない闇。果てしない地獄。

一体日本に明日はあるのか。ないかもしれない。

だけど、進もう。前進しよう。いつかは光をつかめると信じてがんばろう。

やまない雨はない。

いつかきつと日本も晴れる！

自由になりたい。縛られたくない。願えど願えど、縛られっぱなし。SMじゃねえんだからさ、いかげんウンザリするよな。団鬼六。

職場に行けばお客様にへこへこして、小説書けば読者にへこへこしてる。自分が自分で情けないよ。

ただ生きるためには仕方ない面もあるわね。横柄にしてるとすぐ干される。

とはいえ、こういうのはバランスなんだよな。カネのためにある程度へこへこするのはいいんだけど、し過ぎると病気になる。頭や身体をやられる。

難しいよね。

あと、いかげんな仕事する奴が多くてウンザリするわな。

銭湯の休憩場のソファで寝てケータイ打つてるとき、掃除のばあが、陰気な声でいやいや仕事してますみたいな感じで失礼しますゆうてさ、灰皿立てを移動させて掃除すんだ。

んで、戻す時、オレとむちゃくちゃ距離の離れた位置に灰皿立ておくねん。テーブルの上に煙草置いてんだからさ、オレが煙草吸うことくらいわかるだろ。だったら吸いやすい位置に置かんかい。いかげんな仕事をすんな。クソめ。

仕事人だけじゃない。客も腹立つ。書店の自販機の前に座って煙草吸ってた若者。チヨ一邪魔くせえ。ほんまぶっ殺してえ。

車もくそ腹立つ車が多い。マナーがなっとらん。いきなり横から飛び出そうとする車。原付を「無理矢理」追い抜こうとする車（追い抜くこと自体はいいんだよ）。ウンザリな車が多すぎる。ぶっ壊したいぜ。

原発の問題と非正規雇用問題というのは驚くほど似てる。

今日の朝刊読んだのだが、日米がモンゴルに核処理場を作る計画を極秘で練っていて、今回の原発事故の影響で発覚したらしい。なぜモンゴルが受け入れたかといえば、日米から原子力技術をもろうためだな。

これ、「モンゴルⅡ非正規労働者」「日米Ⅱ正社員」と考えるとわかりやすい。

正社員は、日米がモンゴルに核処理場を建てようとしたように、弱い非正規労働者の利益を吸収して今までいい暮らしをしてきた（てか、今もしてる）。なぜ今まで非正規労働者がこんな理不尽な状態について黙っていたかといえば、非正規労働者が、モンゴルが日米から原子力技術をもらいたかったように、正社員から仕事のノウハウをもらいたかったからだな。

では、なぜ、今、モンゴルの核処理場建設計画が発覚したように、非正規雇用問題が世間に浮上してるのか。今まではなかったのに。

それは、原発事故が起こったように、今、非正規労働者の生活が壊滅的に破壊されてるからなんだな。だから、浮上してるのだ。

この世の地獄だ……非正規労働者は朝から晩まで必死に働いて、ノミのポシェットに入るくらいの金額しかもらえない。

いっそのこと自殺してしまいたい。苦しいのはもういやだ。楽になりたい。

今日もまた踏切の前に立つ。飛び込みたくて飛び込みたくてたまら

ない。

だけど、今日も飛び込めなかった……死ぬ勇気もないのか。それでも特攻隊の子孫か。情けない。

非正規労働者は、朝から晩まで必死に働く。世のため人のためにガムシヤラに働く。

それなのに、ノミのポシエットに入るくらいの金額しか受け取ることはできない。もちろん、正社員にはきちんとある社会保障が非正規労働者には……ない。

もう死んでしまいたい。生きるのが苦痛だ。この世の地獄だ。もうこれ以上苦しみたくない。楽になりたい。

死にたい。

死にてえ!!

誠実であればあるほど、身と心を削る。ストレスを抱え、病気になってく。しかし、誠実さを失ったら人間が腐ってどうにもならない。腐敗して、どろどろのぐちゃぐちゃになる。

いったい何という時代だ。どちらに転んでも、どかああああああん。

どかああああああああああああん。

誠実さとあくどさの狭間で頭を抱える。ぶるぶる震える。

あくどさは生きるのに必要。

誠実さは、世のため人のために必要。

であるのに、この二つは対立するのだ。意味不明。

死にてえ!!

誠実な人が生きることができ世の中にならんか。

生きるのにあくどいことをせずに済む世の中にならんか。

死にてえ!! (死にてえ!!)

低賃金ならあまりがんばらない方がいい。手を抜いた方がいい。気合い入れない方がいい。

なぜかという、がんばると燃料が多くいる。しかし、低賃金だと燃料が充分に補給できない。すると、ストレス過多で通り魔とかしてしまう。普通はね。だから、みんな低賃金の人は手を抜いている。しかし、オレは低賃金なのにがんばってしまう。普通じゃないんだな。頭がおかしい。脳味噌の病気だ。普通なら自分の身を守るためにラクするのに、オレは自分を犠牲にしてお客様のためにがんばっちゃう。頭が完全に病気だ。脳外科に行かないといけない。

あるいは、重労働なら多額の報酬を要求してもいい。

なぜかという、重労働だと燃料が多くいる。燃料を補給するには多額のおカネがいる。だから、給料を多くしてもらわないといけないのだ。普通はね。だから、重労働の正社員は多額の報酬をもらっている。

しかし、オレは重労働なのに要求しない。普通じゃない。頭が完全に爆発してる。脳味噌がくるくるパーになってる。オレが多額の報酬を要求すると、商品の価格が上がりお客様が困ってしまうと考え、要求しないのだ。頭がもうどろどろに狂ってる。考え過ぎだ。お客様は価格が上がっても必要なら買う。別に困らない。それなのにオレは頭がおかしいので困ると思えてしまい、多額の報酬を要求できない。完全に脳の病気だ。脳外科に行かないと。

まともになりたい。まともな脳がほしい。切実にそう思う。低賃金なら死なないようにラクをする。重労働なら死なないように多額の報酬を受け取る。そういうまともな思考がほしい。このまま行くと、近いうちに自殺してしまう。

暗がりの中でもがいてる。人生にこういう時ってある。

昼間でも闇の中にいるような気分。明るさの中でじめじめしてる。変化の時だ。大きく変化する時だ。無意味に悩んでるわけじゃない。意味がなきゃ悩まない。

一体オレはどこに向かっているのか。

一体オレは何がしたいのか。

小説。

すごい小説が書きたい。売れる売れぬは考えない。ただ、すごい小説が書きたい。

ただ、読むのはゆるいのもいいかな。他作家にすごい作品は求めない。負担になる。

オレがすごい作品を作れば、他の作家も自然にすごい作品を作りたくなるだろう。多分。

朝から晩まで必死に働き、ノミのポシエットに入るくらいの金額しかもらえない。非正規労働は地獄である。

ただ、低価格でよいサービスをお客様に提供するには我慢するしかない。

自己の利益を最優先させるなら、もっと楽な仕事や、もっと報酬のいい仕事について方がいい。

しかし、人間、時に自己を犠牲にしてもやらねばならぬことがある。

正社員がうらやましい。大して仕事してないのに多額の報酬を受け取ってる。

学生が羨ましい。飯をただで食わせてやってんのに、働かないで遊んでばかりいる。

何で非正規労働者だけがこんなに苦しまなきゃいけないのか。しかし、がんばらないと。世のため人のために耐えないと。

早くまともな世の中になりますように！！

あああああああああああああああああああああ。

早く死にたい。
楽になりたい。
もう苦しみたくない。

早く死にたい。

早く死にたい。苦しいのはもうウンザリだ。

非正規労働者は朝から晩まで必死に働いても、どんなにがんばっても、ノミのポシエットに入るくらいの金額しかもらえない。地獄である。

地獄から脱出したい。つまり、死にたい。この世から消え去りたい。

非正規労働は地獄だ。連日の低賃金重労働に悲鳴を上げている。

正社員のように多額の報酬を受け取りたい。

学生のように楽しみたい。

非正規労働者はこの世の奴隷だ。働いても働いても、正社員や学生に利益を奪われる。正社員や学生が幸せに暮らしてる裏で非正規労働者は地獄の苦しみを味わっている。

早く死にたい。それだけが願いだ。もう苦しいのはいやだ。楽になりたい。

早く死んで幸せになりたい。地獄から脱出したい。この世から脱出したい。幸せになりたい。笑顔になりたい。

早く死にたい。早く早く死にたい。幸せになりたい。

早く死にたい……苦しいのはもういやだ。ラクになりたい。

非正規労働はこの世の地獄だ。働いても働いても、わずかな金額しか受け取ることができない。

絶望。生きてる意味がわからない。ただひたすら、闇闇闇……。
こんなに苦しいならいっそのこと死んでしまいたい。死んでラクに

なりたい。生きていても苦しいだけ。もう死にたい。

早く早く早く死にたい。

早く早く早く死にたい。

非正規労働者が幸せになれる日は来るのか。非正規労働者が闇から脱出できる時は来るのか。

わからない。ただひたすら低賃金重労働に身と心を削られる日々。地獄地獄地獄。この世の地獄である。悲鳴を上げている。頭がおかしくなりそうだ。

正社員のように多額の報酬を受け取りたい。

学生のようにラクがしたい。

非正規労働はいやだ。低賃金重労働はもうウンザリだ。

死にたい。早く死にたい。

早く死にたい。闇から脱出したい。幸せになりたい。

早く死にたい。

引田匹世。人は彼女のことをヒッキーと呼んでいた。

なぜ呼んでいたと過去形なのか。実は今学校に行っていないのである。引きこもりをしてるのである。

引田家には実は他に引きこもりが三人いた。兄匹郎。彼は会社を辞め引きこもりをしている。

そして、姉匹子。彼女は大学を中退し、引きこもりになった。

最後に父匹助。彼もまた会社を辞め引きこもりになった。

唯一引きこもっていないのは、母、明子である。明子は、ファッションデザイナーをしていた。

売れっ子なので、収入は多い。それで四人を養うことができるのだ。兄匹郎は、ある日、外に出る決意をした。いつまでも家にいてはいけない。早く就職しないと。

勢い勇んで、外に出た匹郎であったが、トラックにはねられ、即死した。

明子は葬式を開いたが、匹子と匹世と匹助は引きこもって出席しなかった。

匹子は、ある日、ついに決意した。あたしががんばる。がんばって就職する。

勢い勇んで外に出た。

すると、神のいたずらか、酔っぱらい運転にはねられて、即死した。明子は葬式を開いたが、匹助と匹世は引きこもっていたので出席しなかった。

ある日、匹世は決意した。あたし、大検を受けて大学に行こう。

匹世はリハビリの意味も兼ねて、外に出た。

すると何ということだ。神のいたずらか。匹世がぶらりと入ったデパートが火事になり、匹世は焼死してしまった。

明子は葬式を開いた。匹助は引きこもっていたので、出席しなかった。

そんなある正月。匹助は、自室で餅を食べていた。喉につまらせた。このままだと窒息死してしまう。電話は一階にある。匹助は引きこもりなのでケータイを持ってない。妻は初詣に行っている。叫びたくても声が出ない。

匹助は、自室で寂しく死んだ。

明子は葬式を開いた。

明子はファッションデザイナーとしてますます名声を高め、収入も増えていった。

本人が本気で変わろうとしないと変わることはできない。いつまでも人のせいにしたら、いくらオレが注意しても変わらない。

まず自分に甘い姿勢を直すべきだ。それから、人を攻撃してストレス発散する癖も直さないと。

ただ彼は無自覚でやってる気がする。本人に自分に甘く人に対し攻撃的であるという意識はないかもしれない。むしろ、自分は善人で周りが間違ってると思い込んでるのかもしれない。

まず自覚することからスタートだ。自覚をしないと変わることはできない。

そして、それは早く変わらなきゃいけない。彼がいつまでも変わらずに今の調子でやってると周りが本当に疲弊して憂鬱になっていく。変われ。年齢は関係ない。歳をとってるから変われないなどと甘えたことを言っていてはいけない。努力すれば変わることはできる。変われ。君のためでなく、世のため人のために。

果てることない低賃金重労働……非正規労働の過酷な現実である。昼間なのに闇の中にいる気分だ……晴れてるのに、心では雨が降り続ける。

一体、非正規労働者に明日はあるのか。結婚して子供を作って家を建てられる日は来るのか。さっぱりわからない。それとも、それは正社員しかできないことなのだろうか。

地獄である。生きてる意味がわからない。死にたい。死んでラクになりたい。苦しいのはもういやだ。

なぜ非正規労働者だけがこんなに悪い目にあわないといけないのか。何か悪いことをしたのか。別にしてない。というより、世のため人のために必死に働いてる。

なぜ学生や正社員だけあんないい生活をしてるのか。別に悪いことはしてないが、特にいいこともしてない。なのに、なぜ。

世の中、意味不明である。大暴れしたい。街に出て包丁を振り回したい。ストレスが大きすぎる。

なぜ政府は非正規労働者を支援しないのか。なぜがんばってるのに苦しんでる労働者を支援しようとしなのか。理解に苦しむ。

苦しい。苦しい毎日だ。悲鳴を上げている。

早く死にたい。もうみんなの面倒を見るのに疲れた。

早く……死にたい。

死にたくて死にたくてたまらない。

生きてるのが苦痛で苦痛でしょうがない。

早く……死にたい。

何やっても上手くいかない。失敗ばかり。

早く……死にたい。

早く、早く、早く死にたい。

生きるのが苦痛だ。ラクになりたい。

早く死にたい。

早く、早く、早く、早く死にたい。

死にたい。

死にたい。

死にたい。

死にたい。

早く、死にたい。

死にたい！

苦しいのはもういやだ。早く死にたい。

死にたい！

ラクになりたい！

早く死にたい。生きてても苦しいことばっかで何もいいことがない。

がんばってもがんばっても、バカな目にあう。

人に親切にしても、裏切られる。

生きてる意味がわからない。早く死にたい。

死にたい！

死にたい！

死にたい！

死にたい！

死にたい！

死にたい！

死にたいいいいいいいいい。

うぎゃああああああああ。

一年くらい休みたい。人生に疲れた。対人関係に疲れた。それ以外にも色々あって疲れた。接客マナーも低下しお客様にも迷惑かけっぱなし。

一度仕事から離れ、一年くらい何もしないで人生を見つめ直したい。仕事仕事仕事ばかりで、余裕がない。人生をしっかりと分析したい。仕事に縛られるとダメだ。余裕がなくなる。

二年くらい休みたい。休んで、十分に充電して、それからはりきってがんばりたい。

三年くらい休みたい。それだけ休めば疲れもとれ、しっかり働くことができる。人生をやり直すことができる。ゼロからスタートさせることができる。

四年くらい休みたい。

非正規労働は地獄である。必死に働いてるのにスズメのポシエットに入るくらいの金額しかもらえない。

肩書は「無職」。

こんなにも必死に働き、低賃金に耐え社会を支えてるのに、肩書は無職。嘘じゃない。以前に交通違反で警察に捕まった時、調書にそう書かれた。

会社に勤務してるのに、無職！

会社に勤務してるのに、結婚できない！

正社員と同じ時間働いても、無職！

これが世の中の現実である。政治家が宗教家がいくら甘いことをぬ

かしても信用できない。

じゃあ、経済復興すると豪語する政治家と宗教家のみなさんに聞きますけど、五年後には、全国に1700万人いる非正規労働者を全員正社員にし全員に社会保障をすると約束できますか???

ワイドショーを見た。警備会社に二人組が侵入し、警備員を全治二ヶ月の目にあわせ、6億400万円を強奪するという事件が起った。

オレはこれを見て、

「ひょっとして、その6億400万円を全国の非正規労働者に配りに行ったのかな??」

と妙なことを考えてしまった。

児童養護施設にランドセルを送るタイガーマスク的な人が実際にいる。

6億強奪の犯人が仮にそういう行動に出たとしても、警備員の人には大変申し訳ないが、オレには違和感がない。てか、そっちの方が現実的だ（正社員にとっては漫画だろうが）

それほど、非正規労働者は地獄の苦しみを味わっている。この世の地獄。

一体、いつ闇から脱出できるのか。我々非正規労働者が光をつかむ日は果たして来るのか。それともずっとずっと闇の中にいないといけないのか。

わからない。早くまともな社会にしたい。世の中の狂った部分をどんどん治療していきたい。

正社員だけが幸せで非正規労働者にだけ負担を押しつける社会システムは間違ってる。

間違いはどんどん直していかないといけない。でないと、国家が崩壊する。

正社員はもうこれ以上非正規労働者に頼っちゃいけない。

己の利益は己の力でつかみ取るのだ。

非正規労働者の利益を不当に奪い、いい暮らししてる正社員は全員地獄に落ちろ。

低価格でよいサービスを提供し続けることに疲れた。身体のあちこちが痛い。

もう死にたい！

いつ賃上げされるんだ。いつ仕事がラクになるんだ。

いつまでお客様は低価格でよいサービスを受けようと企んでいるんだ。

いつ適正価格を払おうとするのか。

まあよいサービスを受けたいというのはいいんだけど。

今日、コンビニに行ったら、20メートルくらい並んでいた（つまり店内を一周してた）

店員さんがレジ大あわてで、オレが手を出すと、だんと強くオカネを置かれた。

オレは傷ついた。オレお客様なのになぜ、こんな乱暴に扱われないといけないんだろう。オレが若者だからいいが、おばあさんがこんな粗暴な接客を受けたらショックで心臓停止してしまうかもしれない。そこまで行かなくても鬱病になり寝込んでしまうかもしれない。しかし……コンビニのアルバイト店員低賃金重労働である。ものすごい仕事量を抱え、スズメの涙ほどの金額しか受け取ることができない。そんな状態じゃ、サービスも悪くなるというものだ。正社員のサービスがいいのは、オカネをたくさんたーくさんもらってるから当たり前なのだ（悪かったら病気である。入院した方がいい）
学生が粗暴でなく物腰柔らかいのも、働いてない苦労してないから当たり前である（学生で粗暴だったら病気である。すぐ入院しないといけない）

では、なぜオレは低賃金重労働なのによいサービスを人々に提供できるのか。

おそらく「神」だからだろう。

人間では無理だ。

人間になりたい。

働いても働いても働いてもいい暮らしができない。毎日毎日毎日低賃金重労働もうウンザリだ。低賃金重労働を始めてからもう十年になる。異常事態だ。

早く早く早くまともな社会になってくれ！

異常な社会にはもう住みたくない。がんばってる労働者がバカな目にあう愚かな国家に住みたくない。

早く早く早く。

早く早く早く。

早くまともな国になってくれ。

労働者が適正報酬を受け、適正な仕事ができるような、そんな明るい国になってくれ。

暗い暗い低賃金重労働時代はもう終わりにしてほしい。

早く早く早く。

早くまともな正常な国家になってくれ。

一刻も早く！

何か現代は、怠けてるやつがいい目にあって、がんばってる人がバカな目にあってる。

いいかげん世の中を変革したい。今の状態では意味不明過ぎる。

まず、五年後には全員正社員にする。全員に社会保障をする。

まずはそこからだ。できないことはない。非正規労働者はすでに正社員と同じだけの仕事をしてるのだ。

後は、賃金を正社員並みにし、社会保障を正社員並みにするだけ。

それをするには皆正社員制度を導入するより道はない。

君は僕のことを夢想家だと言うかな（↑ジョンの真似）

だけど、やってやれないことはない。ちょっとがんばればできる。ほんのちよつと努力するだけでいい。そうすれば夢は現実になる。

非正規労働者に力を！

死にたい！

働いても働いても働いても朝から晩まで必死に働いても、非正規労働者は賃金が安すぎてまともに生活できない。

死にたい！

死んでラクになりたい！

苦しいのはもういやだ。

きちんとした報酬が欲しい。きちんとした生活がしたい。貧困はいやだ。

こんなに苦しいならもう死にたい！

死んでしまいたい！

死んで消えてなくなってしまうたい。

死にたい！

死にたい！

死にたい！

死にたい！

死にたい！

死んでしまいたい！

もういやだ。

死んじまいたい！

死にたい！

生きていたくない。

死にたいっっ！

前向きに生きよう。こんな時代だからこそ。

低所得重労働ではあるが、これも世のため人のためと思い、がん

ばろう。

だけど、たまに辛い。

悲しくて悲しくてやりきれない時がある。

包丁を振り回したくなる時がある。

やはり、前向きは無理だ。あまりに過酷過ぎる。世の中が陰惨過ぎる。

どうすればいいのか。迷走しとる。

さっぱりわからない。

頭が爆発しそうだ。イライラする。

一体どうすれば。

一体どうすれば労働者が幸せになれるのか。

今は消費者だけが幸せな気がする。

労働者も幸せにならなきゃいけない。

まあ労働者と消費者はかぶる面もあるけど……。

一体どうすれば。一体どうすれば。

わからない。考えろ。

考えろ考えろ考えろ考えろ。

皆正社員制度を導入するしか道はない。

全員に社会保障するしか道はない。それしか道はない。

しかし、どうすればそれが実現するのか。

非正規労働者が正社員並に働けば実現できるのか。

いや、すでに非正規労働者は正社員並に働いている。それなのに実現していない。

てことは、これは違うな。

革命を起こせばいいのか。

確かに。

状況がここまで深刻化すると変革じゃ弱い。革命じゃないとだめだ。

しかし、一体、どんな革命を起こせばいいんだ。

ロシア革命やフランス革命を真似してもだめだ。古すぎる。

現代に合った革命を起こさなくちゃいけない。

現代にフィットした現代人の現代人による現代人のための革命じゃないか、いけない。

考えろ行動しろ考えろ行動しろ。

よく考えたら、すでに革命は起こってるのかな???

少しづつよくなってるような気がするよ。

みんながまじめに一生懸命やってるから、何かよくなっていくような気がするよ。

てことはすでに革命は起こってるのかもしれない。いったいどんな革命が起こってるんだ???

百年後には、すべてがわかる。

なかなか結果が出ないな……まあでかい仕事をしようとしとるんで簡単には出ないか。

しかし、生活が苦しい。

働いても働いても働いてもアルバイトなので全然いい暮らしができない。金がなさすぎて胃が痛い。

苦しい毎日である。苦しくて苦しくて叫びそうだ。

ああ。無限地獄。

どうしたら闇から脱出できるのか。どうしたら結婚して子供を作って家を建てて車を買うことができるのか。

がんばればできる？

がんばってるよ、35年も。なのに、できない。

もうどうしたらいいかわからない。

踏切の前に立つ日々。飛び込めたらどんなに楽か。生きるのはつらい、苦しい。痛い。

それでも生きようとしてるから、我ながらアホなやつだぜ。

アホもあなどれん。

ケータイ代8000円がまだ払えていない。給料日には、クールビズ用のシャツ4着分10000円を払わないといけない。所持金9000円。月収90000円。

いったいどうしろというのか。温厚なオレでも、いいかげんに腹も立つ。

正社員は、「アルバイトは時間が自由だからいいね」と言う。冗談じゃない。望んで労働時間が少ないならいいが、望んでない場合はどうなるんだ。生徒数が激減し、授業数が減り、収入が激減した（歩合制だから）

にも関わらず、本社の正社員どもは固定給で安定した収入を得ている。ふざけるな。正社員のためにオレたちは働いてるんじゃないやねえぞ。人間を愚弄するのも程々にしておけ。

そんな中でも優しさがある。今日、同じく貧困アルバイトのマルさん（清掃部門）に割引券をもらった。

以前に、オレがマルさんに割引券をあげたのを覚えていてくれたのだ。

涙が出てきた。マルさんも生活が苦しいから本当は割引券を使いたいだろうに、オレにわざわざ……。

政府・企業に対し、怒りがわなわなと沸いてくる。

労働者が真面目でしっかり働いてることにあぐらをかいて、この国の政府・企業は、いつまで経っても、労働環境をよくする努力をしようとしなない。

いったい、いつ、この国の企業・政府は動くというのか。いつまでじっとしとるつもりだ。いいかげんにしろ。動け。働け。走り回れ。引きこもるな。

怒りが爆発しそうである。

それはともかく、マルさんありがとう……。

状況は厳しいけど、お互い優しさを忘れずにがんばっていこう。政府や企業に負けてたまるか。殺されてたまるか。逆にぶっ殺してやる！……！

「死にたいよう！」

これはまあほんまに最近よく思う。なぜかな。

小さい頃は「生きたいよう！」「生きたいよう！」とそればかり言っていた気がするが……なぜ、こうなってしまうのか。

分析するに、経済的状况が厳しくなってるってことが挙げられる。中学生くらいの時が確かバブルであった。つまり、小さい時に好景気というのを経験してる。親父の月収も確か40万くらいであった。しかし、オレが成人してからは、ずっと不景気。アルバイトなのでその時によって所得の変動はあるが、20万円を越したことが一度もない。

これが、「死にたいよう！」と思う原因の一つ。現在、月収が40万円なら、死にたいと思ってるかどうか疑問である。

もう一つは……オレの内部に問題がある気がする。上の理由は、あくまで環境的な問題だ。

内面的に変化してるってことが考えられる。

どう変化してるかってのは、よくわからないので、これから執筆や読書をしてく過程で探っていきたいと思う。

25の時にアルバイトを始めて現在35なので、アルバイトを十年間がんばってきた。雨の日も風の日も台風の日も、苦痛に耐え、屈辱に耐え、がんばってきた。

この十年間、20万円未満の収入でやってきた。20万円未満といっても、19万もらってた時は、かなりの長時間労働で長く続かなかった。平均10万。ゆえに実家暮らし。この十年間一度も旅行に行っていない。行っていないというより経済的に行けなかった。

なぜこういう生活ができてきたかといえば、親の助けもあるし、プロの芸術家（小説家や漫画家やミュージシャンやお笑い芸人）になるという夢があったから。

けど、さすがにこの歳になると、それが無理ということがいやというほどわかってくる。オレの才能では無理ということがだんだんわかってくる。

ただひたすら、低賃金重労働が重く重く肩にのしかかる。

もう死んでもいいと思う。

この十年間、税金の支払いが悪かったが（還付金をもらってた。てことは行政の助けもあったのだな）

お客様に低価格でよいサービスを提供できてきたと思う。社会貢献は済んだ。

もうそろそろ死んでもいいと思う。苦しむ必要はないと思う。責任は十分に果たした。

これ以上、生きて働く必要はない。もう死んでもいい。充分にがんばった。人には評価されなかったけど。

しかし、やっぱり死ぬの怖いな。どうしたものか……。

まあとにかく小説は書き続けたいとな。生きるにしろ死ぬにしろ。

みんな、苦しい時は苦しいとわめけ。

本来、そういうのは日本人の美徳に反すると言われる。男は黙って……みたいな。

しかし、それも時と場合による。

オレが幼い頃は、わめく必要がなかった。好景気の時代で社会全体が裕福だったから、みんなの心にも余裕があった。誰か苦しそうな人がいたら、その人が悲鳴を上げる前に助けてあげる空気システムがあった。

オレの親の世代も同様である。オレの親の若い時、日本は貧しかった。

たが、戦争が終わり平和な時代になり、やはり、みんなの心に余裕があった。だから、苦しそうな人がいたら、その人が苦しいと言う前に察知しフォローしてあげるシステムがあった。

しかし、時代は変わり、現代は未曾有の大不況。みんな自分の命を守るために自分のことに必死になってる。だから、困ってる人がいても全然気づかない。そして、困った人は何も言わず、黙って自殺をする……。

こういう時は「苦しい！」とわめいてほしい。叫んでほしい。

確かにそういう韓国的なみっともない行為は日本人の美意識に反す。しかし、よく考えてほしい。現代は「非」日本的時代である。助け合いが通用しない、競争原理だけが幅をきかせる「非」日本的時代と言う。過去でいえば、戦国時代、幕末、大東亞戦争時代がこれに該当する。

こういう時代、我々は生きるために、「非」日本人にならねばならぬのである。

ますます、悪化してきた。非正規雇用問題はなかなか解決しない。一体いつ解決するのか。

皆正社員制度はいつ導入されるのか。ひょっとして一生されないのではないか。不安である。

一度、勤務先の塾で「個人事業主」の制度が採用された。

アルバイトを一律、個人事業主に変更した。

なぜ、この制度を導入したかといえば、アルバイト並の賃金で、正社員並の仕事を課したかったからだ。

うちの塾は社員は室長のみで、あとは全員、非正規である。ゆえに、この制度が導入される以前から、社員並に仕事をしてきた。

だから、これはオレとしては都合がよかった。今まで雑誌に投稿する時、アルバイトと書いていて実に不愉快だったが、個人事業主

と書けるなら、格好がつく。

しかし、この制度も数年で崩壊した。当たり前である。アルバイトの賃金で社員の仕事ができるわけがない。社員の賃金をもらえないと社員の仕事はできない。

オレができていたのは入社してまだ二三年だったからである。根性があったし、非正規雇用の怖さをまだよく知らなかった。

しかし、六年七年と経つにつれ、これはまずいと感じるようになった。身体と心が壊れてきた。

冷静に考えれば、実際は会社に勤務してるのに、表面上、自営業者に仕事を委託するという形にするは不健康だ。

無論、十年も勤務してる人に対し、正規の扱いをしないのも不健康であるので、未だに問題は根本的に解決してない。

人生なかなか上手いかないな。上手いかない。

結婚一つとってもそうだ。好きな人がいてもできない。

例えば、東京に彼女がいたとする。オレは愛知県に住んでいる。

そして、彼女が正社員だとする。オレはアルバイトだ。

こうなると、オレが東京に行くしなくなる。さすがに、正社員の彼女に仕事を辞めてアルバイトのオレのところに来いとは言えない。しかし、オレにはオレの、愛知県での生活がある。たかがアルバイトであるが、大事なアルバイト生活がある。それを捨てることはできない。お客様から離れることは苦痛だ。

そうなるともう結婚は不可能になる。

誰が悪いわけではなく自然にそうなる。

世の中上手くいかない。

ただ、救いも少しある。

「小説家になろう」で彼女が小説を書く。オレも書く。そうすることによって、お互いがお互いの作品を読み、気持ちを交換するといふことができる。これは癒える。

ただまあ、ほんまにマジで結婚しようと思ったら、オレが東京に行くしかない。彼女の母親は入院してるのだ。うちの両親は健康ゆえ、そうするしかない。

東京でアルバイトしながら小説を書く。そういう選択肢も頭に入れておかないといけない。

無論、現在には現在の生活があるゆえ、今は愛知県で一人でがんばるしかないが、真剣に結婚しようと思ったら、いずれは愛知県を捨てるしかない。

それが無理なら、彼女のことをあきらめるしかない。

色々考えると、結論としては、死にたい。生きていても苦しいことばかり。いいことが何もない。ただひたすら苦痛ばかり。

死にたい。

雇用問題はますます厳しくなっている。

一体いつ闇から脱出することができなのか。光をつかむことができるのか。

十年も低賃金重労働を続けている。一体いつになれば企業はシステムを改善する努力をするのか。

果てしない闇、闇、闇。そして、闇。

非正規労働者は悲鳴を上げている。もういいかげんにしてくれと叫んでいる。

一体いつになれば、日本はまともな国家になるのか。いい社会になるのか。いつまでクソのままなのか。

さっぱりわからない。

一体どこをどう間違えて、日本はこんな愚かな国家になっちゃったのか。

一体いつ、いつになれば、非正規労働者に適正報酬が支払われるのか。一体いつになれば、非正規労働者に社会保障するのか。

わからない。

わからない。

一体いつになれば日本は真面目になるのか。

いつまでふざけてるつもりなんだ。

わからない。

わからない。

日本が何をしたいかわからない。

労働者をこんなにもひどい目にあわせてなぜ平気なのか。

さっぱりわからない。

もはや狂ってる。

生きたい!!!

死んだら小説が書けない。

生きてると、低賃金重労働のアルバイトとか、悪質な押し売りに悩まされないといけないけど……それはいやなので、死にたくなる時はあるけど……

生きたいと小説が書けない。だから、生きたい。

小説をたくさん書きたい。

小説をたくさん読みたい。

死んだら、それをするのが不可能になる。

だから、生きたい。

そりゃ生きてりゃいやなことがたくさんあるけど、

生きたいと小説が書けなくなる。

それが一番いやだ。

だから、生きる。

生きたい。

来る日も来る日も低賃金重労働。気が狂いそうだ。包丁を振り回したい。

非正規労働者の悲しい現実である。いくらがんばっても結婚でき

ない。子作りできない。

それに対し、企業からも政府からも何の説明もない。ごく自然にごくごく自然に安価な労働力を享受してる。

イライラする。イライライライラする。銭湯の休憩所で、わがままなじじいが大声でわめいて、パートのおばちゃんを困らせてるのを見るとほんまにぶち殺してやろうかなと思う。

暑さは何とかなる。鍛えれば何とかなる。自然には対処できる。

震災はちよつと大変だが、暑さとかは根性で何とかなる。上手くやれば、熱中症にはならない。

しかし、非正規雇用問題だけではどうにもならない。わがままなじじいを更正させることもほぼ不可能。人為的な災厄はどうにもならない。

しかし、こういう時に文学が生まれる。こういう苦しみの中から文学が生まれる。それは歴史が証明してる。過去の作家たちは苦悩の中から素晴らしい文学を生み出してきた。

また娯楽小説もそうだ。苦しみから解放されたい。その気持ち娯楽小説を生み出す原動力になる。

決してあきらめてはいけない。きっと光はあるのだ。

だんだんだんだん鬱になってくる……。

暑さも影響してるだろうか。

あまりに状況が厳しい。

社会システムがどうにも納得いかない。

だんだんだんだん鬱になってくる。

最近、大学時代に住んでいたアパートや、バイトしていたスーパーを思い浮かべる。

なぜだろう。

何となく解る。

初心に戻れ。

長く生きてると、色々な現実を知ってしまい身動きできなくなってくる。若い時のあのわけのわからないエネルギーパワーが失われる。確かに若い時は辛かったけど、夢や希望があった。今は比較的ラクだけど、絶望しかない。どちらが幸せなのか。答えは簡単だろう。

確かに非正規労働者はきつい。あまりにあまりに仕事がつい。その上、低賃金という苦痛まで加算されて、地獄の毎日である。死にたい毎日である。

でも、あきらめちゃいけないと思う。いつかは光をつかむ。ずっと闇の中ということは無い。明けない夜はない。

こういう苦悩の中から文学は生まれる。また、苦悩を回避するために娯楽小説がある。

負けるな。戦え。進め。あきらめるな。くじけるな。

非正規労働者に光を！

あふれんばかりの光を！

今すぐに！！

水が旨い。そんな季節になってきやがった。

非正規労働者として、十年間頭を押さえつけられてきた。いいかげん、ぶちギレそうだ。

企業も政府も助けてくれない。社会が援助してくれない。もう何も信じられない。

と言いたいとこだが、まだあきらめてない。家族や友達には世話になってきたので、これから恩返ししていきたいし、国家のために自己を犠牲にしてみたくさん仕事してきたので、政府や企業には絶対損害賠償させる。

まだ死ねない。それをするまではまだ死ねない。

本当はオレが働きかけなくても、政府や企業が動くべきだ。

しかし、震災でこいつらはほんまに動かないというのがよくわかった。

ちよっと、ペンで刺さないといかん。そうせんとすぐに怠ける。水が旨い季節になってきやがった。

あいつとあいつに対する怒りはまだ忘れてない。やった方はすぐに忘れるが、やられた方はいつまでも覚えてる。

夏になった。もうすぐ七月である。暑い暑い季節がやって来た。

にも関わらず、非正規労働者の待遇が全くよくなっていない。社会保障がなされない。

非正規労働者は現在全国に約1700万人いる。1985年の段階で600万人だったことを考えると驚異的だ。全労働人口が約5400万人だから、1/3が非正規労働者である計算になる。

暑いのは気候のせいだけじゃない。この理不尽な社会システムもまた、精神的な暑さを誘発している。再び通り魔事件が起きないか不安である。

暑い。生きねば。生きねば。生きねば。

かき氷やクーラーや扇風機や水風呂や風を利用しながら、この夏を乗りきろう。

度重なる低賃金重労働。この暑い夏でも状況は変わらない。相変わらず、非正規労働者の負担は重い。社会保障がぜんぜんない。

戦慄のサマー地獄である。

こういうときは、冷水シャワーを浴びるのが一番だ。浴びながら、変な踊りをして、変なことをわめく。

非正規労働……それはこの世の地獄である。冬もつらかったが、夏もつらい。

一体、オレたちはどこへ行くこうしてるのか。そもそもどこから来て、今どこにいるのか。

こんなに働いても肩書きは無職。いいかげん意味がわからない。や

る気が失せる。

一体、非正規労働者が社会保障される日はいつ来るのか。まさか一生来ないんじゃないかと思って不安になる。来年くらいにはされるだろうか。

身体のいろんなところが壊れてきてる。

非正規労働者に力を！（今すぐに！）

こんなつらい日々が続くなら、いつそのこと死にたい。

毎日、踏み切りの前に立つ。なかなか死ねないが、しかし、死にたい気持ちは消えない。おそらく明日も踏み切りの前に立つだろう。一体、日本はどこで舵取りを間違えた。何でこんな愚かな国家になっちゃった。

非正規労働者が1700万人もいる。1985年の段階で600万人だったことを考えると驚異的な時代だ。

それでも識者は「日本はまだ平和ですから」「豊かですから」とぬかす。

確かに豊かな層はいる。正社員だ。

なぜ正社員の生活を守るために、オレたちが貧困に苦しまないといけないんだ！

早く死にたい。生きてても苦痛ばかり。

早く死にたい。

11月に開催される文芸フリマは、いろいろ考えた末、参加を断念。確か東京で開催されると連れが言ってたので、どうしても交通費が捻出できない。

今から月に5000円貯金すれば行けるかもしれないが、それをするとかかなり生活を圧迫される（月収が9万円である。仕事は増えず。依然、厳しい経済状況が続く）

遊びよりまずは生きることを優先させよう。

ただ、文芸フリマ自体は面白そうなので、月収が26万くらいになったら参加しようと思う。

その代わり、同人誌用の短編は無理してでも締め切りに間に合わせる。身体にムチを打って書く。

原稿料が出ないのがつらいが、世の中金がすべてじゃない。カネにならなくてもやらねばならぬことってのはある。がんばろう。

夏だ。太陽がぎらぎら照ってる。

非正規労働者が最低限の文化的で健康的な生活を送れる日は来るのか。

それは本人と政府と企業と世間全体の努力にかかっている。

バイトで色々悩みがある。苦しみやストレスがけっこうある。しかも暑い。

ああ。暑い。だるくなってくる。身体が壊れそうだ。

こういう苦しい時に文学が生まれる。あるいは、苦しみを回避するために娯楽小説を読んだり書いたりする。

それにしても暑い。汗がだらだら出る。

こういう時は冷水シャワーを浴びる。ごつつ気持ちいい。

しかも浴びながら、変な踊りを踊りながら、むちゃくちゃにわめく。叫ぶ。

これが、ごつつストレス解消になる。世の中、意味意味意味ばかりゆえに、無意味なことをするとスカッとする。

まあ無意味なことしかない世の中ってえのも怖いけどねえ。

しかし、収入がよくなならない。厳しい経済状況は続く。

暑い。太陽。

また風呂場に行き、冷水シャワーを浴びる。浴びながら変な踊りをして、変なことをわめく。

ともかく今回で最終回とします。まあ、六月30日に停滞して、今が、9月半ばだから、二ヶ月以上空けたら、これはもう飽きたってことですな……特にオチもなかったが……まあ続きが書きたけれりゃ「2」を出せばよろしい。

非正規雇用問題をやたら叫んだが、正社員の過労死や、経営者の孤独などもあるゆえ、根は単純ではないです。自分がアルバイトだからわかりやすい材をとっただけの話で。

まあ今回の連載でわかったことは、エッセイは苦手だなということ。エッセイとエッセイの合間に入れた小説がなかなか好評だったこと。ふむ。しかし、エッセイと小説の融合というのはなかなかいいアイデアなので、またやりたい。私小説にしても、さくらももこや、芥川の「歯車」はよかったので、これもまた書こう。

今後の予定としては、まず、「なろう」では、48本ある連載中小説を完成させてく。

読書量をふやしてく（インプットを増やす）

活動報告は4500件超え。なんかやりたいな。とーよーが面白いことしてる。

投稿済み小説は新旧合わせ、1000本くらい。

（うち長編4本）

執筆中小説はもうすぐ1000本。がんばろう。

すばる文学賞の発表は11月。今年の3月に投稿した。今年だめなら来年も出そう。参加することに意義ありと偉い人も言ってる。

まあ、オリンピックで負けて自殺した選手もおるが。まあそういう国もありますね。日本は大丈夫。そこまで真剣にやってない。

すばるは、エンタメ寄りの文学を応募してる。1300人くらい。エンタメだと軽いし、文学だと重いのでちょうどいい。エンタメす

る文学、文学するエンタメが書きたいね。

来年度のすばるは、ジャストホームに書いてく。

今年度のは、「なろう」から原稿用紙にトレースして苦勞した。推敲も兼ねてるが、まどろっこしいやり方をして鍛えたてのものもある。あるいは、昔漫画を描いてたゆえ、初心に返るため手書きを選んだ。しかし、手書きは、読む人が読みにくいゆえやらん方がいい。手書きは熱意が伝わるってのは幻想である。下読みの人は大量の原稿を低賃金で読んでる。オレもアルバイトだから苦勞よくわかる。次回からは、ワープロ原稿で送る。

ただ、規定によると、ウェブサイト上に発表されたものは投稿禁止とある。

てんわけで、「なろう」には発表できず。

落選したら載せます。載せるとしたら、2012年の11月以降となります。お楽しみに!!!!

規定に則り、100〜300枚の予定です。

スマイル大日本帝国 完(???)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1226y/>

スマイル大日本帝国（トータル版）

2011年11月1日18時24分発行